
仮面ライダー&リリカルなのは - - 継承者と魔法少女 - -

ディケイド・ストライク

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー & リリカルなのは - - 繙承者と魔法少女 - -

【NZコード】

N3402V

【作者名】

ディケイド・ストライク

【あらすじ】

突然現れたショッカー帝国、それに対抗すべく12人の仮面ライダーが戦い、全ての力を使ってショッカー帝国を封印する。

そして半年後、海鳴市に2人の転校生が現れ魔法少女達と出会う時、新たな物語が始まる。

プロローグ 12人の仮面ライダーVSショックカー帝国（前書き）

久しぶりの新作です。

是非、読んでみてください。

プロローグ 12人の仮面ライダー VS ショックカー帝国

とある世界

そこでは、様々な怪人とそれぞれの世界の仮面ライダーが戦つていた。

クウガ「はあ！！」

グロングギをアルティメットキックで蹴り飛ばす、仮面ライダークウガ アルティメットフォーム（クウガ）

アギトS「ハツ！！」

アンノウンをシャイニングクラッシュで切り裂く、仮面ライダーアギト シャイニングフォーム（アギトS）

「SHOOT VENT」

龍騎S「はあー！！」

ミラー モンスターをメテオバレットで撃ち抜く、仮面ライダー 龍騎 サバイブ（龍騎S）

「103」

「Blaster Mode」

ファイズB「はあ！」

〔Exceed Charge〕

オルフェノクをフォトンバスターで撃ち抜く、仮面ライダーファイズ ブラスターフォーム（ファイズB）

〔SPADE TWO THREE FORE FIVE SIX〕

〔STRAIGHT FLASH〕

ブレイドK「ウヒイー！」

アンテットをストレートフラッシュで切り裂く仮面ライダーブレイド キングフォーム（ブレイドK）

装甲響鬼「鬼神覚声！..！」

魔化魍を音撃刃・鬼神覚声で切り裂く仮面ライダー 装甲響鬼（装甲
響鬼）

〔KABUTO-POWER THEBEE-POWER DRA KE-POWER SASSWORD-POWER〕

〔All Sector Combine〕

カブトH「マキシマムハイパータイフーン！..！」

〔Maximum Hyper Typhoon〕

ワームをマキシマムハイパータイフーンで切り裂く仮面ライダーカ

ブト ハイパー フォーム（カブトH）

「Charge and up」

電王SC 「俺達の必殺技！」

イマジンを超ボイススターズスラッシュで切り裂く、仮面ライダー電
王 スーパークライマックスフォーム（電王SC）

キバット『ウエイク、アップ！』

キバE 「はあー！」

ファンガイアをファインアルザンバット斬で切り裂く、仮面ライダー
キバ エンペラーフォーム（キバE）

ショッカー 戦闘員「イーー！」

ライダー達が怪人達と戦っていると何処からか大量のショッカー戦
闘員、空中にはクライシス要塞が現れる。

アギトS 「今度は戦闘員ですか。」

ファイズB 「キリがないぜ！』

ショッカー 戰闘員と戦うライダー達。

「FINAL -ATTACK -RIDE.....DE、DE、DEC

【ADE】

『ディケイドCF「まあっ……」』

クライシス要塞に向かつて強化、ディメンションキックを放つ仮面ライダー、ディケイドコンプリートフォーム（ディケイドCF）

『ディケイドCF「鳴滻の奴、とうとう狂ったか！？』

『ディケイドCFはショッカー戦闘員をライドブッカー ソードモードで切り裂いていく。』

『そこにはパンチやマリーが現れ、ライダー達に襲いかかる』
るが。

【CYCLOZONE MAXMAM - DRIVE】

【HEAT MAXMAM - DRIVE】

【LUNA MAXMAM - DRIVE】

【JOKER MAXMAM - DRIVE】

『『プ・ト・ライラ～ノ、ヒッサー～！』

WCJX 「『ビックカーファイナリュージョン』『…』

オーズ「せいやーー！」

ビックカーファイナリュージョンとストレインドウームでヒッサー

やヤミーを吹つ飛ばす、仮面ライダーW サイクロンジヨーカーエ
クストリーム（WCJX）、仮面ライダー オーズ プロティラコン
ボ（オーズ）

「ディケイドCF」「ダブル、それにオーズか！？」

WCJX『ディケイド、力を貸そう…』

オーズ「まさか、ヤミーまで出でくるなんて…！」

WCJXはプリズムソードでオーズはメダガブリューでショックバー
戦闘員を切り裂いていく。

鳴滝「ディケイド、そしてライダー達よ此処が貴様達の墓場だ…！」

何処からか鳴滝が現れその後ろには大量の怪人達、空中には数十の
クライシス要塞がライダー達に向かって来る。

WCJX「まだ、居るのかよ…！」

装甲響鬼「少しキツいな。」

怪人達に押されていく仮面ライダー達。

鳴滝「どうだディケイド、これが貴様達ライダーを倒すために組織
されたショッカー帝国の力だ…！」

「ディケイドCF」「鳴滝の奴、とことん狂つているぜ…！」

「ディケイドCFが鳴滝に向かって切りかかろうとするが。

ディケイドC.F「ぐつ！…」

突然、鳴滝の前に黒い霧が現れディケイドC.Fを吹つ飛ばす。

アギトS「何だ！？」

龍騎S「鳴滝の仲間か？」

アギトSと龍騎Sはそれぞれの武器を構えて、黒い霧を見る。

鳴滝「我が主、遂に仮面ライダー達の最後です。」

鳴滝がそう言つと、黒い霧は人の形に変わつていく。

クウガH「凄い闇を感じます。」

ブレイドK「このままだと、他の世界も危ないぞ！…」

ファイズB「どうしたらいいんだよ！…」

ライダー達は現れた闇に危機感を感じていた。

ディケイドC.F「こうなつたら、俺達の力でアイツを封印するぞ！…」

電王S C「何だと！？」

キバE「土さん、本気で言つていいんですか！…？」

「ディケイドCF「ああ、ショッカー帝国の奴等をこの世界ごと封印するんだ!!」

カブトH「門矢、そんな事をすれば俺達はライダーとしての力を失つてしまつぞ。」

装甲響鬼「天道の言うとおりだ、俺達がライダーの力を失えば、誰が世界を守るんだ!?」

ディケイドCF以外のライダー達はディケイドCFの提案を反対するが。

クウガH「大丈夫ですよ、必ず僕達の力を受け継ぐ人が現れますよ。」

クウガHはそう言つと、クウガHの体が金色に輝きだす。

アギトS「そうですね、五代さんの言つ通りです。」

龍騎S「きっと、俺達の力を受け継ぐ人が世界を守ってくれるはずだ。」

アギトSと龍騎Sはそう言つと、金色に輝きだす。

ファイズB「受け継ぐ人が、世界中の人々の夢を守り」

ブレイドK「戦えない人の為の剣になってくれるはずだ。」

ファイズBとブレイドKも、金色に輝きだす。

装甲響鬼「それじゃ、俺達は奴を封印するか。」

カブトH「ああ」

装甲響鬼とカブトHも、金色に輝きだす。

電王SC（良太郎）「モモタロス、後はお願ひ。」

電王SC「…………良太郎」

キバE「人が奏でる音楽を守るために。」

電王SCとキバEも、金色に輝きだす。

WCJX「フイリップ…………」

WCJX『解つて いるよ、翔太郎。』

オーズ「未来のために!…！」

WCJXとオーズも金色に輝きだす。

鳴滝「何をするつもりだ!…！」

ライダー達を見た鳴滝は焦りだす。

ディケイドCF「鳴滝、貴様等をこの世界」と封印してやるぜ!…!

ディケイドCFは金色に輝きだと、12人のライダー達の輝きは徐々に周りを包んでいく。

鳴滝「おのれ――、ディケイド!――!――!」

鳴滝は灰色のオーロラを出現させ、オーロラの中に消え去った。

そして、ショッカー帝国は仮面ライダー達の力で一つの世界ごと封印された。

プロローグ 12人の仮面ライダーVSショックカー帝国（後書き）

次回、『通りすがりの転校生』

翔夜「次回から、俺の登場だな。」

雄司「俺達だろう。」

感想を待っています。

第1話 通りすがりの転校生（前書き）

時間軸は闇の書事件から四年後の海鳴市が舞台です。

第1話 通りすがりの転校生

ライダー達がショッカー帝国を封印してから半年後

「お兄ちゃん、起きてください。」

「後、10分だ。」

俺は妹に起こされていた。

「寝ぼけないでください、転校早々に遅刻するつもつですか？」

「解った、起きるよ。」

俺は目を覚まし、着替え始める。

そういえば、まだ自己紹介をしていないな、俺の名前は真導翔夜しんとう しょうや、

自分で言つのもアレだが文武両道の天才中学一年生。

「行くよ、お兄ちゃん。」

「つむは俺の妹の真導 ナシミ、現在小学3年生。

「一人とも、行ってらっしゃい。」

この人は俺とナシミの祖父の真導 栄市郎

、俺とナシミの保護者であり、真導^{マサド}と真館^{マハラ}の館長だ。

翔夜「行ってくれるぜ、爺さん。」

ナシミ「お爺^{マダム}さん、行つてきます。」

翔夜とナシミは[与]真館から出て行へ。

俺達は一週間前、ある事情で祖父の暮らしている海鳴市にやつて来た。

翔夜「ナシミ、新しい学校には慣れたか?」

ナシミ「うそ、新しいお友達も出来て楽しいよ。」

ナシミは二日前から私立聖祥小学校に通い始めた。

ナシミ「お兄ちゃんも、今日から学校だね。」

翔夜「そうだな。」

俺も今日から海鳴中学校に通い始める。

翔夜「そう言えば、雄司はどうしたんだ?」

ナシミ「雄司さんなら、一時間前に学校に向かいましたけど。」

翔夜「アイツ、場所が解らないのに大丈夫なのか?」

翔夜「アーッ、大丈夫だよ。」

ナシミ「雄司さんだから、大丈夫だと思つたんだ。」

俺達が言つてゐる雄司つて奴は、ビリジョウもないバカだ……

雄司「誰がバカだよ！？」

ナシミ「雄司さん？」

翔夜「お前、俺達より一時間も早く学校に行つた筈だ？」

雄司「迷つていた。」

翔夜／ナシミ「やつぱつ。」

翔夜とナシミは呆れた顔で雄司を見る。

コイツは渋島 雄司、どうしようもないバカで俺のパシリみたいな奴だが、仲間の事を一番に考えている奴だ、今は写真館の居候だけだな。

雄司「翔夜、お前は俺に対して恨みもあるのか？」

翔夜「さあな」

ナシミ「お兄ちゃん、雄司さん、私は先に行くね？」

雄司は何故か辛そうな顔をするが、翔夜は知らん顔をしていた。

雄司「頑張ってね、ナツミがけん。
」

翔夜「氣をつけろよ。」

ナツミ「ハイ。」

ナツミは翔夜と雄司から離れ、聖祥大附属小学校に向かった。

雄司「俺達も行こうか？」

翔夜「お前、場所が解らないだろ？？」

雄司「そうでした。」

翔夜「やっぱりバカだな。」

雄司と翔夜も海鳴中学校に向かっていた。

なのは「今日から、このクラスに転校生が来るの？」

フロイト「うそ、わつき職員室で聞いたの。」

はやて「一人暮らしで。」

すずか「楽しみだね。」

アリサ「どうでもこいわよ。」

高町 なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神 はやて、月村 すずか、アリサ・バニングスは教室で転校生の話をしていた。

担任「皆さん、今日から転校生が一人來たので紹介します。」

なのは達の担任がそう言つと、翔夜と雄司が教室に入つてくる。

翔夜「真導 翔夜だ。」

雄司「冴島 雄司です、みんな宜しくな。」

翔夜は無愛想に挨拶し、雄司は笑顔で挨拶する。

すずか「何か、1人は良い人だけど……」「……」

アリサ「絶対バカだね。」

はやて「もう1人も無愛想な奴やな。」

フェイト「そうだね。」

なのは（でも、カツ「いいな。）

約一名、少し顔を赤くしながら翔夜を見ていた。

そして、休み時間

「真導君、冴島君、何処から来たの？」

「前の学校では、部活をやっていたの？」

「どうして、この学校に？」

雄司「とりあえず、みんな落ち着いて！――！」

翔夜「やれやれだな。」

雄司はクラスの生徒からの質問責めに慌てるが、何故か落ち着いていた翔夜は何処からか赤いトイカメラを取り出す。

翔夜「とりあえず、撮るか。」

翔夜はクラスの生徒達の写真を撮つていく。

雄司「また、始まつたか」

雄司はそう呟くと、翔夜を見る。

フェイト「写真が趣味みたいだね。」

なのは「そろみたい。」

フェイトとなのはも翔夜を見ていた。

帰り道

翔夜「帰つたら、現像しよ。」

雄司「全く、よく撮るよ。」

翔夜と雄司は帰り道を喋りながら歩いていた。

翔夜「あれは！」

翔夜は何かを見つけると、突然走り出す。

雄司「翔夜！？」

海鳴市 廃工場

アリサ「どうして、こうなったの？」

すずか「私達、近くを通っていただけなのに。」

ゲルニユートA「ウルサイぞ、ガキ共！！」

ゲルニユートB「我々見たからには、タダでは帰さないぞーーー！」

廃工場ではアリサとすずかがゲルニユート達に捕まっていた。

シルバラ「さて、ガキ共を潰すか？」

ゲルニユート達のリーダー格のシルバラは金棒を振り回しながらアリサ達に近づく。

アリサ「やめて！！」

すずか「どうして、こうなるのー？」

アリサとすずかは泣き出してしまって泣き声になる。

シルバラ「ヤー、どんな音で潰れるかな？」

シルバラがアリサ達に金棒を振りかざそうとしたその時……

ゲルニユート「ぐわーーー！」

1体のゲルニユートが吹っ飛ばされる。

ゲルニユート「誰だー！」

ゲルニユート達が吹っ飛ばされた場所を見ると。

翔夜「ミラーモンスターに鬼の兄弟の片割れか。」

翔夜が歩いてくる。

すずか「アナタはー？」

アリサ「無愛想な転校生ー？」

翔夜「無愛想つて俺は真導 翔夜、そして」

翔夜は鞄から白の部分が赤に変わったディケイドライバーを取り出し、腰に装着する。

シルバラ「貴様、何者だ！？」

翔夜「通りすがりの転校生だ！！」

翔夜はライドブッカーから一枚のカードを取り出す。

翔夜「変身！」

「KAMEN-RIDE.....DEC ADE STRIKE」

翔夜はディケイドライバーにカードを装填すると、電子音と共に灰色の仮面とスーツを纏い、11のシリエットが重なると同時に数枚のプレートが突き刺さり鮮やかな黒と赤が仮面とスーツに浮かび上がり、エメラルドグリーンの眼が輝き、仮面ライダー・ディケイドVerストライク（ディケイドS）に変身する。

ディケイドS「その心に刻んどけ！！」

ディケイドSはライドブッカーをソードモードにして構える。

第1話 通りすがりの転校生（後書き）

オリジナルライダー紹介

仮面ライダー＝ディケイド Verストライク

ディケイドのマゼンタの部分が赤になった姿、クウガからオーズまでのライダーにカメンライド出来るが、まだファイルフォームライドや他のライダーのファイルアタックライドが使えない。

変身者は真導 翔夜。

第2話 始まる戦い（前書き）

今回から小説の書き方を変えました。
御了承ください。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第2話 始まる戦い

「はあ……」

ディケイドSはライドブッカー ソードモードでゲルニコート達を切り倒していた。

「何なの、あの転校生？」

「突然変身して、あの怪人達と戦つているし。」

翔夜の変身に驚くアリサとすずか。

「くつ、キリがないな！」

ディケイドSはゲルニコート達を切り倒すが、数はあまり減っていない
なかつた。

「//ラーモンスターなら、コレだわ！」

ディケイドSはライドブッカーから一枚のカードを取り出し、ディケイドライバーに装填する。

「KAMEN-RHDE……RYUKI」

電子音と共に、ディケイドSの姿が仮面ライダー龍騎（D.S.龍騎）に変わる。

「姿が変わった！？」

「一体、どうなつてこるの?」

「ディケイドのカメンライドに驚くアリサとすか。

DS龍騎「やで、一気にこいくか。」

「ATTACK・RIDE……STRIKE VENGE」

DS龍騎はアーマンクロードを召還し構える。

「はああ……はあっ……」

DS龍騎はアーマンクロード・ファイヤーでゲルニコート達を焼きぬくし、ゲルニコート達は爆発する。

「お前か、ディケイドの継承者は?」

シルバラは金棒を振り回しながらDS龍騎に尋ねる。

「継承者、何の事だ?」

DS龍騎は何の事か解らなかつた。

「何だ知らないのかよ、とにかくお前を潰す……」

そつ言つとシルバラは金棒を構え、DS龍騎に突っ込んでくる。

「ATTACK - RIDE..... SWORD VENT」

DS龍騎はドラグセイバーを召還し、シルバラの攻撃を受け止めるが。

「つおりやーー！」

「ぐつーーー！」

シルバラの一撃を受け止めきれずにドラグセイバーを折られ、DS龍騎は吹っ飛ばされ壁に叩きつけられる。

「くつ、コイツ馬鹿力かよ！？」

元の姿に戻ったディケイドSは一枚のカードを取り出す。

「鬼には鬼だな。」

「KAMEN - RIDE..... HIBIKI」

ディケイドSはカードをディケイドライバーに装填すると、仮面ライダー響鬼（DS響鬼）に変わり、更に一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「ATTACK - RIDE..... ONHIBI」

「はあつーー！」

DS響鬼はシルバラに向かつて鬼火を放つ。

「ぐつ……」

シルバラは金棒を盾にして鬼火を防ぐ。

【ATTACK - RIDE.....ONGEKIBOU - REKKA】

DS響鬼は音撃棒 烈火を召還しシルバラに向かつて突っ込む。

「小瀆な！！」

「ハツ！…！」

シルバラは金棒でDS響鬼を叩きつけようとするが、DS響鬼は音撃棒 烈火でシルバラの攻撃を受け流す。

「はあつ！…！」

「ぐつ！…！」

DS響鬼は音撃棒 烈火でシルバラを何度も叩き徐々にシルバラを後退していく。

「そろそろ、終わらせるか。」

DS響鬼はディケイドSに戻り、一枚のカードを取り出すが。

「やめた！…！」

突然シルバラが武器をしまい、目の前に灰色のオーロラが現れる。

「お前、どういうつもりだ！」

「今お前を倒すのも良いが、俺は大事な任務が有るからな。」

シルバラはそう言つと、灰色のオーロラの中に消えていく。

「あの野郎、ふざけやがって！！」

ディケイドSはそう言つと変身を解き、翔夜の姿に戻る。

「元に戻った？」

「もう、どうなつているの？」

すずかとアリサは目の前の出来事にただ驚いていた。

ディケイドSがシルバラと戦っていた頃、廃工場の近くでは1人の眼鏡を掛けた男性がディケイドSの戦いを見ていた。

「遂にショッカー帝国が動き出したか。」

すると男性の目の前に灰色のオーロラが現れ、男性は灰色のオーロラの中に入つていく。

「後は頼むぞ、翔夜。」

男性はそう言つと、灰色のオーロラの中に消えていく。

「アナタ、一体何者なの？」

「真導さん、正直に教えて下さい。」

「ち、ちょっと！？」

翔夜はアリサとすずかの質問責めにあつていた。

「あの化け物は一体何なの？」

「真導さん、アナタが変わったあの姿は？」

「ふ、2人共！？」

「それに、他の姿になつたし？」

「真導さん、あのオーロラは？」

「頼むから、落ち着いてくれ！……！」

「は、ハイ！」

翔夜の叫びで黙る2人。

「とりあえず、あの化け物はミラー・モンスターと鬼の兄弟で俺が変身したのは仮面ライダー・ディケイドだ。」

「ミラー・モンスター？」

「仮面ライダー・ディケイドって？」

翔夜は一人に質問に答える。

「とにかく、今日の事は忘れる。」

翔夜はそう言つと、ダッシュですずか達から離れていく。

「ちょっと、真導さん？」

「まだ質問が！？」

すずかとアリサは翔夜は呼び止めようとするが、既に翔夜は一人の視界から見えなくなつていった。

その夜、真導写真館では

「遂にショッカー帝国の奴らが動き出したか。」

「ああ、まさかこの街で戦う事になるしな。」

翔夜の部屋で翔夜は昼間の出来事を話していた。

「それより翔夜、お前クラスメイトの前で変身したのか？」

「ああ、別に大丈夫だろ。」

「いや、大丈夫じゃ無いだろ。」

「とにかく、明日はフォローを頼む。」

「マジで！？！」

雄司の叫びが写真館に響いた。

第2話 始まる戦い（後書き）

次回、仮面ライダーamp;リリカルなのは

すずか

「冴島君、真導君の事を教えて欲しいの。」

アリサ

「素直に喋りなさい……」

雄司

「翔夜の奴、何処に居るんだ！……！」

「……」

ディケイドS

「アンノウンには、『イツだらつ』……！」

なのは

「時空管理局です、武器を捨てて下さい。」

ディケイドS

「あれって、高町にテスタロッサ？！」

フロイト

「！」の声は？

なのは

「真導君？」

次回、『出会いは突然やつてくる』

全てを破壊し、全てを守れ！！

第3話 出会いは突然やつてくる（前書き）

今日は短いです。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第3話 出会いは突然やつてくる

翔夜と雄司が海鳴中学校に転校してきた次の日

海鳴中学校

「冴島君、 真導さんの事を教えて欲しいの。」

「あの無愛想な転校生は一体何者なの？」

「ち、ちょっと、一人共落ち着いて。」

朝から雄司は昨日の事をすずかとアリサから聞かされ、一人から質問責めにあつていた。

（やつぱり、人前で変身するなよ翔夜。）

雄司は心の中で、何故か学校に居ない翔夜の事を少し恨んでいた。

「素直に喋りなさい！！」

「やりすぎだよ、アリサちゃん。」

アリサは某刑事ドラマの「とく雄司を取り調べをしようとするが、アリサにツッコまれる。

「翔夜の奴、何処に居るんだ！――！」

雄司の叫びが教室に響く。

海鳴市 とある公園

「まさか、登校中にアンノウンに会ったとはな。」

その頃、翔夜が変身したデイケイドは複数のアントロードとオクトパスロード モリペス・オクティペス（オクトパスロード）と戦っていた。

【ATTACK・RIDE……BLAST】

「はあっ……」

デイケイドSはデイケイドブラストでアントロードを数体撃ち抜くと、デイケイドSは一枚のカードを取り出す。

「アンノウンには、ハイシだらう……」

デイケイドSは一枚のカードをデイケイドライバーに装填する。

【KAMEN・RIDE……AGH!-O】

デイケイドSは仮面ライダーアギト グランブルフォーム（ロウアギトG）に変わる。

「まつ……まつ……」

DUSTアギトGはパンチやキックでアントロード達を押していく。

〔FORM・RIDE……AGITO・FLAME〕

DSアギトGはフレイムフォーム（DSアギトF）に変わり、フレイムセイバーを取り出し構える。

「はあっ！！」

DSアギトFはフレイムセイバーでアントロード達を切り裂き、アントロード達は爆発する。

「後はタガだけか。」

「貴様がアギトか！？」

DSアギトFはティケイドSの姿に戻り、オクトパスロードはティケイドSに襲いかかるが。

「違うな、俺は通りすがりの仮面ライダーだ。」

ティケイドSはオクトパスロードの攻撃を避け、ライドブッカーをソードモードにして構え一枚のカードをティケイドライバーに装填する。

〔ATTACK・RIDE……SLASH〕

「その心に刻んどけ……」
「がつ……！」

「ディケイドSはディケイドスラッシュでオクトパスロードを切り裂く。」

「FINAL -ATTACK -RIDE.....DE、DE、DE、
DECade」

ディケイドSは一枚のカードをディケイドライバーに装填すると、オクトパスロードに向かつて12枚のカード型のエネルギーが出現し、ディケイドSはカード型のエネルギーの道を進みオクトパスロードに向かつてキックを放つ。

「おのれ、アギトー！」

ディケイドSの必殺キック、”ディメンションキック”がオクトパスロードに決まり、オクトパスロードは爆発する。

「だから俺は、ディケイドだ。」

「ディケイドSはそういつと、変身を解こうとするが。

「時空管理局です、武器を捨てて下さい。」「今の声は？」

ディケイドSが空を見ると、バリアジャケットを着たなのはが“デバイス”レイジングハート”を構えていた。

「なのは、謎の反応が消えた。」

更に、なのはの所にバリアジャケットを着たフェイトも“デバイス”バルディッシュュ”を携え現れる。

「あれって、高町にテスタロッサ?」

「この声は?」

「真導君?」

ディケイドSの声に驚くフェイトとなのは。

「それって、コスプレか?」

「「えつ?」」

ディケイドSの一言に驚く一人。

コレが魔法少女と仮面ライダーの最初の出会いだった。

第3話 出会いは突然やつてくる（後書き）

次回、『時空管理局』

翔夜

「今日は次回予告は無いんだ。」

雄司

「それより、俺の扱いと出番は？」

フエイト

「次回は私の家族が出てきます。」

なのは

「冴島君の出番は無いけどね。」

雄司

「〇〇」

感想や質問を待っています。

第4話 時空管理団（前書き）

今回は、戦闘はありません。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第4話 時空管理局

「それって、コスプレか？」
「「えつ？」」

ディケイドの一句に驚く一人。

「何で一人共、コスプレ何かしているんだ？」
「コスプレじゃないよ。」
「コレはバリアジャケット。」

変身を解いた翔夜はなのはとフロイトの格好をコスプレ扱いするが、
なのはとフロイトはソレを否定する。

「それより真導君、さつきの姿は？」
「魔力の反応がなかつたけど。」
「ちょっと二人共、落ち着いて。」

なのはとフロイトからの質問責めにあつ翔夜。

(とりあえず、逃げるか。)

翔夜は一人から逃げようとするが。

「逃がしません。」
「えつ！？」

なのはは逃げよつとする翔夜にバインドで捕縛する。

「とりあえず、事情を説明してください。」

「解ったよ、とりあえず、写真館に来い。」

「「写真館？」」

フェイトは翔夜に事情を説明を頼み、翔夜は写真館で事情を話す事になる。

真導写真館

「お母さん、それにお兄ちゃん…！」

「じこさん、何やつているんだ？」

翔夜達が写真館に戻つて來ると、何故か写真館では「コービー」を飲んでいたフェイトの母親、リンディ・ハラオウン（リンディ）とクロノ・ハラオウン（クロノ）と「コービー」をだしていた栄市郎が居た。

「お帰り、翔君。」

「あらフェイト、來ていたんだ。」

「ちょうど良い、みんな話があるんだ。」

栄市郎を除いて写真館のリビングでクロノ、リンディ、なのは、フェイト、翔夜は話し合いを始めた。

「とりあえず、さつきフェイトとなのはから君の事は少し聞いたが、君が変わったあの姿と化け物の事を説明してくれるか？」

「解った、だが条件がある。」

クロノは翔夜にディケイドの姿と怪人達の説明を頼むが、翔夜はクロノに条件を出す。

「お前ら時空管理局の事を教えてくれ。」

「解った。」

翔夜は時空管理局についてクロノ達に聞く。

「まずは時空管理局のことね、時空管理局は次元世界などの世界を管理することを目的とし他にも災害の救助などを魔法等を使用し解決したりする組織よ。」

リンディは翔夜に時空管理局について説明をする。

「今度は、君が変わったあの姿について話してくれ。」

「ああ」

翔夜は鞄からディケイドライバーを取り出す。

「これはディケイドライバー、半年前にある人から貰つたディケイドライバーになるための変身ツールだ。」

「デバイスみたいなものだね。」

「見たところ、かなり精巧に作られているけど、誰が作つたんだ。」

リンディとクロノはディケイドライバーを見ながら、クロノは翔夜にディケイドライバーの製作者について聞く。

「コレの製作者は結城丈二、俺はその人からコレを受け取り、あ

の化け物達の事を聞いた。「

「そ、うなんだ。」

「解った、今度は君達に話があるんだ。」

「私達に？」

「何な、お兄ちゃん？」

リンディとクロノは翔夜の説明に理解し、クロノはなのはとフェイ
トにある話を始める。

「実は、数週間前に失つた空間を確認したんだ。」ロストフィールド

「「ロスト……フィールド」」

「何だ、ロストフィールドって？」

翔夜はクロノにロストフィールドについて質問する。

「ロストフィールドって言つのは、簡単に言えば消えた別世界の事
よ、でもロストフィールドは外部からの干渉は出来ないし、内部か
らも反応が無いことが殆どだけど。」

翔夜の質問にフェイドが答える。

「でもクロノ君、ロストフィールドが確認された位で何か起きたの
？」

なのははクロノに質問する。

「実は、数日前からそのロストフィールドで謎の反応が次々と他の
世界に送られているんだ。」

「えつ！？」

クロノの発言に驚くなのはヒュイト。

「まさか、謎の反応があの化け物達の事か？」

「その通りだ真導君、現在、謎の反応は此処海鳴市とミシドチルダを中心に送られている、ちなみにロストフィールドの調査はユーノが現在調べている。」

「ユーノ君が！？」

「誰だ？」

「なのはに魔法を教えた人。」

クロノの話に驚くなのはと話についてこれない翔夜、その翔夜に説明するフェイト。

「とにかく、ロストフィールドの事を調べる為に私とクロノもしばらくはこの町に居るは。」

「解ったは、母さん。」

リンディとクロノは暫く海鳴市に居ることになる。

「それから、真導君。」

「何だ？」

「君も私達に協力してほしいんだけど。」

リンディは翔夜に協力を要請するが。

「ダメだ。」

翔夜はリンディの要請を断る。

「何で？」

「どうしてなの？」

フュイトとなのはは翔夜に訳を聞い「うとするが。

「お前達の事は大体解つたが、あの化け物達には手を出すな、あの化け物達は俺が破壊する。」

翔夜はそう言つと『真館から出て行く。

第4話 時空管理局（後書き）

次回、仮面ライダーamp;リリカルなのは

雄司

「何で、ついて来るんだよ！？」

アリサ

「まだ、あの転校生について聞いてないわ。」

アリサ

「あれは！？」

雄司

「グロングギー！」

シン

「君達、早く逃げなさい！…！」

雄司

「もう誰も、悲しませたく無いんだ…！」

グムン

「クウガ！？」

次回、『変身』

感想を待っています。

第5話 変身（前書き）

今回も短いです。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第5話 変身

翔夜がクロノ達と話し合っている頃

海鳴市の市街地では

「何で、ついて来るんだよ！？」

「まだ、あの転校生について聞いてないわ。」

写真館に帰る途中の雄司とそれについて来るアリサが歩いていた。

「それより、何で翔夜の事を知りたいんだ？」

「何でつて、それは…………」

雄司の質問に考え込むアリサ。

「あんまり、人の詮索をしない方が良いよ。」

雄司はそう言いつとアリサから離れて行ぐが。

「何だ！？」

「あれは！？」

雄司達の近くで大きな爆発音が聞こえ、アリサが爆発した方を見ると。

爆発がした場所ではトラックが横転しており、周りの人達は逃げて

いた。

「此処にあのベルトがある。」

「忌々しいクウガのベルトが。」

「全員、アーフルを死守するんだ。」

「「「了解」」」

トラックの近くにはを黒いライダースーツを着て拳銃を構えた数人の男達とクモ種怪人のズ・グムン・バ（グムン）とコウモリ種怪人のズ・ゴオマ・グ（ゴオマ）が戦っていた。

「あれは！？」

「グロングギ！！」

グロングギに驚くアリサと雄司。

「リント！！」

「きやーつー！」

「アリサちゃん逃げて！！」

グムンは雄司達を見ると、雄司達に向かって襲いかかる。すると

叫ぶアリサを庇つように雄司は前に出てグムンを止めるが。

「邪魔だ！！」

「わっ！！！」

グムンは雄司をトラックに投げ飛ばし、再びアリサに襲いかかる。するとするが。

「ぐつ……」

グムンは後ろから何かを喰らい後ろ見ると。

「君達、早く逃げなさい……！」

「オマと戦っていた男達同様に黒いライダースーツを着た一人の男性がバースバスターを構えていた。

「君、早く逃げなさい……！」

「でも、アイツが……化け物に……ぶつ飛ばされて……」

男性はアリサに逃げるよつに言つたが、アリサは雄司が投げ飛ばされた事に驚いていた。

「痛かつた……！」

グムンに投げ飛ばされた雄司は横転したトラックの荷台で頭を抑えていた。

「何だ、このトランクは？」

雄司は一つのトランクを見つけ、トランクを開けよつとする。

「コレは、クウガのベルト！？」

トランクの中に入っていたのはアーフルだった。

「ぐわっ！！」

「強い！！」

「このままじゃ全滅する！！」

雄司がアーフルを拾うと、ゴオマと戦っていた男達の叫びが聞こえる。

「俺も戦う時が来たみたいだぜ、翔夜。」

雄司は思い出していた、ショッカー帝国を倒す為に破壊者として戦う事を決めた仲間の事を。

「どうした、リントの戦士！？」

「くっ、このままアーフルが奪われる。」

グムンと戦っていた男性はアリサを守りながらトランクの方を見ていた。

その時、

トランクの荷台からアーフルを持った雄司が出て来る。

「アイツ、生きていたの！？」

「あれは、アークル！？」

雄司に驚くアリサと男性。

「あれは、クウガのベルト！？」

「リントがどうするつもりだ！？」

ゴオマとグムンは雄司の前に現れる。

「君、そのベルトを持って逃げるんだ！！」

男性は雄司に逃げるよつて言つたが。

「嫌です。」

雄司はアーフルを腰に着ける。

「君、何をしているんだ！？」

「誰も傷ついて欲しくないんですね！？」

男性は雄司の行動に驚くが、雄司は叫ぶよつて男性に言つた。

「リントが貴様に何が出来るんだ？」

ゴオマは雄司を殴りうつとするが。

「俺はもう誰も、悲しませたく無いんだ！！」

雄司はそう言つてゴオマの攻撃を避け、ゴオマを殴り飛ばす。

「変身！！」

雄司は仮面ライダークウガ マイティフォームに（クウガM）に変身する。

「その姿はー？」

雄司の姿に驚くアリサ。

「クウガ、仮面ライダークウガさ。」

クウガMは仮面の下でサムズアップする。

「クウガ！！」

グムンはクウガMに向かって殴りかかるが。

「ハッ！..」

クウガはグムンを攻撃を避け、パンチやキックでグムンにダメージを与えていく。

「おのれ！！」

「ぐつ！..」

グムンはクウガMに向かって糸を吐きクウガMの右腕に絡みつく。

「覚悟しろ、クウガ！..」

グムンはクウガMに向かって襲いかかろうとするが。

「ぐあつ！！」

突然、グムンは銃弾を喰らいクウガMの右腕に絡みついた糸が千切れる。

「アナタは！？」

クウガMは銃弾が放たれた方向を見ると

「俺は前園 シン、仮面ライダークウガ、一気に決めるんだ！！！」

「ハ、ハイ！！」

バースバスターを構えた男性、前園 シン（シン）はクウガMにグムンを倒すように言いつ。

「はああああ…………はあつ！！！」

「ぐあああつ！！！」

クウガMの必殺キック、マイティキックがグムンに喰らい、グムンは爆発する。

「おのれ、クウガ！！」

ゴオマはクウガに向かって襲いかかろうとするが。

「FINAL -ATTACK -RIDE……DE、DE、DEC
A DE」

「ハツ！！」

「ぐあつ！！」

電子音と共に、「ゴオマに向かつて1~2枚のカード型のエネルギー」が出
現し、エネルギー弾が「ゴオマに当たつ」、「ゴオマは爆発する。

「全く、「写真館から出てみればグロングかよ。」

クウガM達の前にライドブッカーをガンモードにしたディケイドS
が現れる。

「翔夜！！」

「お前、雄司なのか！？」

「もう、どうなつているの？」

ディケイドSの登場に驚くクウガM、雄司が変身したクウガMに驚
くディケイドS、そんな二人に解らなくなつていたアリサ。

「副隊長、見つけました。」

シンは少し遠くでディケイドS達を見て、無線で誰かと話していた。

「ディケイドとクウガの継承者を。」

第5話 変身（後書き）

次回、仮面ライダーamp;リリカルなのは

紅牙

「君、良く此処に来るね。」

すずか

「黒月君、何なのこの蝙蝠は？」

キバット

「俺様はキバットバット？世、宜しくなお嬢さん。」

ホースファンガイア

「人間、覚悟しろ！！」

紅牙

「キバット！-！」

キバット

「よつしゃ、キバッていぐぜーーー！」

次回、『運命・牙の戦士』

感想を待っています。

第6話 運命・牙の戦士（前書き）

今回はキバの登場です。

（最近、投稿する話が短いです。）

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第6話 運命・牙の戦士

海鳴中学校
音楽室

音楽室から美しいバイオリンの音色が聞こえていた。

「凄いな、黒月君。」

音楽室にはバイオリンを弾く男子生徒（黒月 紅牙）と、それを見
るすずかが居た。

「君、良く此処に来るね。」

あ、あのー、邪魔でしたか//////

紅牙はすずかに気づき、すずかは顔を赤くする。

「別に良いよ、いつも僕の演奏を聞いているの？」

「えり、
それま

紅牙の質問に焦るすずか。

「フフフ、別に良いよ人の感想は人それぞれ違つかね。」

גַּדְעָן

紅牙は微笑しながらすずかを見ると、すずかは顔を更に赤くしていた。

「おーい紅牙、そろそろ公園に行こうぜ。」「えつ！？」

突然、音楽室の窓から金色の蝙蝠^{キバット}が現れ、すずかはそれに驚く。

「いらキバット…ゴメンね驚かせて。」

紅牙は金色の蝙蝠^{キバット}に怒り、すずかに謝る。

「黒月君、何なのこの蝙蝠は？」

すずかはキバットに指を指しながら紅牙に聞くと。

「俺様はキバットバット？世、宜しくなお嬢さん。」

キバットはすずかに挨拶をする。

「キバット、あれほど学校に来ないでって言つた筈なのに。」

「ゴメンな紅牙、でも俺様は早く公園に行きたいんだ。」

「それで、本音は？」

「公園にある屋台の綿菓子が食べたい…………あつ！」

キバットの本音を聞いた紅牙はキバットに笑顔を見せながら、後ろには一瞬でキバットが恐怖を感じるオーラが出ていた。

「ナニヤア」

音楽室にキバットの叫び声が響いていた。

海鳴市 市街地

「それより翔夜、本当に大丈夫なのか？」

「アーチャー卿が此處に御用意な御用事はございません。」

「大丈夫だろ？……多分な。

- 多分かよ！！

さつきまでグロングギと戦っていた雄司と翔夜は市街地を歩いていた。

「大体、俺達がすぐに消えたのに、誰も追いかけてこないしな。」
「確かにそつだが。」

翔夜は自信を持つて雄司に言つと、雄司は心配した表情で後ろを見ていた。

海鳴市
公園

「黒月君にバイオリンの先生が居るんだ。」

「偶に」の公園に居るんだけどね。」

公園では紅牙とすずかが喋りながら歩いていた。

「言つておくけど、紅牙の先生はかなりのナンパ師だから気をつけろよ、すずかちゃん。」

「えつ／＼／＼

「キバット、また痛めつけられたいの？」

何故か頭に大きなたんこぶを作ったキバットがすずかに余計な一言を言つと何故かすずかは顔を赤くし、紅牙は再びキバットに向けて恐怖のオーラを出していた。

「スイマセン、紅牙。」

キバットはそう言つと、紅牙達から離れていく。

「全く。」

「まあまあ黒月君、キバットも悪気が無いわけじゃないし。」

キバットに怒る紅牙とすずかは紅牙を宥めていると。

「キヤー！－！」

「助けて！－！」

紅牙達の後ろから突然悲鳴が聞こえ、振り返つてみると。

「人間、覚悟しろ！！」

ホースファンガイアが女の子を襲おうとしていた。

「あれは！？」

ホースファンガイアの出現に驚くすずか。

「ファンガイア！！」

「ぐつ！…」

紅牙はホースファンガイアを見ると、ホースファンガイアに向かつて思いつきり蹴り飛ばす。

「早く逃げるんだ。」

「ありがとう、お兄ちゃん。」

紅牙は女の子に逃げるように言つと、女の子は紅牙にお礼を言つて逃げていく。

「すずかちゃん、下がつていて。」

「でも、黒月君は大丈夫なの？」

紅牙はすずかに下がるように言つと、すずかは紅牙を心配する。

「大丈夫、慣れているから。」

紅牙はそつ言つと、何処からかキバットが現れる。

「まさか、貴様は！？」

ホースファンガイアはキバットを見ると、突然慌てだす。

「キバット！！」

「よつしゃ、キバッていくぜ！ ガブリ！！」

「変身」

紅牙は仮面ライダー・キバ キバフォーム（キバK）に変身する。

「貴様がキバの継承者か！？」

ホースファンガイアはそう言いつと剣を取り出しキバKに襲おうとする。

「ハツ！！」

「ぐあつ！！」

キバKはホースファンガイアの攻撃を避けるとキックやパンチでホースファンガイアを押していく。

「ぐつ、舐めるなよキバ！！」

ホースファンガイアはキバKのバックルを目掛けて切りかかろうとするが。

「どうだ、馬面。」

バックルにぶら下がっていたキバットがホースファンガイアの剣を受け止めていた。

「そろそろ決めるぜ、紅牙！！」

「ウェイクアップ！！」

キバKは赤いフェイスルをキバットに吹かせると、キバKは高く飛び上がる。

「はああっ！！」

「ぐああっ！！」

キバKの必殺キック ダークネスマーンブレイクが決まり、ホースファンガイアは爆発する。

「ふう」

「疲れたな、紅牙。」

キバKは変身を解く。

「黒月君、その姿は？」

すずかは紅牙に質問するが。

「ゴメン、すずかちゃん。」

紅牙はそれだけ言つとキバットと共に何処かに走り去つていく。

「黒月君」

すずかは寂しそうな顔をして紅牙の後ろ姿を見ていた。

その頃、海鳴中学校の屋上では。

「此処に電王の継承者が居るんだな。」

赤い鬼が学校全体を見ながら、誰かを捜していた。

第6話 運命・牙の戦士（後書き）

次回、仮面ライダー&リリカルなのは - - 繙承者と魔法少女 - -

モモタロス

「此処は何処なんだ!!!!!!」

はやて

「おおきこ、といひで名前は?」

健太郎

「俺は沢田 健太郎、よろしくはやてちゃん。」

バットイマジン

「見つけたぞ、新たな特異点……」

モモタロス

「お前の願いを言え、叶えてやるよ……」

M 健太郎

「俺、参上……！」

次回、「電王、参上……！」

感想を待っています。

第7話 電王、参上！（前書き）

今回は電王の登場です。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第7話 電王、参上！－！

紅牙とすずかが公園に向かつっていた頃、

海鳴中学校 屋上

突然、屋上に赤い光の玉が落ちてくる。

「あ～、痛かった。」

赤い光の玉は砂に変わり、砂は異形に変わっていく。

「全く、デンライナーから落ちるし、亀公達とは離れるし、良太郎の不幸が移つちまつたかな？」

砂の異形は赤い鬼の異形に変わり、何故かお尻を抑えていた。

「それよりも」

赤い鬼は周りを見る。

「此処は何処なんだ！！！！！」

赤い鬼の叫び声が学校の屋上に響き渡る。

「IJの本、面白いな。」

図書室では、なのは達の仲間、八神 はやてが一冊の本を読んでいた。

「さてと、次の本を読むか。」

はやとはそう言つと一番上の棚にある本を取ろうとするが僅かに届かず、しかも数冊の本がはやてに向かつて落ちてくる。

「しまつ 「危ない！……えつ！？」

はやてはよけようとした瞬間、一人の男子生徒がはやてを庇い、はやてはそれに驚く。

「大丈夫か？」

「大丈夫、これくらい平氣だよ。」

はやては庇ってくれた男子生徒を心配するが、男子生徒は平氣な顔をはやてに見せるが。

「んぶつ

突然、数十冊の本が男子生徒の後頭部に目掛けて落ちてくる。

「何で大量に落ちてくるんや？……って、ほんまに大丈夫か？」

はやては田の前の状況に思わずツッコミをいれて、再び男子生徒を心配する。

「大丈夫、慣れているから。」

男子生徒はそう言つと、少しフランクながらも起き上がる。

「慣れているって、どういう事なん？」

男子生徒の一言に驚くはやで。

「それより、これを取りたかったの？」

男子生徒ははやてが取るつとした本をはやてに見せる。

「おおきこ、元ひで名前は？」

はやては本を受け取ると男子生徒に名前を聞く。

「俺は沢田 健太郎、よろしくはやてちゃん。」

沢田 健太郎（健太郎）ははやてに自己紹介する。

「えつ、何でウチの名前を知ってるん？」

「あ～、何時も此處で見かけるから覚えたんだ。
「そりなんや。」

健太郎の説明に納得するはやで。

「それにしても、本当に居るのか電王の継承者が？」

赤い鬼はグランドを見渡しながら嘆いていた。

「何だ、あれは？」

赤い鬼は何かを見つける。

海鳴中学校 グランド

「大丈夫か、沢田君？」

「大丈夫、いつもの事だから。」

ボロボロになつていた健太郎は此処に来るまで階段から転げ落ちたり、突然水を被つたり、ドアに挟まれたり、ずっと不幸な目に遭つていた。

「どんだけ不幸なん?」

はやては健太郎にツツコむと同時に少し心配していた。

「キヤー！！」

「化け物だ！！」

突然、グランドに居た生徒達が叫びだす。

「見つけたぞ、新たな特異点！！」

バットイマジンがグランドに現れ、健太郎達に襲いかかろうとする。

「何やアレは？」

「はやてちゃん、逃げて！！」

はやてはバットイマジンに驚き、健太郎ははやてを逃がそつとする。

「死ね！！」

「もうダメだ！！」

バットイマジンが健太郎に襲いかからうとした瞬間、健太郎の前に赤い鬼が現れる。

「まさかイマジンに出会すとはな。」

「貴様は！？」

バットイマジンを赤い鬼を見ると急に焦りだす。

「思わなかつたぜ！！」

「ぐつ！！」

赤い鬼はバットイマジンを殴り飛ばすと健太郎の方を見る。

「オイ、お前！！」

「ほ、僕の事！？」

赤い鬼は健太郎を呼び、健太郎はそれに驚く。

「お前の願いを言え、叶えてやるよーー！」

赤い鬼はそう言つと、ライダー・バスを取り出す。

「僕の願い？」

健太郎はグランドに居た生徒達が逃げていく中、自分を心配して残つてゐるはやてを見る。

「力が欲しい、誰かを守れる力が欲しいんだーー！」

健太郎はそう言つと、赤い鬼が持つていたライダー・バスを取る。

「良く言つたぜ、お前の願いを聞いてやるよーーー！」

赤い鬼は健太郎の体の中に入る。

「健太郎君ーー？」

はやはでは健太郎と赤い鬼の行動に驚く。

「俺、参上ーーー！」

髪に赤いメッシュのついた健太郎はポーズをとると、自らの腰にデントオウベルトが現れる。

「変身ーー！」

【 SWORD FORM 】

健太郎？は仮面ライダー電王 ソードフォーム（電王S）に変身する。

（一体、どうなっているの！？）

「悪い悪い、説明しないといけないな。」

電王Sの变身に驚く健太郎、ちなみに健太郎の声は赤い鬼にしか聞こえていない。

「この姿は仮面ライダー電王、お前の力だ。」

（僕の力。）

「貴様等、纏めて倒してくれる。」

バットイメージンは電王Sを見て襲いかかるとするが。

「オラアツー！」

「ぐつーーー！」

電王Sはバットイメージンをヤクザ蹴りでぶつ飛ばす。

「まだまだーーー！」

電王Sはバットイメージンの胸ぐらを掴むと。

「もういいよ……」

「ぐあつ……」

電王Sはバットイマジンに頭突きを喰らわす。

「何か滅茶苦茶な戦い方やな。」

はやては電王Sの戦い方を呆氣なく見ていた。

「そう言えば、お前の名前は？」

（俺は沢田 健太郎。）

「健太郎か、俺はモモタロスだ。」

（よろしく、モモタロス……）

健太郎と赤い鬼モモタロスは互いに自己紹介をすると、電王Sはテンガツシャーを取り出し、テンガツシャーをソードモードにする。

「健太郎、見せてやるよ俺の必殺技を。」

〔F.U.〕 CHARGE]

電王Sはテンガツシャーを構え、バットイマジンに向かつて突っ込む。

「俺の必殺技、PART1……！」

「ぐあつ……」

電王Sの必殺技、エクストリームスラッシュでバットイマジンを切

り裂き、バットイマジンは爆発する。

「あ～、終わった終わった。」

電王Sは変身を解き、健太郎とはやては改めてモモタロスの姿を見ると。

「鬼やな。」

「そうだね。」

「俺は鬼じゃねえ！！」

モモタロスを鬼だと勘違いするはやてと健太郎。

そんな中、電王Sの戦いを遠くからシンが一部始終見ていたのは誰も知らない。

第7話 電王、参上！（後書き）

次回は未定です。

モモタロス「未定かよ！？」

キバット「何か不安だな。」

感想を待っています。

第8話 翔夜の吸難と初めての共闘（前書き）

今回は滅茶苦茶です。（タイトルで）

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第8話 翔夜の収容と初めての共闘

海鳴市 ???

「廃工場に市街地、公園や中学校か」

「ハイ、ここ数日でショッカー帝国の活動が活発なのが解ります。」

海鳴市のある施設の一室ではシンは上司と思われる人物と話し合ひをしていた。

「それにしても、副隊長よろしくのでしちゃうか？」

「何が？」

「我々が継承者にコンタクトをとらない事ですよ……」

シンは仏頂面で副隊長に怒鳴る。

「まあまあ前園ちゃん、落ち着いて。」

「コレが落ち着いていられますか？」

副隊長はマイペースにシンを宥め、シンは副隊長に呆れながらも落ち着く。

「確かにアーフルの護送の時は、クウガビティケイドに余計な接触はするなと言つたけど。」

「副隊長、彼らにコンタクトを取らないんですか？」

前園は副隊長にコンタクトを取らない理由を聞かなければするが。

「前園ちやん、何で焦るの？」

副隊長はマイペースを保つたままだつた。

「忘れたのですか、我々の目的は継承者達と共にショッカー帝国と戦う事ですよ。」

「なら、もし継承者が敵になつた時はどうするんだ？」

「そ、それは…………」

副隊長の一言で考え出すシン。

「継承者の方は4人が確認出来てゐるんだ、もしかしたら継承者の1人は既にショッカー帝国についているかも知れないんだぞ。」

「確かにそう言う可能性も有るかも知れませんが。」

「それに俺と隊長の変身ツールはまだ最終調整が終わつてないからな。」

副隊長はそう言つて席を立つ。

「じゅりり行かれるんですか？」

シンは副隊長に尋ねるが。

「おでんを食べてくれる。」

副隊長はやうやく部屋から出て行く。

「全く副隊長は。」

シンは呆ながら部屋を出ようとすると、

「アラゼ？」

シンはドアの前に落ちていた一枚の紙切れを拾い上げ、紙切れに書かれていた内容を読む。

『とりあえず継承者の監視は引き続き頼む、ついでに俺のデスクに置いてある報告書の作成も。』

「副隊長、またですか。」

紙切れを読んだシンは再び副隊長に呆れる。

真導写真館 翔夜の部屋

「すーすー^ズ_ズ」

グロングギと戦いから数日経つたある日、翔夜は自分の部屋で寝ている。

「お兄ちゃん、起きてますか?」

翔夜の妹、真導 ナツミが翔夜の部屋に入つてくる。

「むつ、やつぱり寝てますね。」

ナツミは翔夜を見ると親指を構える。

「少々手荒いですが、笑いのツボ！..」

「ハハハハハハ！！」

ナツミは翔夜の首もとに親指を突くと突然、翔夜は笑いながら飛び起きる。

「ナツミ、笑いのツボを使つなよーー..」

田を覚ました翔夜はナツミに怒るが。

「だつて、今日はケーキ屋さんに行こうって約束したじゃない。」

「あつ、やうだつたな！？」

翔夜はナツミとの約束を思い出す。

「もしかして、忘れていましたか？」

ナツミは再び親指を構えていた。

「忘れていました。」

その瞬間、俺は一度田の笑いツボを喰らつた。

ちなみに何故ナツミが笑いツボを使えるのは半年位前に出会ったお姉さんに教わつたらしい。

とりあえず笑いが止まつた俺は着替えてナツミと共に翠屋に向かつた。

ちなみに雄司は朝からランニングで何処かに出かけ、じこうさんは写

真館の店番をしていた。

海鳴市 翠屋

「こりつしゃこま…………あつ、 真導君。」

翠屋に入った真導兄妹は店手伝いをしていたなのは当然だ。

「お兄ちゃん、 お友達ですか？」

「あら、 妹さんなの？」

ナツミは戸惑いながら

「ほんにちは、 真導 ナツミです。」

「ほんにちは、 高町 なのはです。」

互いに自己紹介をする二人。

「なのはさんは、 お兄ちゃんの彼女ですか？」

「えつ！？」

ナツミの突然の一言に驚くなのはと翔夜。 それと同時に何処からか
翔夜に向けて二つの殺気が放たれていた。

「違うんですか？」

「違うからな、ナツミ。」

「違うよ（ナ、ナシ）!! わかん、わ、私の事をし、真導君のか、彼女
だとお、思つてこぬのー?）————」

誤解するナシ!!、誤解を解こうとする翔夜、そして顔が赤くなりながらドキドキしていたなのは。

「あら、なのはのお友達？」

翔夜達の所になのはの姉・高町 美曲希（美曲希）が来る。

「同じクラスメイトの」

「未の眞尊」一ノ二

「翔夜君にナツミちゃんね、なのはの姉の美由希です。」

翔夜とナツミは美由希に自己紹介をする。

「翔夜君はもしかして、なのはの彼氏？」

美由希の発言に驚く翔夜と再び顔を赤くするなのは。そして再び翔夜に向けて2つの殺氣が放たれていた。

「違うの？」

「違うよお姉

まだ顔を赤くしながら誤解を解こうとするなのは。

「それより、もの凄い殺氣を感じるんだが。」

翔夜はさつから自分に向けて放たれていた殺氣を感じていた。

(なのは、聞こえる?)

(フロイトちゃん?)

突然、フロイトからの念話が聞こえる。

(どうしたのフロイトちゃん?)

(港に例の反応が確認されたの、すぐに向かってくれる?)

(解った。)

なのはは念話を終えるとすぐ翠屋から出て行く。

「ナツミ、此処に任せ。」

翔夜はさつと翠屋から出て行く。

「何なんだ、あの男は!?」「
「なのはが、あんな顔をするし!...」
「もう、あなた達は。」

キッチンではなのはの父・高町 士郎と兄・高町 恭也が翔夜に向けて殺氣を放っていたのを母・高町 桃子が呆ながら見ていた。

海鳴市 とある港

「人間達よ」

「消える！！」

港ではジャッカルロード スケロス・ファルクス（ジャッカルロード）とワームオルフェノクが暴れていた。

「時空管理局です、武器を捨てて投降してくださいーーー」

空中からバリアジャケットを着たなのが現れる。

「魔導師か？」

「失せろーーー！」

ジャッカルロードは大鎌から衝撃波を放つ。

「うわっーーー！」

ジャッカルロードの攻撃を喰らい、なのはは地面に叩きつけられる。

「死ねーーー！」

ワームオルフェノクはなのはに襲いかかるとする。

（もう駄目ーーー？）

なのはは心の底で諦めかけるが。

「はいーー。」

「ぐおーーー。」

なのはの所に翔夜は駆けつけ、翔夜はワームオルフェノクを殴り飛ばす。

「真導君！？」

なのはは翔夜を見て驚く。

「あの時、手を出すなって言つたはずだよな。
「やうだけじ。」

なのはは立ち上がる。

「とにかく、無茶はするなよーー。」

翔夜はやう言つてトイケイドライバーを取り出す。

「真導君」

なのはもレイジングハートを構える。

「それから、翔夜で良いからな。」

〔KAMEN・RIDE〕

「変身！！」

〔DECade Strike〕

翔夜はディケイドSに変身しライドブッカーをソードモードにして構える。

「おのれ！！」

ジャッカルロードは大鎌を振り回しながらディケイドSに襲いかかる。すると、

「はあっ！！」

ディケイドSのライドブッカーとジャッカルロードの大鎌がぶつかり合いつ。

「ディケイド、覚悟！！」

ワームオルフェノクはディケイドに襲いかかる。すると、

「アクセルシューター！」

ワームオルフェノクに向かつて数十の魔力弾が放たれる。

「ぐはっ！！」

なのはの攻撃で吹っ飛ばされるワームオルフェノク。

「私が相手です。」

レイジングハートを構えたのは、ワームオルフェノクの相手をする。

「はあつ！！」

「ぬあつ！！」

ディケイドSはライドブッカーでジャッカルロードを切り裂くが、ジャッカルロードはディケイドSの攻撃に耐える。

「しぶといな、なら「レはビツだ！！」

ディケイドSは一枚のカードを取り出しディケイドライバーに装填する。

「ATTACK・RIDE……ILLUSION」

ディケイドSはディケイドリュージョンを発動しディケイドSの姿が5人になる。

「何だ！？」

「5人分の攻撃だ！！」

ジャッカルロードは大鎌で5人に分身したディケイドSに切りかかるが、ディケイドSはジャッカルロードの攻撃を避けながらライドブッカーで切りかかる。

「ぐはあつーー！」

ジャッカルロードはディケイドSの攻撃でワームオルフェノクの所まで吹っ飛ばされる。

「翔夜君！」

「一気に決めるぞーー！」

なのははディケイドSと合流するとディケイドSはライドブッカーをガンモードにして一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「FINAL - ATTACK - RIDE.....DE、DE、DEC
ADE」

「ディバインバスター！」

「はあつーーー！」

「おのれー！」

「ディケイドと魔導師ーー！」

ジャッカルロードはディメンションブラストをワームオルフェノクは砲撃魔法”ディバインバスター”を喰らい爆発する。

「終わつたな。」

ディケイドSは変身を解くと、すぐに立ち去つとする。

「翔夜君ーー！」

バリアジャケットを解除したのは翔夜を呼び止めようとするが。

「気をつけるんだな、なのは。」

翔夜はそう言いつと立ち去つていった。

「今、なのはつて呼んだ／＼＼＼＼＼

翔夜の一言になのはは顔を赤くしていた。

第8話 翔夜の受難と初めての共闘（後書き）

次回、仮面ライダーamp;リリカルなのは

アンク

「お前、これで変身しろ！！」

和輝

「えつ！？」

フェイト

「怪人！？」

和輝

「変身！？」

「タカ、トラ、バッタ、タ・ト・バ、タ・ト・バ、タトバー！」

フェイト

「今の歌つて？」

アンク

「歌は気にするな。」

次回、『メダルの戦士』

感想を待っています。

第9話 メダルの戦士（前書き）

これまでの仮面ライダー & リリカルなのは

一つ、人々を襲おうとするショックカー帝国。

二つ、ショックカー帝国に対抗すべく戦おうとする仮面ライダー。

三つ、そして仮面ライダーと共に戦おうとする魔法少女達。

それでは始まります。

第9話 メダルの戦士

翔夜となのはが怪人達を倒したその夜

海鳴市 公園

「グリードよ、オーズの力をこからに渡せ！…」

「誰が渡すか！…」

真夜中の市街地にカマキリヤミーと数体の肩ヤミーが金髪の男性を追いかけていた。

男性の手には四角い箱のような物を大事に持っていた。

「なら、消えて貰うまでだ。」

カマキリヤミーはそう言つと、肩ヤミー達が金髪の男性に襲いかか
りつとある。

「ちつ…！」

金髪の男性は右手から火炎弾を肩ヤミー達に放ち、肩ヤミー達は倒されメダルに変わるが、金髪の男性は突然右手を抑える。

「ほつ、どうやら人間の姿になつてグリードの力は使いにくいやつだな。」

カマキリヤミーは両手の鎌から衝撃波を金髪の男性に向けて放つ。

「ぐはっ……」

金髪の男性はカマキリヤミーの攻撃を喰らひがその姿は消えていた。

「逃げたか、まあ良いだろ？』

カマキリヤミーは周囲を見渡すとその場から立ち去る。

「行つたようだな。』

近くに隠れていた金髪の男性は右手を抑えながらカマキリヤミーが立ち去るのを見て突然、その場に倒れ込む。

「ぐつ、少し力を使いすぎたか…………』

金髪の男性はそのまま意識を失つ。

「昨日の夜、此処に例の反応が？」

その翌日、フュイトは例の反応があつた公園を調査していた。

「アレは！？」

フュイトは調査をしていると、倒れていた金髪の男性に出会つ。

「アナタ、大丈夫ですか！？」

数十分後

「此処は……」

「気がついた！？」

金髪の男性が目を覚まし、フェイトはそれに気づく。

「此処は何処だ！？」

「公園よ、アナタは気絶していたの。」

金髪の男性は周りを見渡し慌てるが、フェイトはすぐに金髪の男性に説明する。

「貴様が俺の看病を？」

金髪の男性はフェイトに尋ねると、一人の少年がやって来る。

「俺も手伝つたんだけど。」

「誰だ？」

「俺は千樹 和輝、フェイトさんの助手だ。」

「私はフェイト・T・ハラオウン、アナタは？」

「アンクだ。」

互いに自己紹介をする千樹 和輝（和輝）とフェイト、そして金髪の男性。^{アンク}

「 そう言えばアンク、 」この箱は。」

和輝はアンクが持っていた四角い箱を取り出すと。

「 何だ！？」

（オーズの力が、 このガキに反応しているのか！？）

突然、 アンクの持っていた四角い箱が光り出す。

「 今のは？」

「 何だったの？」

驚く和輝とフェイト。

「 やはり生きていたか、 鳥系のグリードのアンクよーーー！」

フェイト達の前にカマキリヤミーと数体の屑ヤミーが現れた。

「 あれは！？」

「 怪人！？」

カマキリヤミーに驚く和輝とフェイト。

「 セットアップ！」

「 set up」

フェイトはバリアジャケットを纏い、バルディッシュを構える。

「和輝君、アンクをお願い。」

フェイトは和輝にアンクを頼むと、バルディッシュをサイズフォームにして脣ヤミー達を切る。

「フェイトさん。」

「オイ、和輝！」

和輝はフェイトを心配していると、アンクは和輝に持っていた四角い箱を投げる。

「コレは！？」

和輝は四角い箱を受け取ると、四角い箱はオーブドライバーに変わる。

「お前、これで変身しろ！－！」

「えつ！？」

アンクの一言に驚く和輝。

「どうする、今の貴様はその女を助けられる力を持っている。」

アンクは赤色のメダル、黄色のメダル、緑色のメダルを和輝に投げる。

「助けるよ。」

和輝はアンクの投げたメダルを受け取る。

「手が届くのに、手を伸ばさなかつたら死ぬほど後悔する。」

和輝はメダルをオーズドライバーに差し込む。

「それが嫌だから手を伸ばすんだ」

「そうか、（アイツ、あのバカと同じ事を言つたな。）ならやつてみる。」

アンクは思い出していた、彼の前のオーズを。

「変身！…！」

「タカ、トラ、バッタ、タ・ト・バ、タ・ト・バ、タトバ…！」

和輝は仮面ライダー オーズ タトバコンボ（オーズ）に変身する。

「今のがつは？」

「歌は気にするな。」

歌を気にするフュイト、気にしないアンク。

「ハツ！…！」

オーズはトラクロールを開き脣ヤマリー達を切り裂く。

「プラズマランサー！」

フェイトもプラズマランサーで肩ヤミーを倒す。

「おのれ、貴様がオーズだつたか。」

カマキリヤミーはオーズとフェイトに向かつて鎌で切り裂く。いつとす
るが。

「ハツ！」

「だあ！」

「ぐつ！..」

フェイトがバルディッシュでカマキリヤミーの鎌を受け止め、オーズ
がカマキリヤミーを蹴り飛ばす。

「プラズマスマッシュヤー！」

「ぐまつ！..」

フェイトはプラズマスマッシュヤーでカマキリヤミーを撃ち抜く。

「今よ和輝君！..」

「はー！..」

「スキンニングチャージ！..」

「せいや！..」

「ぐまつ！..」

オーズの必殺キック”タトバキック”が決まり、カマキリヤミーは

爆発と共に数十枚のセルメダルを飛び散る。

「和輝君、今の姿は？」

「あれは、仮面ライダー……」

「オーズ、仮面ライダー オーズだ。」

フェイエトは変身を解いた和輝にオーズの事を聞こうとすると、アンクが答える。

「コレで、継承者は五人か。」

和輝達の戦いを少し遠くからシンが見ていた。

現在、オーズが使えるメダルは

タカ
トラ
チーター
カマキリ
バッタ

第9話 メダルの戦士（後書き）

アンク達、グリードは9枚のメダルを揃っていますが、半分人間になっているため完全態の時よりも力が弱くなっています。

次回、仮面ライダー&リリカルなのは

ディケイドS

「いきなり、何するんだ！？」

キバK

「預言者から聞いたぞ、この世界の破壊者！！」

クウガM

「翔夜！！」

電王S

「俺も喧嘩に混ぜろよ！！」

健太郎

（モモタロス！？）

和輝

「戦いを止めないと、アンク！！」

アンク

「ちっ、これで行けーー！」

なのは

「どうして、ライダー同士が戦つのーー？」

次回、激突 ライダー対ライダー

感想を待っています

第10話 激突 ライダー対ライダー（前書き）

今回はライダー同士の戦いです。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第10話 激突 ライダー対ライダー

紅牙がすずかと出会う少し前

「君がキバの継承者か。」

「アナタは？」

海鳴市のある公園、紅牙の前にフェルト帽にゴートを着た眼鏡の男性が現れる。

「私は鳴滝、預言者だ。」

男性（鳴滝）は預言者と名乗る。

「僕に何か？」

「君に警告をしたい。」

鳴滝はそう言いつと紅牙にデイケイドの写真を見せる。

「コレは？」

「奴はデイケイド、世界の破壊者だ。」

「世界の破壊者？」

「何か胡散臭いな。」

何処からかキバットが現れる。

「気をつけろ、デイケイドの継承者はこの世界を破壊する。」

鳴滝はそう言いつと灰色のオーロラを出現させ、鳴滝は灰色のオーロ

「今の中に消えてこべ。

「世界の破壊者」

「夢か?..」

海鳴中学校の屋上で紅牙は田を覚ます。

「もう紅牙、田覚めたか?」

キバットが紅牙の所にせつて来る。

「キバット、授業は?」

「もう終わつたよ。」

紅牙はお腹から屋上でずっと寝ていた。

「それにしても起つのか紅牙?..」

「何が?..」

「すずかちゃんの事だよ、あの時は何も言わなかつたナビ?..」

キバットは紅牙にすづかの事を聞く。

「これで起つんだよ、彼女まで巻き込みたくないんだ。」

紅牙はやつまつと学校のグラウンドを見る。

「アレは？」

紅牙は何かを見つける。

海鳴中学校 グランデ

「まさか学校にまで現れるのかよ、ショッカー帝国……」「つるさい、ディケイドの繼承者……」

グランデではモスファンガイアが現れ、学校の生徒達が逃げる中、翔夜が変身したディケイドSがモスファンガイアと戦っていた。

「はつ……」「ぐつ……」

ディケイドSはライドブックカーソードモードでモスファンガイアを切り裂き、モスファンガイアはディケイドSから少し離れる。

「おのれ！！」「くつ……」

モスファンガイアはディケイドSに向かつて口から鱗粉を噴き出す。

「くつ、調子に乗るなよ……」

「ディケイドSはモスファンガイアの鱗粉攻撃を喰らいながらも一枚のカードを取り出す。

「KAMEN - RIDE……W」

ディケイドSは仮面ライダーダブル サイクロンジョーカー（DS WCJ）に変わり、モスファンガイアの鱗粉攻撃を風の力で吹っ飛ばす。

「はあっ！－！」

「ぐつ！－！」

DSWCJはパンチやキックでモスファンガイアにダメージを与えていく。

「そろそろ終わらせるか。」

DSWCJはディケイドSの姿に戻ると一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「FINAL - ATTACK - RIDE……DE、DE、DEC
ADE】

「はあ！－！」

「ぐおっ！－！」

ディケイドSはディメンションスラッシュでモスファンガイアを切り裂き、モスファンガイアは爆発する。

「翔夜君！－！」

「ディケイドSの所になのはが駆けつける。

「遅かつたな、もう終わったよ。」

「ディケイドSはそういうと変身を解こうとするが。

「お前がディケイドの継承者か！？」

「ディケイドSの前に紅牙が現れる。

「誰だ？」

「あの子は確か、隣のクラスの黒月君。」

なのはは紅牙を知っていた。

「キバット！！」

「あんまり気が進まないが、ガブリ！！」

紅牙はキバットを呼び、キバットは紅牙の右腕を噛みつく。

「変身」

紅牙はキバトに変身する。

「お前がキバ！？」

「ディケイドSは紅牙の変身に驚いていると。

「ハツ！！」

キバKはいきなり、ティケイドSに殴りかかる。

「いきなり、何するんだ！？」

「預言者から聞いたぞ、この世界の破壊者！！」

キバKはティケイドSにパンチやキックで攻めていき、キバKはティケイドSの攻撃を受け流す。

「預言者とか破壊者とか、解らないんだよ！！」

ティケイドSはライドブッカーソードモードでキバKに切りかかるうとするが。

「ガルルセイバー！！」

キバットは青いフェッスルを吹くと何処からかガルルセイバーが現れ、キバKはキバ ガルルフォーム（キバG）に変わる。

キバGはガルルセイバーでティケイドSの攻撃を防ぐ。

「何で黒月君が翔夜君と戦うの？」

なのははティケイドSとキバGの戦いに驚いていた。

「アレは翔夜、それにキバ！？」

怪人の騒ぎを聞きつけた雄司は「イケイドSとキバGの戦いを見て、
雄司はアーカルを出現させる。

「健太郎、アレは！？」

「電王とは違うけど。」

（とにかく行くぜ、健太郎！）

はやてと健太郎は「イケイドSとキバGの戦いを見ていると、突然
モモタロスが健太郎に憑依する。

「「変身！」「

【 SWORD FORM】

雄司はクウガM、健太郎は電王Sに変身する。

「翔夜！」「

クウガMはキバGに向かって行く。

「俺も喧嘩に混ぜろよ！」「

（モモタロス！？）

電王Sは「イケイドSに向かって行く。

「僕の邪魔をするな！」「

「何故、翔夜を狙つんだ！？」

キバGはガルルセイバーでクウGに切りかかろうとするが、クウGはキバGの攻撃を避けていた。

「行くぜ行くぜ！！」

「今度は電王か！？」

電王SはデングガツシャーネードモードでディケイドSに切りかかるうとするが、ディケイドSはライドブッカーソードモードで電王の攻撃を受け止める。

「はやてちゃん！」

「なのはちゃん、一体どうなつてこるの？」

「解らなによ。」

ライダー同士の戦いに驚くなのはとはやで。

「ハツ！！」

「何か武器になる物は？」

キバGの攻撃を避けながら武器になる物を探すクウGは

「アレだ！！」

グランドに落ちていたスコップを拾うと。

「超変身！…」

クウガMはクウガ タイタンフォーム（クウガT）に変わり、拾つたスコップはタイタンソードに変わる。

「はあっ！…」
「ハッ！…」

クウガTのタイタンソードとキバGのガルルセイバーがぶつかり合う。

「オラアッ！…」

「くっ、コイツ戦い方が滅茶苦茶過ぎだらう…？」

電王SはデングッシュジャーでディケイドSに切りかかり、ディケイドSはライドブッカーで電王Sの攻撃を受け流すが、電王SはそのままディケイドSを殴り、ヤクザ蹴りでディケイドSを吹っ飛ばす。

「もうこいつかよ！…」

「それるかよ！…」
電王SはディケイドSに殴りかかるとするが。

〔ATTACK・RIDE……SLASH〕

「ぐつ！…」

ディケイドSは電王Sの攻撃を喰らう瞬間、ディケイドスラッシュ

で電王Sを切り裂く。

「アレは！？」

「仮面ライダー！？」

「どうやらライダー同士が戦っているみたいだな。」

ライダー同士の戦いを見て驚く和輝とフェイト、それを冷静に見るアンク。

「戦いを止めないと、アンク！！」

「ちつ、これで行け！！！」

アンクは和輝にメダルを投げる。

「解った。」

和輝はアンクの投げたメダルを受け取り、オーズドライバーを腰に着けると。

「変身！！」

「タカ、カマキリ、チーター」

和輝はオーズ タカキリーダー コンボに変身すると、チーターレッゲのスピードでディケイドSと電王Sの戦いの間にいる。

「何だ！？」

「コイツはオーズ！？」

オーズの参戦に驚く電王とティケイド。

「喧嘩の邪魔をするなよ！？」

「お前も俺を狙っているのか！？」

電王とティケイドはランガッシュジャーとライドブッカーでオーズに切りかかるが。

「止めて下さって、どうしてライダー同士が戦つんですか！？」

オーズはカマキリソードで電王とティケイドの攻撃を防ぐ。

「どうして、ライダー同士が戦つの！？」

なのは達はライダー同士の戦いを見ている。

「この音楽は…？」

電王がそう言つと、何処からか突然ミュージックボーンが聞こえてくる。

「この音楽は？」

「なのは、空を見て…。」

フロイトはやつぱり空に向かつて指を指す。

「電車が空を飛んでいる。」

はやては赤い電車が空を飛んでいるのを見る。

「トントンライナー！？」

電王^{デントンライナー}は赤い電車を知っていた。

「あの電車、いつかに向かつて来ていなか？」

クウガ^{トントンライナー}がそつまつと、トントンライナーはライダー達に向かつて走つて来る。

「…………」

ライダー達が叫んでくるとトントンライナーはライダー達に向かつて突つ込んで来る。

「オイ、お前達早く逃げろ……！」

ディケイド^{トントンライナー}は他のライダー達に逃げるよつまつてこと、トントンライナーは突然ライダー達の前で止まる。

「止まつた？」

「どうなつているんだ？」

デンライナーの停車に驚くキバGとオーズ、するとトントンライナーのドアが開く。

「継承者の血脉を祓身を解いて、テンライナーに来てください。」

密室乗務員と思われる女性が「テンライナーから出て来る。

「「「「「えつーー?」」」」

女性の一言に驚くライダー達。

「それから、魔導師の血脉もどうだ?」

「「「えつーー?」」」

なのは達も女性の一言に驚く。

To be continued

第10話 激突 ライダー対ライダー（後書き）

次回、『継承者の秘密と伝説の語り手』

オーナー「次回は我々の出番ですよナオミ君。」

ナオミ「そうですねオーナー、コーヒーの準備しておきます。」

コハナ「感想を待っています。」

第1-1話 繼承者の秘密と伝説の語り手（前書き）

今回は、デングライナーのオーナーが継承者の秘密を話します。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第11話 繼承者の秘密と伝説の語り手

「翔夜ちゃんって、いるんだ？」

「俺が知るかよ！！」

モモタロスは、この電車の事をテント、イカードで言っていたけど

「提攜」二行。

「そりだね。」

デントライナーの車内では変身を解いた雄司、翔夜、健太郎、和輝、紅牙の面々と。

「せ、い、言、え、ば、な、の、は、真、導、君、の、事、を、翔、夜、つ、て、呼、ん、で、い、た、け、ど、?」

作時の間に著された論議の書

フェイト、はやて、顔を真っ赤にしたなのはが座っていた。

「ハーヒーお持ちしました。」

先程の客室乗務員の女性が翔夜達にコーヒーを持つて来る。

「それより、河で俺を困つたんだ?」

翔夜は紅牙に狙われた理由を聞くと。

「それは、その……」

『預言者が言つたんだ、『ティケイドの継承者は』の世界を破壊するつてな。』

紅牙の代わりにキバットが説明する。

「ふざけるな……」

突然、雄司が紅牙の胸ぐらを掴む。

「翔夜は好きで破壊者になつた訳じゃ無いんだ、それを誰かに言わ
れただぐらいで……！」

「よせ、雄司……」

「落ち着いて下さ……」

雄司は紅牙に怒りの形相で紅牙に怒つていると、翔夜と和輝に止め
られる。

「それにしても、継承者つて一体？」

はやてが継承者に疑問を感じていると。

「それについては、私が説明しますよ。」

突然、貫禄ある中年の男性とモモタロス、モモタロスの角を引っ張
る少女が現る。

「アナタ達は？」

和輝が男性に尋ねると。

「私は『エンライナー』のオーナー、ちなみに彼女は客室乗務員のナオミ君と、我々のサポートをしている。」

「ハナです。」

「痛いんだよ、コハナ！：がつ！！」

男性は客室乗務員のナオミとモモタロスを蹴り飛ばしていたハナの紹介をする。

「ですが今は、伝説の語り手でもありますけど。」

「伝説の？」

「語り手！？」

オーナーの一言に驚く雄司と和輝。

「あなた方にお話しましょう。」

オーナーがそう言つと、突然周りが暗くなる。

「かつて、あなた方が住む世界とは別の様々な世界には様々な悪の組織が人々を襲っていました。」

オーナーと翔夜達の景色は一つの地球と周りには様々な星が現れる。

「しかしある時、悪の組織に立ち向かう戦士が現れました。」

オーナーはそう言つと一つの星から映像が写される。

「クウガだ。」

雄司はそう言つと、写し出された映像にはグロングと戦うクウガの姿があつた。

「それが仮面ライダー」

なのははオーナーに尋ねると。

「その通りです、しかしある時、悪の組織達は一つの組織”大ショッカー”そして”スーパー・ショッカー”となつて全世界を襲おうとしました。」

オーナーがそう言つと一つの星から様々な怪人達の映像が写る。

「しかし大ショッカーやスーパー・ショッカーは仮面ライダー達によつて壊滅された筈なのですが。」

様々な怪人達が映し出された絵から鷹を中心に無数の蛇が絡みついた旗の絵に変わる。

「スーパー・ショッカーの残等が何者かと手を組み、ショッカー帝国となつて他の世界を襲いだしたんです。」

旗の絵が変わり、様々な怪人達はクウガ、アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド、響鬼、カブト、電王、キバ、ディケイド、W、オーズに向かつて襲いかかろうとする。

「ショッカー帝国はライダー達に戦いを挑み、そしてとある世界で

ライダー達は変身出来なくなる覚悟でショッカー帝国を自らの力を全て使って封印したのです。」

オーナーはそう言つと、周りの景色は元のテンライナーの車内に戻る。

「そして、僅かに残つたライダー達の力は新たなる変身者を探すべく何処かに飛んでいきました。」

オーナーはそう言つと椅子に座る。

「その力に選ばれた人間が継承者って訳だな？」

翔夜はそう言つと「一ヒーを飲む。

「その通りです、真導君。」

オーナーはそう言つと何処からかスプーンを取り出し磨き始める。

「そう言えども真導君はどうして私達の協力を断つたの？」

フェイトは翔夜に質問する。

「……」

フェイトの質問に黙る翔夜そして。

「悪いが話せない。」

翔夜はそう言つてトンライナーから出て行つた。

To be continued

第11話 繼承者の秘密と伝説の語り手（後書き）

次回、『翔夜の過去』

翔夜「雄司！！」雄司の首を絞める。

雄司「俺まだ何もしていないつて！..！」

健太郎「止めた方が良いかね？」

和輝「止めといった方が身のためだと思うけど。」

紅牙「感想を待っています。」

第1-2話 翔夜の過去（前書き）

今回は翔夜の過去が少し明らかになります。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第1-2話 翔夜の過去

「テンライナー車内」

翔夜が出て行った後の「テンライナー」の車内では、

「何で真導君は、私達をシヨツカー帝国との戦つなつて置つたんだろ
う?」

フロイトはまづひと雄司の方を見る。

「確かにには、絶対何がある筈や?..」

はやても雄司の方を見ると。

全員の視線が雄司に向く。

「さて、俺も降りようかな。」

雄司は急いで「テンライナー」から出て行く。「さあね」と

「「「バインダー」」「「えつ?」」

なのは、フロイト、はやは雄司をバインダーで縛る。

「何で逃げるの、雄司君。」

はやては笑顔で雄司に問い合わせる。

「俺は知らないよ、翔夜が他の人を巻き込みたくない理由何で！…」「知っているんだね。」

「あつ」

雄司は知らないと言つが、フェイトは雄司が嘘をついているとすぐ
に解る。

「お願い冴島君、翔夜君に何があつたのか教えて。」

なのはは雄司に話すように頼むと。

「解つた、話すよ。」

雄司は翔夜の過去をなのは達に話す。

「アーツの両親はショッカー帝国に殺されたんだ。」

「えつー？」

雄司の言葉に驚くなのは達。

「何で、何があったの？」

フェイトは雄司に理由を聞くと。

「半年前、アイツの両親は優秀な科学者だった、当時は結城博士の研究を手伝っていたんだけど、その時研究を知ったショッカー帝国は結城博士に刺客に送ったんだ。」

「それで、どうなった？」

はやては雄司に尋ねると。

「その時に俺と翔夜は結城博士の研究室に来ていたんだ、そこで両親は翔夜を庇つて…………」

「殺されたんだね。」

なのははやつはやつ。

「ああ、生き延びた翔夜は結城博士からディケイドライバーを受け取り、ディケイドに変身して刺客を倒したんだ。」

雄司はそう言つと悲しい顔になる。

「真導君にそんな事があつたんだ。」

「ショッカー帝国とそんな因縁があつたんだ。」

翔夜の過去を聞いた健太郎と和輝も悲しい顔になつていた。

「もしかして翔夜君は、私達が傷ついて欲しくないから、ショッカーアー帝国と戦うなって言つているの？」

なのはは雄司に質問する。

「多分な、もしかしたらアイツはショックカー帝国を一人で倒すつも
りだろう。」

雄司は質問に答える。

「私、翔夜君を探してくる。」

なのははさう言つと翔夜を探しにデンライナーから出て行く。

「……」

『オイ、紅牙！？』

紅牙は無言でデンライナーから出て行くと、キバットは紅牙を追いかける。

「和輝、俺達も追いかけるぞ！…」
「解つた！！」

雄司と和輝は紅牙達の後を追いかけようとデンライナーから出て行く。

「私も行くよ。」

フェイトも和輝達を追いかけようとデンライナーから出て行く。

「健太郎、ウチらも！！」
「どちらを追いかけるの？」

はやてと健太郎もなのはと翔夜か紅牙達のどちらか追いかけようと
するが。

「待つて下さい健太郎君、君にはもう一つお話をあります。」

オーナーは健太郎を呼び止める。

To be continued

第1-2話 翔夜の過去（後書き）

次回から紅牙 side、健太郎 side、翔夜 side の順番で話を進めるつもりです。

感想を待っています。

第1-3話 思いと友達と最強コンボ（前書き）

今回はあのグリードもちょっとだけ登場です。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第1-3話 思いと友達と最強コンボ

海鳴市 とある河原

「あの人もあんな過去があつたんだ。」

海鳴市のある河原では翔夜の過去を聞いた紅牙は後悔していた。

「もしかして、預言者が言つていた事つて間違いなのかな。」

紅牙は考えながら空を見上げると。

「おーい!!」

「黒月君!!」

雄司と和輝が紅牙の所にやつて来る。

「君達、どうして此処に?」

和輝と雄司に驚く紅牙。

『お前を心配して來たんだよ紅牙。』

キバットも紅牙の所にやつて来る。

「そりか、君は戦う理由が無いことこ感んでいるんだね。」

「ハイ」

紅牙は和輝に悩みを打ち明けていた。

「そう言えればどうして黒月はキバの力を手に入れたんだ？」

雄司は紅牙に質問すると。

「僕は半年前のある日、いつものように公園でヴァイオリンの先生の授業を教わった夜に、キバットに会ったんだ。」

『その時にファンガイアも現れて大変だったぜ、倒したけどな。』

紅牙とキバットはライダーになつた理由を話す。

「そりなんだ。」

「やっぱり、みんな色々あつたんだな。」

理由を聞いた和輝と雄司は納得すると。

「二人はどうしてライダーに？」

今度は紅牙が雄司と和輝にライダーになつた理由を聞くと。

「俺は誰も傷ついて欲しくなかつたからな、あの時はちょっと無我夢中でクウガの力を手に入れたのかな。」

少し照れながら話す雄司。

「俺もフェイトさんを助けてくて、その思いがあつたからオーズに変身したんだ。」

空を見上げながら話す和輝。

「そうなんだ。」

紅牙は一人の話を聞いていると。

「みんな！！」

フェイトに和輝達の所に駆けつける。

「フェイトさん！！」

「そう言えば和輝、お前は何でフェイトを慕っているんだ？」

フェイトを気づいた和輝は手を振つていると、雄司に質問される。

「一年位前に俺はフェイトさんに助けられたんだ、だからこの人の手伝いをするつて決めたんだ。」

和輝が笑顔で雄司の質問に答えつていると。

「そうだ黒月君、俺達と友達ならいいぜ。」

「えつ？」

突然雄司は紅牙と友達にならないかと言へ。

「ほり、戦う理由が無いなら、友達の為に戦つても有りかなって思つてさ。」

雄司はそう言つて立ち上がり、紅牙に向けて手を差し伸べる。

「それ良い考へだよーーー！」

そう言つと和輝も紅牙に向けて手を差し伸べる。

「なら、私も黒川君のお友達に。」

フェイトも紅牙に手を差し伸べる。

「みんな、…………宜しく。」

紅牙は驚いていたが、雄司達と握手する。

『良かつたな紅牙、友達が出来てーーー。』

キバットは嬉しく泣きしながら紅牙の周りを飛んでいる。

「和輝、ヤミーの気配だ！」

何処からかアンクが現れ、ヤミーが現れた事を和輝達に知らせる。

「アンク急に現れるなよ、せっかく良い雰囲気だったのに。」

アンクの登場に呆れる和輝。

「知るか、それより早く行くぞーーー！」

「解ったよ、フロイトさん……」

「私も行くよ……」

アンク、和輝、フロイトの三人はヤミーの現れた場所に向かっていく。

「汎島君、僕達も……」

「ああ、それから雄司で良いよ……」

紅牙と雄司も和輝達の後を追う。

海鳴市 市街地

海鳴市の市街地では数十体の鮫のヤミー、サメヤミーと巨大な虫のヤミー、オトシブミヤミーが人々に襲いかかろうとしていた。

「ヤミーがあんなに！？」

「アンク、ヤミーにも色々種類がいるのか？」

「ああ、あのサメのヤミーはメズールのヤミーで巨大な虫のヤミーはウグアのヤミーだな。」

ヤミーに驚くフロイト、和輝も驚きながらアンクに尋ねると、アンクは冷静にヤミーの説明を簡単にするとい一枚のメダルを和輝に渡す。

「とにかく、止めよう……」

和輝はメダルを受け取るり、オーズドライバーに装填すると。

「ちょっと待つた！！」

雄司と紅牙が和輝達と合流する。

「僕も手伝います、キバット！！」

『よつしや、キバット大暴れだ！！』

紅牙はキバットを呼ぶと、何処からかキバットが現れる。

「初めてのライダー同士の共同戦線だな！！」

雄司もアーフルを出現させる。

『ガブリ！！』

「「「変身ーー！」」

「タカ、カマキリ、バッタ」

クウガMに変身した雄司、キバKに変身した紅牙、オーズ タカキリバコンボに変身した和輝。

「セットアップ！」

「set up」

フェイトもバリアージャケットを纏い、バルディッシュを構える。

「行くぜーー！」

クウガ_Mの命_回と同時にキバ_K達はサメヤ_Mに立ち向かう。

「はあつーー！」

「ハツーー！」

クウガ_Mとキバ_Kはパンチやキックでサメヤ_Mを倒していく。

「はあつ、はつーー！」

オーズはカマキリソードでサメヤ_Mを切り裂く。

「アンク、鮫のヤ_Mーが全然減らないよー！」

「メズールのヤ_Mーは卵を破壊しないこと幾らでも出でてくるぞーーー！」

フェイトはバルディッショ サイズフォームでサメヤ_Mを切り裂くがサメヤ_Mの数が一向に減らず、アンクはフェイト達にアドバイスをする。

「でも、その卵って何処に有るんだ？」

「もしかして、アレじゃないかな？」

クウガ_Mはサメヤ_Mを殴り飛ばしながら周りを見渡していると、

キバケはオーティブミヤミーの背中を指す。

オーティブミヤミーの背中の青い球体からサメヤミーが飛び出でくる。

「アレだな。」

背中の青い球体を確認したアンクはアレがサメヤミーの卵だと確信する。

「和輝、鮫のヤミーは俺達が防ぐからお前はあの『カニヤミー』を！」

「解った！！」

クウガMの指示でオーズはオーティブミヤミーに向かつて行く。

「超変身！..」

クウガMはクウガ ドラゴンフォーム（クウガロ）に変わり、近くに落ちていた木の棒をドラゴンロッドに変える。

「はあつ！..」

クウガロはドライバーでサメヤミーを吹き飛ばす。

「ハツ！..」

キバ Kはパンチやキックでサメヤミーを吹っ飛ばす。

「せいやーー！」

オーズはオーテシブミヤミーに向かってカマキリソードで切りかかるうとするが。

「ぐあん！！」

「うわっ！！」

オーテシブミヤミーは前脚でオーズを吹っ飛ばし、オーズは壁に叩きつけられる。

「流石に1人はキツいな。」

オーズはフランフランになりながらも立ち上がると。

「オーズ、俺のメダルを使え！！」

何処からかオーズに向かって一枚のメダルが投げられる。

「このメダルは！？」

メダルを拾ったオーズは投げられた方向を見ると、オールバックに緑色のジャケットを着た男性が立っていた。

「死ぬなよ、オーズの継承者。」

男性はそつと姿を消す。

「今のは?……とにかく使わせて貰うよ!…」

オーズはそつとタカのメダルを入れ替えて先程のメダルを装填する。

「クワガタ、カマキリ、バッタ、ガータ、ガタ、ガタキリッバ、ガタキリバ!!」

オーズはガタキリバコンボに変わる。

「何だ、今の歌は!?」「アレはウヴァのコンボだと!?」

オーズの歌に驚くクワガタ、キバク、キバットとガタキリバコンボに驚くアンク。

「つおー!…!」

オーズは空に向かつて吠えると、オトシブミヤミーに向かつて突っ込む。

「ぐおおおん!…!」

オトシブミヤミーは卵から数十体のサメヤミーを出現すると、サメヤミーはオーズに向かつて突っ込む。

「はああつ!…!」

オーズは突然五十体程に分身して、サメヤミーにカマキリソードで切り裂いていく。

「分身した！」

フェйтはオーズの分身に驚く。

「凄いな。」

「確かに。」

クウガロとキバクもサメヤミーを倒しながらもオーズに驚いていた。

「〔〔〔スキヤニングチャージ！－〕〕〕

「－－－せ－－や－－－」

「ぐおおおん－－！」

オーズは必殺技のガタキリバキックでオトシブミヤミーと卵に決め、オトシブミヤミーは爆発し数十枚のセルメダルが飛び散る。

「はあつ－－！」

『ウエイクアップ！－』

「ハツ－－！」

「プラズマランサー－！」

クウガロはスプラッシュドラゴンでキバクはダークネスマーンブレイクでフェйтもプラズマランサーでサメヤミーを倒す。

「終わった！」

サメヤミーを倒したクウガの達は変身を解くと、和輝は突然倒れてしまう。

「和輝君！！」

「どうしたの？」

「大丈夫か！？」

和輝を心配するフェイト、紅牙、雄司。

「どうやらウヴァの奴が和輝にメダルを渡したみたいだな。」

アンクは咳きながらクワガタのメダルを見ていた。

現在、オーズが使えるメダルは

タカ
トラ
チーター
クワガタ
カマキリ
バッタ
ゴリラ

第1-3話　思いと友達と最強コンボ（後書き）

次回は健太郎 side のお話です。

感想を待っています。

第14話 八神家とタロウズ（前書き）

今回はほのぼのとした話です。

（ 戦闘はありません。 ）

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第14話 八神家とタロウズ

デントライナー 車内

「それでオーナー、お話しして？」

はやてがオーナーに尋ねる。

「ハイ、実はモモタロス君の仲間の事です。」

「モモタロスの仲間！？」

オーナーの一言に驚く健太郎。

「そう言えばオッサン、亀公達は何処に居るんだよ？」

モモタロスは仲間の事を聞いていたとする。

「私も彼等と連絡が出来ない状況でして、少し困っているんですよ。」

オーナーはそう言つたナオミが持ってきたコーヒーを飲み始める。

「でも、多分モモタロスの仲間なら大丈夫でしょう？」
はやてはそう言つていると。

「そうはないですよ、はやてさん。」

ハナが溜め息をつきながらモモタロスの仲間の事を語り出す。

「アイツ等は私が見張らないと、何をするのか解らないし、……それに」

ハナはモモタロスの顔を見て再び溜め息をつく。

「外見がモモタロスと似たり寄つたりだから。」

「確かに」

はやてと健太郎はモモタロスの顔を見て納得する。

「どういふ意味だよ！……」

モモタロスは三人の反応にツッコむ。

海鳴市 八神家

その頃、八神家では

「参る……」

「行くぜ……」

「どんと来るんやで……」

庭で剣の騎士・シグナムと鉄槌の騎士・ヴィータはそれぞれの武器を構え、斧を持った熊の異形に突っ込む。

「ハツ！」

シグナムは熊の異形に向かってレヴァンティンで切りかかるが。

「つおりやーー！」

熊の異形は斧でシグナムの攻撃を防ぐが。

「後ろががら空きだーー！」

ヴィータはグラーフアイゼンで熊の異形の後ろを取るが。

「なんのーー！」

熊の異形は片手でヴィータの攻撃を防ぐ。

「強いな、キンタロスーー！」

「コレがイマジンとやらのパワーかーー？」

「まだまだ、泣けへんな。」

ヴィータとシグナムは熊の異形の強さに感心し、キンタロスは余裕で二人の相手をする。

「凄いですねキンタロスさん、シグナムやヴィータの二人を相手にして互角に戦うなんて。」

湖の騎士・シャマルはキンタロスとシグナム、ヴィータの戦いを見ている。

「キンタロスは僕達の中では一番強いからね。」

シャマルの隣に居た亀の異形はキンタロスの説明をする。

「でも、ウラタロスさんも強いですね。」

「さあね。」

シャマルは亀の異形に質問するが、ウラタロスは知らん顔をする。

「ねえねえ亀ちゃん、そいつ^{ウラタロス}は繼承者探しはじめるの?」

盾の守護獣・ザフィーラ(子犬ver.)とじやれあつっていた龍の異形は突然ウラタロスに尋ねる。

「リュウタロスちゃん、電王の継承者が気になるの?」

シャマルは龍の異形に尋ねると。

「だつてパスを持っているのはモモタロスだよ、絶対アテにならないよ。」

「うん」とウタロスはザフィーラから離れる。

「確かにそうだね、そろそろ僕達も動かないといけないんだけどね。」

「

ウラタロスはやつ言いついとキンタロス達がやつて来る。

「キンタロス、今日も手合わせにつき合わせてすまないな。」

シグナムはキンタロスを御礼を言つと。

「かまへんで、俺達はアンタ達に借りがあるんや。」

キンタロスはやつ言つと終をしまひ。

「みんな、はやてちやんが帰つてきましたよ。」

ウラタロス達の所にリインフォース・ツヴァイ（ロイイン？）がやって来る。

「おつと、一人共隠れるよ。」

ウラタロスの命図と共に三人は何処かに隠れる。

「ただいま、みんな居るかな？」
「お邪魔します。」

はやて、健太郎、ハナの三人が玄関から入つてくる。

「おかえりはやてちゃん、そちらの一人は？」

シャマルは健太郎とハナに気づく。

「初めまして、沢田 健太郎です。」

「ハナで？」「オイ、亀公達の匂いがするぞ……」「

健太郎とハナが自己紹介をすると、突然モモタロスが出て来る。

「今のは？」

「モモの字！？」

「何でモモタロスが此処に居るの！？」

ウラタロス、キンタロス、リュウタロスはモモタロスに気がつき玄関
に出て来る。

「アンタ達、何で此処に居るのー？」

ハナはウラタロス達に気づく。

「はやて、コレはその…………」

「申し訳ありません、主はやてーーー！」

騒ぎを聞きつけたヴィータとシグナムははやて達の所に駆けつける。

「とりあえず、話し合おつか？」

はやてはモモタロス達と話し合つ事にする。

居間には健太郎、はやて、シグナム、シャマル、ヴィータ、リイン
？と

「全くアンタ達は！－！」

怒りの形相のハナと

「何でこいつなる…………」
「僕達が何をしたの…………」
「相変わらずやな…………」
「ハナちゃん、酷いよ…………」

ボロボロになつたタロウズが居た。

「それで、シグナム達は三日前に空から落ちてきたモモタロスの仲間を拾つたって言つわけやな？」

はやはシグナム達から事情を聞いていた。

「ハイ、本当に申し訳ありません。」「隠してゴメン、はやて。」「はやてちゃんに、余計な心配をかけたくないかったの。」

シグナム、ヴィータ、シャマルの三人ははやは謝るでいる。

「別に気にしてないんだけどな。」

はやてはそつ言つとモモタロス達を見る。

「先輩、あの子が電王の継承者？」

ウラタロスは小声でモモタロスに尋ね、モモタロスは質問に答える。

「何か良太郎に似ているね。」

卷之三

リュウタロスとキンタロスが健太郎を見ていた。

卷之三

「説明するよ。」

ヴィータは健太郎達の事を尋ねると、はやてはヴィータ達に健太郎達の事を説明する。

「ショッカー帝国に反面フライダー!?」

「海鳴市でそんな事が起きているのか!?」

「それで、健太郎君ははやでちやんとどういう関係？」

シグナムとヴィータははやての話に驚き、シャマルは健太郎にはやてとの関係を尋ねる。

「友達です。」

シャマルの質問にはやはては顔を真っ赤にするが、健太郎はすぐに答える。

「や、その通りや（まだ友達扱い何やね健太郎。）。

はやはては少し残念な顔をする。

（おやおや、ビリヤー電王の継承者はかなり鈍感だね。）

ウラタロスの顔は少しニヤニヤしていた。

「それより仮面ライダーの力が見てみたい、私と手合わせをしないか？」

シグナムは健太郎に手合わせを申し込む。

「えつ、でも僕だけじゃ……」

「良いぜ、相手をしてやるよ……」

健太郎が悩んでいると、モモタロスが手合わせをやると宣言出す。

「えつ、ちょっとモモタロス！？」

健太郎は慌てるがすぐにシグナムとの手合わせを始める事になり、その後三時間程の手合わせが行われた。

To
be
con-
tinued

第14話 八神家とタロウズ（後書き）

次回は翔夜sideの話です。

作者「

雄司「どうして作者の奴、ノリノリ何だ？」

翔夜「この作品の спинオフを考えているんだって。」

感想を待っています

第15話 RIDER HERO (前書き)

今回は翔夜となのはが中心のお話です。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第15話 RIDER HERO

海鳴市 とある公園

デントライナーから出て行った翔夜は公園で写真を撮っていた。

「これで良いんだ、これで……」

翔夜は先程の事を考えながら写真を撮りしようとすると。

「翔夜君！」

なのはが翔夜の所に駆けつける。

「なのは…………」

翔夜はなのはを見ると暗い表情になる。

翔夜君の事、冴島君から聞いたよ。

「アイツ、勝手に話したな！」

公園のベンチに座った二人は少し離れて話し合っていた。

「翔夜君、本当に一人でショッカー帝国と戦つのか？」

なのはは翔夜に尋ねる。

「ああ、俺は一人でショッカー帝国を破壊する。」

翔夜は立ち上がり、なのはに告げる。

「俺は破壊者なんだ、だから俺に関わらないでくれ。」

翔夜はそう言いつと立ち去ろうとするが、

「見つけたぞ、破壊者！！」

翔夜達の前に灰色のオーロラが現れ、数体のショッカー戦闘員、デイスパイダー、そして鳴滝が現れる。

「お前が預言者の鳴滝か！？」

翔夜は鳴滝に尋ねる。

「どうやら、私の事を知っているみたいだな。」

「結城さんから、お前の話は聞いているんでね。」

翔夜は鳴滝に指を指す。

「結城丈二め、やはり私の事を感づいているみたいだな。」

鳴滝は怒りの形相で翔夜を見る。

「お前は此處で俺が倒す！！」

翔夜は「ディケイドライバー」を腰に着け、カードを取り出す。

「讃めるなよ、破壊者！――！」

鳴滝はそつ言つと一歩下がりディスペイダーやショックカー戦闘員が前に出る。

「変身！――」

「KAMEN-RIDE.....DEC ADE STRIKE」

「はあつ！――」

翔夜は「ディケイドS」に変身しライドブッカー ソードモードでショックカー戦闘員に切りかかる。

「私も！」

なのはもレイジングハートを取り出すが。

「なのは、お前は手を出すな！――」

「でも、翔夜君一人で！」

ディケイドSはなのはに戦うなと言つて、なのはは戸惑つ。

「魔導師よ、破壊者に関わらない方が身のためだぞ！――！」

鳴滝はなのはに向かって叫ぶ。

「翔夜君は破壊者じゃない、私達の仲間ですー。」

「えつー!?」

「何だとー!?」

なのはの一言に驚くティケイドンと鳴滝。

「翔夜君は私達のヒーロー、仮面ライダーです。」

なのははそう言つてレイジングハートを起動する。

「セットアップー！」

なのははバリアジャケットを纏いレイジングハートを構える。

「ヒーローか、俺がそう呼ばれると思わなかつたよ。」

ディケイドンは苦笑するとライドブッカーでショックカー戦闘員を切り裂いていく。

「ATTACK - RIDE.....BLAST」

「アクセルシューターー！」

「ハツーー！」

なのははアクセルシューター、ティケイドンはティケイドンブラストでショックカー戦闘員達を撃ち抜く。

「グウォン！！」

ディスペイダーがディケイドS達に向かって蜘蛛の糸を放つが。

「はあっ！！」

ディケイドSがライドブッカーで蜘蛛の糸を断ち切った。

「ディバインバスター！」

なのははディスペイダーに向けてディバインバスターを放つ。

「グオオオン！！」

ディスペイダーはなのはの攻撃を食らつて爆発する。

「後はお前だけだぞ、鳴滝！！」

ディケイドSは鳴滝にライドブッカーの刃を向ける。

「こいつなつたらーー！」

鳴滝は灰色のオーロラを出現させる。

「アッシュ、まだ何があるのかよ。」

ディケイドSはライドブッカーを構える。

「今日の所は引受けだーー！」

鳴滝は急いで灰色のオーロラの中に逃げて行った。

「いやほん、逃げちゃったね。」

「ああ」

少し笑いながらバリアジャケットを解くなのはと呆れた顔で変身を解く翔夜。

「あらがとう、なのは。」

「えつ／＼／＼／＼」

翔夜は小さく声でなのはにお礼を言ひなのはの前から去っていった。

「翔夜君／＼／＼／＼／＼」

なのはは顔を赤くしながら翔夜が去つて行くのを見ていた。

(何で俺、なのはを見てドキドキしているんだ?)

翔夜は顔を赤くしながら何故か自分の心がドキドキしている事に気づいていた。

To
be
con-
tinued

第15話 RIDER HERO (後書き)

緊急予告！－！

雄司

「どうしたんだ、作者？」

翔夜

「何でも、この小説の спинオフのタイトルが決まつたらしい。」

タイトルは

仮面ライダー & リリカルなのは - - スピンオフラジオ - -

(仮)

なのは

「どんな内容なの？」

雑談有り、企画有り、裏話有りで色々なコーナーをやる予定です。

和輝

「それより、俺達のキャラ設定は？」

次回やります。

みんな

「これからも、仮面ライダー & リリカルなのは - - 繙承者と魔法少女 - - を宜しくお願ひします。」

感想も待っています。

オリジナルキャラ紹介 PART1（前書き）

ちょっとネタバレがあるので注意です。

オリジナルキャラ紹介 PART1

名前：真導 翔夜（しんどう しょうや）

性別：男

年齢：13

容姿

少し長い黒髪で右側に赤いメッシュがついている、瞳の色は黒

自己中で独善的、大ざっぱな性格だが常に仲間の事を信用している。色々な事を常人以上にやるが、趣味の写真撮影だけは酷い（雄司談）半年前にショックター帝国に両親を殺され、ショックター帝国と戦う為にティケイドの力を手に入れ戦う。ちなみに、恋愛関係にはかなりの鈍感。

変身するライダーはティケイド Verストライク

名前：真導 ナツミ（しんどう なつみ）

性別：女

年齢：9

容姿

ロングの黒髪でちょっと茶色が混じっており、瞳の色は黒

翔夜の妹で、かなりのしつかり者。

数少ない翔夜を止められる者で笑いのツボの使い手。

翔夜達が仮面ライダーだと知らない。

名前：真導 栄市郎（しんどう ろうじろう）

性別：男

年齢：不明

容姿

白髪で常に眼鏡をかけている

翔夜とナツミの祖父で真導写真館の館長、とにかく謎の多い人物。

名前：沢島 雄司（さわじま ゆうじ）

性別：男

年齢：13

容姿

ファイナルファンタジーに出てくるティーダに似ているが髪の色は黒

翔夜の一番の友人で翔夜達が海鳴市に来る前から翔夜達の事を良く知っている。

友達思いで常に友達の事を思っている。
あまり頭は良くないらしく、それで何時も翔夜から馬鹿にされる。
ちなみに彼の両親は別世界である財閥のトップらしい。

変身するライダーはクウガ

名前：黒月 紅牙（くろつき こうが）

性別：男

年齢：13

容姿

家庭教師ヒットマンREBORNに出てくる古里 炎真に似ている
が髪の色は金

人見知りな性格でキバットと出逢うまでは学校にも行かずは何時も
自宅に引きこもっていた過去がある。

公園で出会ったとある天才からバイオリンを教わりその腕前はプロ
級。

変身するライダーはキバ

名前：沢田 健太郎（さわだ けんたろう）

性別：男

年齢：13

容姿

家庭教師ヒットマンREBORNに出てくる沢田 紗吉に似ている。

気弱な性格でかなりの不幸体質、1日に数回は酷い目に遭う。

他人に対しても優しく、どんな時でも困っている人を助けようとする。趣味は読書と星を見る。

恋愛関係は翔夜と同じぐらい鈍感。

変身するライダーは電王

名前：千樹 和輝（せんじゅ かづき）

性別：男

年齢：13

容姿

ウルトラマンネクサスに出て来る千樹 憐に似ている。

明るく人懐っこい性格、かなり天然で子供のような一面がある。
一年前にフェイトに助けられて以来、フェイトの助手（自称）をしている。

実はフェイトに恋している。

変身するライダーはオーズ

オリジナルキャラ紹介 PART1（後書き）

次回からいよいよ新展開。

スピノオフラジオも宜しく。

第1-6話 手紙と秘密基地とハッピー、バースター!!（前書き）

これまでの仮面ライダー & リリカルなのは、

一つ、継承者達は伝説の語り手の一人、デンライナーのオーナーに
出逢う。

二つ、オーナーが継承者の秘密とショックカー帝国について話す。

三つ、継承者達は様々な思いを秘めながらもショックカー帝国と戦う
事を改めて決意する。

それでは始まります。

第16話 手紙と秘密基地とハッピー、バースター！！

「デンライナーのオーナーと出逢つてから一週間後

海鳴市 とある古いビル

「此処だな。」

「結構古いビルだな。」

翔夜、雄司は海鳴市のとある古いビルに来ていた。

「手紙を見ると此処だけだ。」

「本当に人が居るのかな？」

「それで、俺達継承者が居るのは解るけど。」

手紙を確認しながら古いビルを見る紅牙と健太郎、そして和輝は隣に居る人物に疑問を感じていた。

「どうしたの和輝君？」

「別におかしな事は無いけどな。」

「そうだよ和輝君。」

和輝の隣に居たフェイト、はやて、なのはの三人。

「なあ翔夜、手紙って俺達継承者だけに来たよな？」

「ああ、だから…何なんだ？／／／」

雄司は翔夜に尋ねるが、翔夜はなのはを見て少し赤くしていた。

(（（翔夜（真導君）、もしかしてなのはちゃんの事が好きなのか
？）））

翔夜となのは以外の面々は心の中で翔夜に疑問を感じていた。

「どうでも良いが、早く中に入るぞ！…」

何故かついて来たアンクの一言で全員は古いビルの中に入る。

「待つっていたぞ。」

古いビルの中に入るとライダージャケットを着た前園 シン（前園）
が立っていた。

「アナタは？」

「前園さん！…」

紅牙は前園を見て尋ねようとするが、面識があつた雄司は前園に驚く。

「知り合いなんですか？」

健太郎は雄司に尋ねる。

「ここの人は前園 シンさん、俺がクウガになつた時に居た人。」

雄司は全員に前園の紹介をする。

「もしかして、前園さんが俺達に手紙を？」

和輝は前園に尋ねる。

「いや、俺はある人に君達を案内するように頼まれただけだ。」

前園はそう言いつとエレベーターのボタンを操作する。

「ある人って、誰ですか？」

紅牙は前園に質問する。

「我々、組織のスポーツサーだ。」

前園はそう言いつとエレベーターの扉が開き、全員はエレベーターの中に入る。

「何処に向かうんですか？」

「地下だ。」

健太郎の質問に前園が答えると、エレベーターはどんどん地下に向かつて行く。

「着いたぞ。」

前園はセーフティードームをはいて、エレベーターから出る。

「コレは？」

「凄い！」

エレベーターから出ると、そこには様々な電子機器と数人のオペレーターが座っていた。

「此処は作戦司令室、みんなコチラの部屋に来てくれ。」

前園は全員に簡単な説明をすると隣の部屋に案内する。

「此処で待つていてくれ。」

部屋を案内すると前園はみんなを部屋に入れる。

「IJの部屋は？」

「ミーティングルームだ。」

なのはの質問に答えた前園は部屋にあつた電子機器を操作する。

「そろそろ教えて下さい。」

「アンタ達は一体？」

フュイトとはやてが前園に尋ねる。

「我々はライダー隊、ショッカー帝国に対抗する組織だ。」

前園はそう言いつと部屋のモニターからライダー隊のマークのようないいなり叫ぶ。物が映し出される。

「「「ライダー隊！？」」」

「で、そのライダー隊のスポンサーが俺達に何の用なんだ？」

全員が驚くが翔夜は前園に質問しようとする。

「それは私が説明しよう、継承者諸君……」

モニターが突然変わり、テンションの高い男性が映し出される。

「「誰！？」」

男性に驚く健太郎と雄司。

「鴻上か。」

「アンク、知っているの？」

アンクは男性と面識があるようで、和輝はアンクに尋ねる。

「奴は、「ハッピー、バースター、継承者諸君……」」

アンクは男性の説明をしようとすると、男性はいきなり叫ぶ。

「紹介しよう、我々ライダー隊のスポンサー、鴻上グループの会長、
鴻上 光生さんだ。」

前園は男性（鴻上）の紹介をする。

「それと同時に今は伝説の語り手でもあるよ、前園君。」

鴻上は前園に注意する。

「「「えつー?」」」

「伝説の語り手って、一体何人居るんだりつ?」

全員が驚く中、和輝は疑問を感じていた。

「その様子だと既に伝説の語り手に出逢っているようだな、それと
オーブの継承者君、我々伝説の語り手は私を含めて三人居るんだよ。」

「

鴻上は和輝の質問に答えるとアンクの方を見る。

「相変わらずテンションが高いんだよ、鴻上。」

「君も相変わらずだね、グリードのアンク君。」

アンクと鴻上は互いに警戒心を一気に高めた。

「アンク、この人と知り合いなの?」

フェイトはアンクに尋ねる。

「知り合いと言つより、俺が居た世界の人間だ。」

アンクはフェイトの質問に答える。

「アンクが居た世界の人！？」

「もしかしてアンクは、別世界の人間？」

雄司が驚いていると、和輝はアンクに尋ねる。

「一応な。」

アンクは和輝の質問に答える。

「何で別世界の人間がこの世界の組織のスポンサー何だ？」

健太郎は鴻上に尋ねる。

「ライダー隊は別世界にも存在する組織で鴻上グループのように我々のスポンサーは様々な世界に存在する。」

鴻上の代わりに前園が健太郎の質問に答える。

「時空管理局みたいな組織なんか？」

はやては前園に尋ねる。

「それについては隊長達に話して貰う。」

前園はそう言つと、突然基地中にアラームが響く。

「！」のアラームは…？

フュイトは前園に尋ねる。

「怪人が出現したらしいな。」

前園はそう言つと再び電子機器を操作する。

「ちよつど良い、前園君ライダー隊の戦略を彼等に見せてくれ。」

鴻上がそう言つと別のモニターが現れ、怪人が映し出される。

To be continued .

第16話 手紙と秘密基地とハッピー、バースター！！（後書き）

次回、仮面ライダーamp;リリカルなのは

？？？

「さてと、初陣と行きますか。」

「カボーン」

？？？

「ミッション、スタートだ。」

「ACE」

翔夜

「アレが？」

前園

「ライダー隊の副隊長と隊長だ。」

リンディ

「既に管理局が管理していた世界が3つもショックカー帝国に滅ぼされているの。」

次回、『ライダー隊、始動』

翔夜

「全てを破壊し、全てを守れ！！」

感想を待っています。

第17話 ライダー隊、始動（前書き）

今回は最後にあの二人の登場です。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第17話 ライダー隊、始動

海鳴市 とある山中

「破壊したい！！」

「強くなりたい！！」

海鳴市のある山中ではカブトヤミーとクワガタヤミーが暴れていった。

「さてと、初陣と行きますか。」

「ミッション、スタートだ。」

何処からか一人の男性が現れる。

「ここの先に民間人が居る、此處で止めるぞ！！」

1人の男性はアクセルドライバーとエンジンブレードを取り出す。

「了解だ隊長。」

もう一人の男性はバースドライバーとバースバスターを取り出す。

ライダー隊 ミーティングルーム

ライダー隊のミーティングルームでは翔夜達がモニターでカブトヤミー達と二人の男性が対峙しているのを見ていた。

「あの二人は？」

紅牙は前園に尋ねる。

「ライダー隊の副隊長と隊長だ。」

「同時にライダー隊が開発したライダーシステムの装着者だよ。」

前園と鴻上が二人の事を簡単に紹介する。

「「「ライダーシステム！？」」」

「我々の技術長が開発したシステムで、色々と使用制限があるんだ。」

「

雄司、健太郎、和輝の三人は驚くと、前園はライダーシステムについて簡単に説明する。

海鳴市 とある山中

「どうやら、継承者達が観ているらしい。」

「なら、良いところを見せないとな。」

エンジンブレードを持つ男性がそう言つと、バースバスターを持つ男性は気合いが入る。

「油断するなよ、真田。」

「心配性だな、五十嵐隊長。」

エンジンブレードを持っていた男性（五十嵐）はそう言つとアクセルドライバーを腰に装着しアクセルメモリを取り出し、バースドライバーを持っていた男性（真田）はセルメダルを取り出す。

〔ACCEL〕

「変身！！」

〔カポーン〕

〔ACCEL〕

五十嵐は仮面ライダーアクセル（アクセル）に真田は仮面ライダーバースに変身しそれぞれの武器を構える。

「ハツ！！」

アクセルはエンジンブレードでカブトヤミーに切りかかる。

「破壊する！！」

カブトヤミーはアクセルのエンジンブレードを受け止め殴りかかる

うとするが。

〔ENGNZE〕

アクセルはエンジンブレードにエンジンメモリを差し込むとエンジンブレードから電流が流れ、カブトヤミーはアクセルから距離をとる。

「喰らえ！！」

バースはバースバスターでクワガタヤミーを撃ち抜くと、クワガタヤミーはバースに向かつて突進してくる。

「ドリルアーム」

バースはバースドライバーにセルメダルを投入し電子音と共に右腕にドリルアームを装備する。

「いくぜ！！」

バースはドリルアームでクワガタヤミーを貫き、クワガタヤミーから数枚のセルメダルが飛び散る。

ライダー隊 ミーティングルーム

「凄い……」

「アレがライダー隊の実力……」

紅牙と和輝はアクセルとバースの戦いに驚いていた。

海鳴市 とある山中

「はあつー！」

「ぐああつー！」

アクセルはエンジンブレーキでカブトヤミーを切りつけていた。

「ACE」

「MAXMAM-DRIVE」

「はあつー！」

アクセルはカブトヤミーに向かつて必殺キック『アクセルグラントア』を決め、カブトヤミーは爆発する。

「そろそろ決めますか。」

バースはバースバスターのセルバレットポッドを銃口部に装着する。

「セルバースト」

「ハツー！」

バースは必殺技のセルバーストでクワガタヤミーを撃ち抜き、クワガタヤミーは爆発する。

「終わったか。」

「大したこと無いな。」

変身を解く五十嵐と真田は周りを見渡す。

「基地に戻るぞ。」

「了解、隊長。」

二人は基地に戻つていった。

数十分後

ライダー隊 ミーティングルーム

「継承者諸君、俺がライダー隊の隊長、五十嵐 リュウだ。
同じくライダー隊の副隊長、真田 アキラ、宜しく。」

山中から戻つてきた五十嵐と真田は翔夜達に自己紹介していた。

「それで、ライダー隊が俺達に何の用なんだ?」

翔夜は五十嵐に尋ねる。

「継承者と魔導師のみんなに我々ライダー隊に協力してほしいんだ。」

五十嵐は質問に答える。

「それって、一体？」

「何で私達も？」

五十嵐の一言に翔夜達となのは達

「ソレについては、私が説明するわ。」

突然モニターにリンクデイが映し出される。

「母さん！？」

「どうしたんですか！？」

リンクデイに驚くフロイトと和輝。

「実は昨日、管理局から緊急の連絡があつたの。」

リンクデイはそのまま別のモニターにある風景が映し出される。

「コレは」

「酷い」

映し出された風景は炎に包まれた廃墟で人々が怪人達から逃げていた。

「既に管理局が管理していた世界が3つもショックカー帝国に滅ぼされているの。」

「何だつて…？」

「ショックカー帝国が本格的に動き出したって訳だろ？。」

リンディーの一言で驚く雄司、翔夜は冷静にリンディーに尋ねる。

「真導君の言つとおりよ、それで管理局もライダー隊と協力する事を決定したの、ただ、管理局も他の世界の防衛で海鳴市に人手が送れないの。」

リンディーは翔夜達に管理局の決定を話す。

「それで私達がライダー隊に協力すれば良いんだね。」

「もちろん協力するよ、母さん。」

「ウチらに任せとき。」

なのは達はリンディーの話でライダー隊に協力する事を決意する。

「そう言つ訳だから五十嵐隊長、彼女達の指揮を任せぬ。」

「解った、リンディー提督。」

リンディーはなのは達の指揮を五十嵐に頼み、五十嵐はそれを承認する。

フュイトはリンディーに質問する。

「母さん、五十嵐隊長と知り合いなの？」

「昔、ちよつとね。」

リンディーはそつぱつとモーターから消えた。

「それで継承者の方はどうするんだ？」

真田は翔夜達に質問する。

「正直、世界規模で話が解らないし」
「不安しか無いけど」
「この世界は俺達の世界だ」
「だから俺達も俺達にしか出来ない事を」
「やるんだろう。」

雄司、紅牙、健太郎、和輝、翔夜もライダー隊と協力する事を決意する。

「決まりだな」

「君達は民間協力者という事で我々ライダー隊と共にショッカー帝国からこの世界を守るという事で良いか？」

真田は笑顔で五十嵐を見ると五十嵐は翔夜達に意志の確認をする。

「「「ハイーーー」」

こうして、三人の魔導師と五人の継承者はライダー隊と共に戦うことを決めた。

ライダー隊 とある一室

「ショッカー帝国が本格的に動き出したか、一文字副司令官」

「ああ、だがこいつも継承者と魔導師と協力する事になつたしな、
本郷司令官」

仮面ライダー1号の本郷と仮面ライダー2号の一文字はモニターで
継承者と魔導師を見ていた。

To be continued.

第17話 ライダー隊、始動（後書き）

次回、仮面ライダーamp;リリカルなのは

和輝

「そりゃあ、アンク以外のグリードって何処に居るんだろう?」

アンク

「俺は行かないからな。」

真田

「何かこいつやって見ると、一人がデートしているみたいだな。」

フェイト・和輝

「えつ／＼／＼／＼／＼」

???

「ただいま、メズール!!」

???

「おかれりガメル。」

???

「そりゃあ、今日の夕食当番って?」

???

「俺が作るんだよ。」

次回、『**搜索とデーターとグリード一家**』

フェイト

「次回は私と和輝のお話だよ。」

和輝

「アンク以外のグリード達も登場。」

感想を待っています。

第1-8話 捜索ヒートとグリード一家（前書き）

今回はアンク以外のグリード達の登場です。

グリード達は基本的に人間の姿で行動しています。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第1-8話 捜索とテートとグリード一家

翔夜達がライダー隊の基地で五十嵐から話を聞いていた頃

海鳴市 翠屋

「それでは、私は失礼します。」

藍色のワンピースを着た少女がエプロンをしまい桃子と士郎に挨拶する。

「御苦労様、メズールちゃん。」

「気をつけて、帰るんだよ。」

桃子と士郎は少女に挨拶し、メズールは一人に一礼すると翠屋から出て行つた。

「大変だね、メズールちゃん。」

「ああ、ほほ毎日バイトをやりながら家の仕事をもつてているしな。」

桃子と士郎はメズールの事を話していた。

ライダー隊 食堂

「アンク、先からアイスばかり食べるなよ。」

「体に悪いよ、アンク」

「別に良いだろ？、タダだしな。」

ライダー隊の食堂では和輝とフェイトはコーヒーを飲みながら大量のアイスを食べていたアンクに注意をしていました。
ちなみに他のメンバーは五十嵐と共に今後の事について話し合っていた。

「千樹、テスタロッサ。」

「前園さん？」

「どうしたんですか？」

前園が和輝達の所にやつて来る。

「副隊長を見なかつたか？」

前園は和輝達に尋ねる。

「見てないんですけど」

「副隊長、居ないんですか？」

和輝は不思議そうな顔をし、フェイトは前園に尋ねる。

「ああ、会議の途中で勝手に抜け出したんだ、おかげで隊長がかなり怒つているよ。」

呆れた顔で説明する前園。

「そうだ千樹、君に渡す物があるんだ。」

前園は和輝に一本の大剣を渡す。

「コレは？」

和輝は前園に尋ねる。

「メダジヤリバー、鴻上会長からの贈り物だ。」

「その剣はオーブズ専用の武器だからな、まだコアメダルが少ないからな、ちょうど良いだろ？』

前園とアンクはメダジヤリバーの説明をする。

「ありがとうございます、前園さん。』

和輝はメダジヤリバーを受け取ると前園にお礼を言つ。

「ちゃんと帰るわ、和輝」

アンクは元気いっぱいと食堂から出て行ったのである。

「どうしたんだよ、アンクー？」

和輝はアンクの突然の行動に驚きながらも尋ねる。

「此處に他のグリードが居ると思つたが、居ないしな。』

アンクは和輝の質問に答える。

「アンク以外のグリード？」

「そう言えば、アンク以外のグリードって何処に居るんだろう？」

アンクの一言で首を傾げるフェイト、和輝はアンク以外のグリードが何処に居るか気になる。

「確かにそうだな。」

「アンク以外のグリードを捜そつよ、フェイトさん。」

前園も和輝の言葉に納得し、和輝はフェイトと共にアンク以外のグリードを捜そつと叫び出す。

「うん、そうだね。」

フェイトも和輝の言葉に賛成する。

「俺は行かないからな。」

アンクは和輝の言葉に拒否する。

「どうしてだよ、アンク！？」

「自分の仲間が気にならないの？」

アンクの一言に驚く和輝、フェイトはアンクに尋ねる。

「俺がアイツ等を気にするのは『アメダルだけだから、別にアイツ等がどうなるかと関係無い。』

アンクは質問に答えると椅子に座るが。

「行こうよ、アンク」

「アンクが居ないと解らないんだから。」

「オ、オイ、だから俺は行かないからなーー！」

和輝とフェイトはアンクを引っ張り出し食堂から出て行く。

「さて、俺も副隊長を捜すか。」

前園も副隊長を捜すべく食堂を後にした。

海鳴市 とある屋敷

海鳴市にある古い屋敷では銀髪で黒と黄色が混ざったパーカーを着た男性がソファーに座りュウハ○ンの画面を見ている。

「ただいま。」

「おかえり、メズール。」

メズールが帰つてくると男性はメズールに挨拶する。

「カザリ、継承者について何か解つた？」

メズールは男性^{カザリ}に尋ねる。

「オーズの継承者以外はあまり情報が無いけど、どうやらこの世界にはクウガ、カブト、電王、キバ、ディケイド、そしてオーズの継承者が居るのは本当だよ。」

カザリはメズールの質問に答える。

「そつなんだ」

メズールはカザリの言葉に納得していると。

「ただいま、メズール！！」

「おかえりガメル。」

灰色のTシャツを着た男性^{ガメル}が元気良く挨拶するとメズールはガメルに挨拶する。

「あれガメル、ウヴァはどうしたの？」

カザリはガメルに尋ねる。

「ウヴァなら、俺のメダルと、前に奪ったカザリのメダルを持って、オーズの継承者に会いに行つたよ。」

ガメルはそう言つとポケットに入つていたお菓子を取り出し食べ始める。

「「えつ……！」」

ガメルの言葉に驚くメズールとカザリだつた。

海鳴市 とある市街地

「とは言つても」

「アンク以外のグリードが何処に居るのか」

「解らぬこつて言つた筈だな。」

その頃、和輝、フロイト、アンクの三人はアンク以外のグリードを捜していたがアンク以外のグリードが何処に居るのか解らないでいた。

「やつぱつ、お酒には焼き鳥だね。」

近くの焼き鳥屋から聞き慣れた声がする。

「今のが声って」

「聞き覚えがあるんだけど」

「まさかな」

和輝達は焼き鳥屋を覗いてみると。

「おひ、千樹にフロイト、それにアンクじゃないか。」

翔夜達との話し合いで抜け出した真田が焼き鳥を食べていた。

「「何してこるんですか、真田副隊長ーー。」

「アンクじゃないアンクだーー。」

真田の行動にツッコミをこれる和輝とフロイト、アンクは真田に名前の事にツッコンでいた。

「副隊長はいよいよ、何ついで、お皿を食べているだけだよ。」

真田はマイペースに和輝達に説明する。

「話し合いを抜け出してですか？」

「しかも、お酒まで飲んでいるし。」

更に真田にツッコミをいれる和輝とフェイト。

「酔わない程度に飲んでいるから大丈夫、それより一人でテートか？」

真田はマイペースに和輝とフェイトに尋ねる。

「そう言つ問題じゃないでしょ。」

「それに、私達はアンク以外のグリードを捜しているんです。」

真田にツッコミをいれる和輝、フェイトは真田に説明をする。

「やうなんだ、頑張れよお一人さん。」

「オイ真田、さつきから俺を忘れているだろ。」

フェイトの説明で納得する真田、アンクは真田が自身を忘れている事にツッコミでいた。

「何かこいつやって見ると、二人がデートしているみたいだな。」

「えつ／＼／＼／＼／＼」

真田の言葉に和輝とフェイトは顔を真っ赤にしている。

「LJの気配は」

「どうしたんだ、アンク？」

アンクは何かを感じ店の外に出ると和輝もアンクを追いつめに店を出る。

「見つけたぞ、オーズの継承者。」

店を出ると一人を待っていたのはオールバックに緑色のジャケットを着た男性がだった。

「アナタはあの時の！？」

「やはりあの時、和輝にクワガタのメダルを渡したのはお前だったが、ウヴァー！」

和輝は男性に少し驚き、アンクは男性に面識があった。

「アンク、取引だ俺のメダルを返して貰う変わりにコレを渡す。」

ウヴァーはそう言つてライオン、サイ、ゾウのメダルを和輝とアンクに見せる。

「カザリにガメルのメダルか」

アンクはそう言つてクワガタ、カマキリ、バッタのメダルを見ている。

「ちょっとウヴァー、僕のメダルで何やつているの…？」
「ウヴァー、俺のメダル、返せ…！」

カザリとガメルが現れ、ウヴァの持っていたメダルを奪おうとする。

「アンク、一体どうなっているんだ！？」

「知るか、とにかく止めてこいー！」

和輝はアンクに尋ねると、アンクは和輝にメダルを渡す。

「変身！..」

「タカ、トラ、バッタ、タ・ト・バ、タ・ト・バ、タトバー！」

和輝はオーズ タトバコンボに変身しメダジャリバーを構えるが。

「アンタ達は何やつているの！..！」

「「「冷たい！..！」」

カザリとガメルを追つてきたメズールの放水でウヴァ、カザリ、ガメルの三人の争奪は呆氣なく終わった。

「どうなつているの？」

騒ぎを聞き駆けつけたフェイトは状況に驚いていた。

「で、俺達が副隊長を捜している間にこいつら事が起きた訳だな。」

「ハイ」

五十嵐の頼みで真田を捜していた翔夜達は和輝達に出会い、和輝と

フェイトは事情を説明していた。

ちなみに真田は翔夜達と一緒に行動していた前園に捕まり、今頃は五十嵐の説教を受けているらしい。

「大体、アナタ達は少し自分勝手なのよ！！」

メズールはウヴァ、カザリ、ガメル、アンクの4人に説教していた。

「ごめんなさい、メズール」

「本当にスマン」

「何で僕まで？」

「何で俺も説教を？」

素直に謝るガメルとウヴァ、カザリとアンクは一応被害者なのに説教を受ける事に疑問を感じていた。

ちなみにメダルはメズールとフェイトの話し合いでクワガタとカマキリのメダルをウヴァに返す代わりにライオン、サイ、ゾウのメダルを渡すことになった。

「継承者のみんな、良かつたら私達の家で夕飯はどうかしら？」

メズールは翔夜達を雄司に誘う。

「行こうぜみんな！！」

「お前が仕切るな、雄司」

「みんなで夕飯か良いかも。」

「私達も行つて良いですか？」

メズールの誘いに賛成する翔夜達。

「そう言えば、今日の夕食当番って？」

「俺が作るんだよ。」

カザリの質問に答えるウヴァア。

「ウヴァアで大丈夫か？」

「心配ないよアンク、私が作るから。」

心配するアンクにメズールが作ると言つ。

そんな楽しそうな雰囲気を遠くから一人の男性が見ていた。

「あれが俺達の力を受け継いだ継承者達か、面白そうだな。」

冒険者の格好をしていた男性は人の良さそうな笑顔を浮かべながら和輝達を見ていた。

現在、オーズが使えるメダルは
タ力
ライオン
トラ
チータ
バッタ
サイ
ゴリラ

ゾウ

第1-8話 捜索ヒートとグリード一家（後書き）

次回、仮面ライダー & リリカルなのは

？？？

「君はまだ『ティケイド』の本当の力を使いこなしていないみたいだね。」

翔夜

「どういう事だ？」

アリサ

「雄司と同じライダー！？」

雄司

「アナタは一体！？」

ユウスケ

「俺は小野寺 ユウスケ、君と同じクウガだ。」

次回、『接触』

感想を待っています。

オリジナルキャラ紹介 PART2（前書き）

今回はライダー隊のメンバーの紹介です。

今回もちょっとネタバレがあります。

オリジナルキャラ紹介 PART2

名前：五十嵐 リュウ（いがらし りゅう）

性別：男

年齢：33

容姿

戦国BASARAに出てくる片倉 小十郎に似ている。

ライダー隊の隊長で隊長としての手腕はなかなかのものである。人望が厚く他の隊員達から慕われている。

副隊長の真田とは腐れ縁で本人は真田を色々と嫌っているが戦闘での実力は認めている。

時空管理局とは因縁があるらしい。

変身するライダーはアクセル

名前：真田 アキラ（さなだ あきら）

性別：男

年齢：33

容姿

銀魂に出てくる近藤 烈に似ている。

性格は豪快かつ大雑把と言うかかなりマイペース。

元医者でライダー隊の副隊長だが書類や会議関係の事は苦手で何時もサボっている。

隊長である五十嵐とは昔からの仲間（本人が勝手に思っている）で戦闘だけは互角の実力。

五十嵐と同じく時空管理局とは因縁があるらしい。

変身するライダーはバース。

名前：前園 シン（まえぞの しん）

性別：男

年齢：21

容姿

銀魂に出てくる土方十四郎に似ている。

元警察官でライダー隊の隊員。

生真面目な性格で真田がやるはずの書類関係は基本的に彼がやるら

オリジナルキャラ紹介 PART2（後書き）

感想を待っています。

第19話 接触（前書き）

今回からクウガ編です。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第19話 接触

翔夜達がライダー隊との協力を決めてから数日後

海鳴市 とある森林地帯

「ハツ！..！」

「ぐおっ！..！」

海鳴市のとある森林地帯では翔夜が変身したディケイドSがサイ種怪人のズ・ザイン・ダ（ザイン）と戦っていた。

「リントの戦士よ我らの行うゲルルの為に死ね！！」

ザインはそう言つてディケイドSに向かつて突進するが。

「リントとかゲルルって何だよ！？」

ディケイドSはザインの攻撃を避けるとライドブッカーソードモードでザインを切り裂く。

「黙れリントの戦士！..！」

ザインはディケイドSに殴りかかるが。

「俺は通りすがりの仮面ライダーだ。」

ディケイドSはザインの攻撃を避け。

「その心に刻んでおけ！！」

「FINAL -ATTACK -RIDE.....DE、DE、DEC
ADE」

「はあっ！！」

「ぐあああっ！！」

『ディケイド』の『ディメンションキック』が決まりザインは爆死する。

「何だつたんだ、あのグロンギは？」

変身を解いた翔夜は戦っていたグロンギの事を考へている。

「君が『ディケイド』の継承者か。」

何処からか冒険者の格好をしていた男性が現れる。

「誰だ！？」

翔夜は男性に気づくとすぐに『ディケイドライバー』を取り出す。

「言つておくけど、俺は君の敵じゃないよ。」

男性はそのまま翔夜に笑顔を見せる。

「君はまだ『ディケイド』の本当の力を使いこなしていないみたいだね。」

「どういつ事だ？」

男性の言葉に翔夜は驚いていた。

「でも君ならティケイドの本当の力に気づくだらう。」

男性はそう言つと翔夜から離れていく。

「オイ、待てよ……」

翔夜は男性を引き止めようとするが。

「頑張れよ、クウガの継承者と共に。」

男性は何処かに消えていった。

「あの人は一体？」

翔夜は男性の言つていった言葉に疑問を感じていた。

海鳴市 とある市街地

「次は何処にしようかな？」

「まだ行くの？」

市街地ではアリサと大量の荷物を持つた雄司が歩いていた。

「当たり前でしょ、この前の約束何だから。」

「そうでした」

雄司はアークルを手に入れた数日後、アリサの追求で翔夜と自分が仮面ライダーであることを話し、翔夜から『コイツを好きに使って良いから、俺達の事は絶対に誰にも話すな。』と言われ、雄司はアリサの執事パシリになつた。

「翔夜の奴、何で俺がこうなるんだ！？」

「そう言えれば、アンタは真導の事をどう思つていいの？」

雄司は翔夜を恨んでいると、アリサは雄司に翔夜の事を尋ねる。

「翔夜の事、アイツは俺の一番の友達だからな。」

雄司は笑顔でアリサの質問に答える。

「何なのそれ」

アリサは少し呆れながら雄司を見ていると。

「見つけたぞ、クウガ！！」

イカ種怪人のメ・ギイガ・ギ（ギイガ）、トラ種怪人のメ・ガドラ・ダ（ガドラ）、フクロウ種怪人のゴ・ブウロ・グ（ブウロ）が現れる。

「グロンギー！」

雄司はブウロ達を見て荷物を置きアーケルを出現させる。

「まさか、戦うの！？」

「アリサちゃんは下がつていて……変身！」

アリサは雄司の行動に驚いていると、雄司はアリサを下がらせクウガMに変身しガドラ達に殴りかかる。

「ハツ！」

「ぐつ！」

「クウガ、貴様も我らのゲルルの為に死ね！」

クウガはガドラを殴るが、ギイガはクウガを何発も殴る。

「くつ！」

クウガはギイガの攻撃を食らい、クウガはフラつきながらも近くに落ちていた木の枝を拾う。

「超変身！」

クウガMはクウガDに変わり、木の枝はドラゴンロッドに変えガドラやギイガの攻撃を受け流している。

「死ねクウガ！」

「くつ、空からも攻撃が来るのか！？」

空中からブウロが吹き矢でクウガDに襲いかかる。

「ぐあつ！！」

「隙有り！！」

油断したクウガロにガドラとギイガが襲いかかるが。

「「ぐあああ！..」」

突然、ガドラとギイガに向かつて何発かの銃弾が命中する。

「今のは」

クウガロは銃弾が放たれた場所を見ると。

「渾島、フクロウは俺に任せてその二体を倒せ！..」

バースバスターを構えた前園はクウガロに指示をだすとブウロに向かつてバースバスターを撃ち出す。

「解りました、はあつ！..」

「ぐあつ！！」

「ぐあつ！..」

クウガロはガドラゴンロッドでガドラとギイガを吹っ飛ばしマイティフォームに戻ると。

「はああああ.....はあつ！..」

「ぐあああ！..」

クウガMの必殺技”マイティキック”がガドラに喰らい、ガドラは

爆発する。

「後はイカのグロンギだけだな。」

クウガMは、ギイガに頭を向けると。

「ぐつーーー！」

前園が右肩を抑えつて膝をついていた。

「前園さんーー！」

クウガMは前園に気づき、前園の所に駆け寄ろうとするが。

「来るな、汎島ーー！」

前園はクウガMに向かつて叫ぶが。

「うわっーー！」

突然、ブウロが空中から襲いかかる。

「気をつける、あのフクロウのグロンギは他のグロンギとは格が違うぞーー！」

前園は右肩を抑えながらも立ち上がりバースバスターを持つが。

「クウガとリントの戦士よ、死ねーー！」

ブウロは空中からクウガMと前園に向かつて吹き矢を乱射する。

「ぐつ！！」

「前園さん、うわあ！！」

ブウロの攻撃に避けるしかない前園とクウガM。

「雄司、前園さん！！」

アリサは一人を心配すると。

「邪魔をするなリント！！」

ギイガがアリサに向かつて襲いかかるとする。

「きやーーー！」

「アリサちゃん！！」

アリサの悲鳴にクウガMは助けに行こうとするがブウロの攻撃で動けないでいた。

「もうダメ……」

アリサが諦めかけた瞬間。

「ぐあつ！！」

ギイガに向かつて一台のバイクがぶつかって来る。

「君、大丈夫！？」

アリサの田の前には赤いパーカーを着た青年がバイクから降り、アリサが無事がどうか聞いてくる。

「アナタは？」

アリサは青年に尋ねると。

「とにかく下がつていい……」

「は、ハイ！！」

青年はアリサに下がるよう命じたと、アリサはすぐ下がった。

「誰だ、貴様は！？」

ブウロは青年に尋ねると。

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ……（一度で良いから言つてみたかつたんだよな、この台詞。）」

青年は何かに満足していると、腰にアーフルが現れる。

「変身！？」

「あれは！？」

「俺と同じアーフル！？」

青年のアーフルに驚く前園とクウガM。

青年は雄司と同じクウガだが所々に金色の装飾が施されたクウガライジングマイティフォーム（クウガRM）に変身する。

「雄司と同じライダー！？」

アリサは青年の变身したクウガに驚いていた。

「クウガ！！」

クウガRMに向かってブウロは襲いかかるが。

「ハツ！！」

「ぐあ！！」

クウガRMはブウロの攻撃を避けるとブウロの腹に強力なパンチを喰らわせ、ブウロは吹っ飛ばされる。

「俺はブウロをやるから、君はギイガを頼む。」

クウガRMはクウガMに指示するとブウロに立ち向かう。

「わ、解りました！！」

「冴島、コレを使え！」

クウガMはクウガRMの指示に従うと、前園はクウガMにナイフを渡す。

「ハイ、超変身！！」

クウガRMはナイフを受け取るとクウガTに変わり、渡されたナイフはタイタンソードに変わる。

「ハアツ！！」

「グガアツ！！」

クウガTはタイタンソードでギイガを切り裂き確実にダメージを与える。

「ハアアアツ！！」

「クウガアアツ！！」

クウガTの必殺技”カラミティタイタン”が決まりギイガは爆散する。

「ハアアツ！！」

「ぐあつ！！」

クウガRMはパンチやキックでブウロにかなりのダメージを与えていると、ブウロは空に向かつて逃げようとしていた。

「逃げるのかよ…？」

クウガRMは慌てて周りを見渡すと。

「ちょっとお借りします。」

「オイ、何を！？」

「超変身！！」

クウガRMはクウガ ライジングペガサス（クウガRP）に変わり、持っていたバースバスターはライジングペガサスボウガンに変わると、ブウロに向かってライジングブラストペガサスを放つ。

「どわあああーー！」

クウガRPの攻撃を食らいブウロは空中で爆死する。

「終わつたか、ありがとうございます。」

クウガRPは変身を解くと前園にバースバスターを返した。

「アナタは一体！？」

変身を解いた雄司は青年に尋ねると。

「俺は小野寺 ユウスケ、君と同じクウガだ。」

青年^{ユウスケ}は雄司に笑顔を見せると自分の自己紹介をした。

第19話 接触（後書き）

次回、『異変』

感想と質問を待っています。

第20話 異変（前書き）

クウガ編は5・6話ぐらいで終わらせる予定です。

（ 今日は戦闘はありません。 ）

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第20話 異変

ライダー隊 ミーティングルーム

「昨日まででライダー隊の負傷者は100人、応援で呼んでいた警官隊は250人、嫌な数字だよ。」

ライダー隊のミーティングルームでは真田がグロンギの被害状況の報告をしていた。

「グロンギの急な出現か」

「何が目的何やろう?」

真田の報告を聞いた五十嵐とはやて（はやは翔夜やなのは達の代表として翔夜やなのは達の指揮をとっている。）は疑問を感じていた。

「こっちもさつきの戦いで紅牙君が重傷を負つたし

「モモタロスも」

「あのグロンギ達、かなり強かつた。」

フェイト、健太郎、和輝の三人も体の一部に包帯を巻いていた。

「グロンギ達はゲルルを行つている」

突然、ユウスケが語りだす。

「そう言えば、俺が戦っていたグロンギもそんな事を言つていたな。

「ゲルルって？」

先程の戦いを思い出す翔夜、なのははユウスケに質問する。

「ゲルルはグロンギ達が行う殺しのゲームだけど、本来ゲルルを行うグロンギは一回に一体だけなんだけど。」

ユウスケはゲルルの説明をする。

「今回のゲルルは複数のグロンギが参加しているからか。」

「その通り、それから思い出した俺がこの世界に来た理由。」

翔夜の言葉にユウスケは何かを思い出したように納得する。

「クウガに変身する奴って、全員こうなのか？」

翔夜が嘆きながら呆れた目で雄司とユウスケを見ていた。

「そう言えば五代さんに言われたんですよ、『継承者達が居る世界で大きな異変が起きている』って、それで俺がこの世界に応援として来たんだ。」

ユウスケは色々と思い出したように喋り出している。

「世界の異変？」

「一体、何が起きてるのですが？」

「グロンギ達のゲルルの内容は？」

「それよりユウスケさん、俺達継承者の事を知つていいのですか？」

「その五代さんって人も継承者の事を知っているのですか？」

「その五代って奴は、何者何だ？」

「ユウスケさん、あの金のクウガは何ですか？」

上からフェイト、なのは、はやて、和輝、健太郎、翔夜、雄司がユウスケに質問する。

「ちょっと、みんな落ち着いて！！」

突然の質問責めに焦るユウスケ。

「全員、落ち着け！！」

五十嵐の一喝で全員が一瞬で落ち着く。

「まず世界の異変の事だけど、今、グロングギ達の行っているゲルルが原因らしい。」

ユウスケは世界の異変について話す。

「それで今回のゲルルは何なんだ？」

五十嵐はユウスケにゲルルの事を尋ねる。

「その今回のゲルルの事だけど俺も色々と調べつてみたけど、奴らがゲルルを成功すると何かが復活する事だけしか解っていないんだ。」

ユウスケは今回のゲルルの事を翔夜達に話している。

「グロンギ出現、グロンギ出現！！」

突然、オペレーターがグロンギの出現を知らせる。

「オペレーター、グロンギの出現ポイントは…？」

五十嵐はオペレーターがグロンギの出現ポイントを聞く。

「市街地に数十体のグロンギを確認、更に山奥でも強力な反応を確認！」

オペレーターはグロンギの出現ポイントを知らせる。

「市街地と山奥か、どうみる隊長？」

「恐らく市街地の方はゲルルを行い、山奥の方は何か別の事をやるつもりだろう。」

オペレーターの報告を聞いた真田が五十嵐に尋ねると、五十嵐は冷静にグロンギの行動を分析する。

「五十嵐隊長、山奥の方のグロンギは俺が行きます。」

「隊長、俺にも行かせて下さい…！」

「俺も山奥の方が少し気になる。」

ユウスケ、雄司、翔夜の三人は山奥の方へ志願する。

「解った、小野寺、沢島、真導の三人は山奥の方のグロンギを、残

りは俺と共に市街地に向かう。」「

五十嵐は山奥に向かうのと市街地に向かうメンバーを決める。

「 「 「了解！－！」」

全員は五十嵐の指示に従い山奥と市街地に向かっていった。

海鳴市 山奥

「いよいよ、ゲルルも終盤だね。」

「コレで奴が蘇るぜ。」

「来い、クウガと継承者達よ－！」

海鳴市の山奥ではメガネをかけた知的な雰囲気の女性、革ジャンを着た男性、軍服の男性がクウガ達を待っていた。

「みんな、雄司…………」

その近くではアリサが縄に縛られていた。

To be continued .

第20話 異変（後書き）

次回、『強敵』

感想と質問を待っています。

第21話 強敵（前書き）

雄司

「そう言えば、ユウスケさんってクウガの力をどれくらい使いこなしているんですか？」

ユウスケ

「アメイジングの力までは使いこなせるんだけど、ライジングの力も何度も使つと暫く変身出来なくなるんだ。」

アリサ

「そう言えばユウスケさんや雄司が使うアークルって、毎回復能
力があるらしいね。」

ディケイドS

「面白そうだな。」 壊者オーラ + FINALIATTACK - R
IDEのカード装備

オーズ タカラリゾ

「止める、翔夜！！」 ディケイドSを必死に抑える。

健太郎

「えっと、仮面ライダー&リリカルなのは、始まります。」

第21話 強敵

海鳴市 市街地

数十体のグロンギが人々に襲っていた。

「かなり居るな、隊長」

「呑気に言っている場合か、真田」

グロンギを見て漫才みたいな会話をしていた真田と五十嵐はそれぞれの変身アイテムを構えていた。

「とにかく、街のみんなを助けないと。」

「キンタロス、行くよ。」

『よつしや、任せどき。』

オーナードライバーを構える和輝と健太郎はキンタロスを呼びライダーパスを構える。

「行くよ、なのは！」

「うん、今頃は翔夜君達も頑張っているんだから。」

フェイトとなのはもそれぞれのデバイスを構える。

【ACE】

「―――変身―――」

「カポーン」

「ACCUE」

「タカ、トラ、バッタ、タ・ト・バ、タ・ト・バ、タトバ！！」

「AX FORM」

アクセルに変身した五十嵐、バースに変身した真田、オーズ タトバコンボに変身した和輝、電王 アックスフォーム（電王A）はそれぞれの武器を構える。

「「セットアップ！」」

「〔set up〕」

フェイントとなのはばバリアジャケットを纏い、それぞれのデバイスを構える。

海鳴市 とある山奥

その頃、海鳴市のとある山奥ではメガネをかけた知的な雰囲気の女性、革ジャンを着た男性、軍服の男性が何かを待っていた。

「来たね。」

女性がそう言つと、翔夜、雄司、ユウスケの三人がやつて來た。

「あれは！？」

「まさか、お前達がこの世界に居たとはな」

女性達を見た雄司は驚いていると、ユウスケは彼等を少し焦りを見せる。

「知つている奴なのか？」

翔夜はユウスケに尋ねる。

「五代さんから聞いた事が有るんだ、ジャーザ、バベル、ガドル、グロンギの中でもかなり強い奴らだ。」

ユウスケはそう言つと、アークルを出現させる。

「待てリントの戦士よ、貴様等に返す物が有る。」

男性ガドルがそう言つと、もう一人の男性バベルが縄に縛つたアリサを連れてくる。

「アリサちゃん！！」

「何で此処に！？」

「恐らく、人質だろう。」

アリサに驚く雄司とユウスケ、翔夜は冷静に分析をしていた。

「この娘を使って、貴様等を誘き出すつもりだったが、その必要も無いだろ？。」

女性ジャーザはそう言つと、アリサを縛っていた縄を切る。

「みんな！！」

アリサは雄司達の所に急いで駆け寄る。

「ジャーザ、バベル、貴様等に任せよう。」

ガドルはそう言つと近くの岩に座り込む。

「解つたわ。」

「ゲルルのスタートだ！！」

ジャーザは女性の姿からサメ種怪人、ゴ・ジャーザ・ギにバベルは男性の姿からバッファロー種怪人、ゴ・バベル・ダに変わる。

「君達はバベルを、俺はジャーザをやる！！」

ユウスケは翔夜と雄司に指示を出す。

「大体、解つた。」

「アリサちゃんは隠れてつて！！」

翔夜はディケイドライバーを取り出しカードを構え、雄司はアークルを出現させる。

「「「変身！！」」」

翔夜はディケイドSに雄司はクウガMにユウスケはRMに変身し、それぞれの相手に立ち向かう。

「おらあー！」

バベルはハンマーを振り回しながらディケイドSとクウガMに襲いかかる。

「くっー！」

「わい、どうやつて戦うか？」

クウガMはバベルの攻撃を必死に避け、ディケイドは一枚のカードを取り出し、ディケイドライバーに装丁する。

「KAMEN·RIDE……W」

ディケイドSはDSWCJに変身し、更にもう一枚のカードをディケイドライバーに装丁する。

「FORM·RIDE……HEAT·METAL」

DSWはサイクロンジョーカーからヒートメタル(DSWHM)に変わり、メタルシャフトを構える。

「行くぜー！」

「おらあつー！」

DSWHMのメタルシャフトとバベルのハンマーがぶつかり合う。

「おひしゃあ！」

「ぐわ、やつぱりパワーは向いの方が上か。」

メタルシャフトを吹っ飛ばされたDSWHMはバベルから距離をとる。

「今度はコレだぜ。」

D S W H M は一枚のカードをディケイドライバーに装丁する。

[FORM - RIDE LUNA TRIGGER]

DSWHMはルナトリガー（DSWLT）に変わると、トリガーマグナムでバベルに向けてエネルギー弾を放つ。

「レーヴー！」

バベルはエネルギー弾を避けようとするが、DSWLTの放ったエネルギー弾は変幻自在に曲がりバベルに当てていく。

「今だ、雄司！！」

「ウルルの歌」

DSWLTはディケイドSに戻ると、クウガMはバベルを殴り飛ばす。

「決めるぜ、翔夜！！」

「ああ！！！」

「FINAL -ATTACK-RIDE.....DE、DE、DEC
ADE」

「「はああああ！！」「
「おのれ、リントがあああーー！」

ディケイドSのディメンションキックとクウガMのマイティキックが決まり、バベルは爆死する。

「はああ！！」
「くつ、嘗めるなーー！」

クウガRMはパンチやキックでジャーザを攻めるが、ジャーザは大剣でクウガRMに切りかかる。

「危なつ！！」

クウガRMはジャーザの攻撃を紙一重で避ける。

「（海東さんみみたいな真似はしたくないけど）コレは賞づよーーー。」

クウガRMはジャーザから大剣を奪うと。

「超変身ーー！」

クウガRMはクウガ ライジングタイタン（クウガRT）に変わり、奪った大剣はライジングタイタンソードに変わる。

「はあっ！！」

クウガRTはライジングタイタンソードでジャーザを斬りまくる。

「はあああ！！」

「おのれ、クウガあああ！！」

クウガRTのライジングカラミティタイタンがジャーザに決まり、
ジャーザは爆死する。

「後はお前だけだ、ガドル！！」

クウガRTはライジングタイタンソードの刃をガドルに向ける。

「どうやら、次は俺の番だな。」

ガドルは男性の姿からカブトムシ種怪人、ゴ・ガドル・バに変わる。

To be continued .

第21話 強敵（後書き）

次回、『復活』

感想と質問を待っています。

第22話 復活（前書き）

今回はアイツが復活します。

（ダグバではありません。）

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第22話 復活

海鳴市 とある山奥

ディケイドS、クウガM、クウガRTはガドルと戦っていた。

「はつ！..！」

「はつ！..！」

ディケイドSとクウガMはガドルに殴りかかるが。

「はああつ！..！」

「うわつ！..！」

「くつ！..！」

ガドルは一人の攻撃を避けた後、クウガ、MとディケイドSを片手で吹き飛ばす。

「はあつ！..！」

クウガRTはライジングタイタンソードでガドルに切りかかるが。

「その程度か、クウガ」

ガドルはクウガRTからライジングタイタンソードを奪ったガドルは目の色が紫に変わると、奪ったライジングタイタンソードは大剣に変わり、ガドルは剛力体に変わる。

「おりやつーー！」

「ぐわあつーー！」

ガドルは大剣でクウガRTを切り裂くと、クウガRTはRMに戻る。

「コイツ、今まで戦ったグロンギより」

「圧倒的に強いーー！」

ガドルの強さに怖じ氣づくティケイドSとクウガM。

「弱気になるな、継承者達ーー！」

「ユウスケさん」

怖じ氣づいたクウガM達に氣合いを入れるクウガRM。

「今は君達がティケイドやクウガの力を持つていてるんだ、それを忘れるなーー！」

クウガRMはそう言うとガドルの方を見る。

「何をしても無駄だクウガ、間もなくゲルルは達成される。」

ガドルはそう言つと目の色が金色に変わり電撃体の姿に変わる。

(出来れば、コレを使つのはもつけよつと後にしておきたかった。)

クウガRMは何かを決意すると自身の姿が変わっていく。

「ユウスケさんーー？」

「何をするつもりなんだーー？」

クウガRMの変化に驚くクウガMとティケイドS。

クウガRMの姿が黒くなり、右足に装備されていたマイティアンクレット左足にもが装備され、クウガRMはクウガ アメイジングマイティ（クウガAM）に変わった。

「その姿は！？」「

クウガAMの姿に驚くガドル。

「行くぞガドル、はあああああああ！」

クウガAMは必殺技の構えに入る。

「面白いぞ、クウガああああああああ！」

ガドルも必殺技の構えに入る。

「おつかあさん……！」

一 はああああーー！！

クウガAMのアメイジングマイティキックとガドルのゼンゲビ・ビブブ（電撃キック）が空中でぶつかり合いつ。

卷之二

「アイツ等、滅茶苦茶だろ？！」

一人の必殺技で発生した衝撃波に圧されるクウガMとティケイドS。

衝撃波が収まるとクウガAMとガドルが立っていた。

「どつちが？」

「勝つたんだ！？」

二人の勝敗を気にするティケイドSとクウガM。

「くつ！！！」

クウガAMは変身が解けると膝をつく。

「ユウスケさん！！」

「ちつ！」

ユウスケを心配するクウガM、ティケイドSはライドブッカーを構えるが。

「これでゲルルは達成された。」

ガドルはそう言つと倒れ爆発する。

「どういう事なんだ？」

ガドルの言葉にティケイドSは疑問を感じている。

「何だ！？」

「アレは！？」

突然、空が黒い霧に覆われ、その中心には紫色の球体が出現した。

「くっつ、グロングギ達にはめられたよ。」

空を見たユウスケが悔しがっていた。

「オイ、それってどういう事だよ！？」

「教えて下さい、ユウスケさん！？」

ユウスケの言葉に驚くディケイドS、クウガMはユウスケに尋ねる
と。

「おそらく、今回のゲルルはグロングギがある一定の数を倒された時に達成され、アレを復活させるつもりだったんだ。」

「つまり俺達は」

「ゲルルの手伝いをしていた訳か」

ユウスケはディケイドS達に今回のゲルルを説明すると、ディケイドS達は落ち着いていたが内心は悔しがっていた。

「まさか、アイツが復活するなんて！？」

ユウスケは立ち上がるが足下がフラツいていた。

「ユウスケさん！？」

クウガMは変身を解き、ユウスケを支える。

「悪い、ライジングを連続で使った上にアメイジングまで使ったか

ら体が動かないよ…………」

クウガは苦笑いすると氣絶する。

「ゴウスケさん！？」

ゴウスケの状態に驚く雄司。

「雄司、お前はゴウスケさんとアイツを病院まで運べ。」

「ディケイドはもう言つと、戦つている間に氣絶していたアリサの方を見る。

「アリサちゃん！？」

アリサの状態に驚く雄司。

「俺はアレを追う。」

ディケイドは紫色の球体を見ると、紫色の球体は市街地に向かつた。

「あの方向はなのはちゃんと達が居る……」

「雄司、早く一人を病院に連れて行け！！」

雄司が紫色の球体が向かつた方向を見ていると、ディケイドは紫色の球体を追つた。

その頃、市街地では

「空が突然、黒くなつたで！？」

「それに、グロンギ達が喜んでいる！？」

電王Aとオーズはそれぞれの武器でグロンギ達を切り倒しながら現在の状況に驚いていた。

「何が起きているんだ！？」

バースはバーススターでグロンギを撃ち抜きながら現在の状況に驚いていた。

「おそらく、ゲルルが達成されたんだろう。」

アクセルはエンジンブレーキで一体のグロンギを切り裂き、冷静に現在の状況を分析する。

「みんな、強いエネルギー体がこいつに接近してくるよ！？」

フロイトはそつまつと、アクセル達の前に紫色の球体が現れる。

「アレは？」

なのはが紫色の球体に近づいていくが。

「我、復活する……」

突然、球体が光り輝くと球体は消滅し変わりに一体の怪人が出現する。

「我はン・ガミオ・ゼダ、新たな闇となる者だ！！」

怪人ガミオはそう言うと、周りに居た全てのグロンギを闇に変え吸収すると、金色だった体が黒くなる。

「コレで、この世界は俺の物だ！！」

ガミオはそう言つと、周りに雷撃を放つ。

「フュイトちゃん！！」

「危ない！！」

なのはとフュイトはガミオの雷撃を食らいそうになるが。

オーズと電王Aが一人を庇いガミオの雷撃を食らう。

「フュイトさん！！」

「危ないで！！」

「ぐあつーー！」

雷撃を食らつた二人は変身が解ける。

「和樹ーー！」

「健太郎君ーー！」

フュイトとなのはは一人に駆け寄る。

「隊長、コレってピンチだな！！」

「呑気に言つている場合か、真田！？」

バースとアクセルはガミオに立ち向かおうとするが、新たに現れたグロング達に足止めされる。

「奇妙なリントだな。」

ガミオはなのはとフュイトの方を見る。

「死ね！！」

ガミオはなのはとフュイトに襲いかかる。

「もうダメ……」

「翔夜君……」

なのはとフュイトは諦めかけている。

〔ATTACK・RIDE・SLASH〕

「はあっ！！」

「ぐつ！！」

駆けつけたティケイドがティケイドスラッシュでガミオを切り裂

く。

「翔夜君！――」

なのはは『ディケイド』に気がつく。

「貴様はあの時のリントの戦士！――」

ガミオは『ディケイド』を見ると周りは黒い霧に覆われる。

「どうやら、ディケイドの事を知っているみたいだな。」

『ディケイド』はライドブッカーを構える。

To be continued .

第22話 復活（後書き）

次回、『決意』

感想と質問を待っています。

第23話 決意（前書き）

今回は雄司達を中心の話です。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第23話 決意

海鳴市 市街地

「はあつ！！」

「ぐおおおーーー！」

ディケイドSのライドブッカーソードモードとガミオの爪がぶつか
り合つたが、ガミオがディケイドSを圧していた。

「ロイシはさじうだ。」

「ATTACK・RIDE・BLAST」

「ハツ！！」

ディケイドSはガミオに向かつてディケイドブラストを放つが。

「小癪なーー！」

ガミオは田の前にバリアを張りディケイドブラストを防ぐ。

「喰らえーー！」

ガミオはディケイドSに向かつて雷撃を放つ。

「ぐあつーー！」

ディケイドSはガミオの攻撃を食らい変身が解ける。

「翔夜君……」

なのはとフロイトは翔夜の所に駆け寄りつくるが。

「此處は通れないぜ……。」

数体のグロンギがなのは達を足止めしつづく。

「なのは、今は田の前の敵に集中しよ。」

「うん、解ったよフロイトちゃん。」

フロイトとなのははそれぞれの武器を構えグロンギ達に立ち向かう。

海鳴大学病院 とある病室

その頃、雄司は氣絶したアリサとユウスケを病院に運び看病していた。

「うう…………雄司？」

「アリサちゃん、良かった気がついて。」

アリサが田を覚まし、雄司はアリサを見て安心する。

「雄司、真導は？」

アリサは雄司に翔夜について尋ねる。

「翔夜は戦いに行つたよ、仮面ライダーとして。」

雄司はそつとうと外を見る。

「アンタは行かないの?」

アリサは雄司に質問する。

「大丈夫、俺は翔夜を信じているからな。」

「雄司はアリサの質問を笑顔で答える。

「アンタ達つて本当に良く解らないよ、アンタと真導つて本当に友達?」

アリサは少し呆ながらも雄司に尋ねる。

「友達だよ、アイツは俺のやりたい事を初めて認めたんだ。」

「雄司がやりたい事?」

雄司の言葉にアリサは尋ねる。

「ちょっと昔の話だよ。」

雄司は翔夜との一つの思い出を語りだした。

（雄司の回想）

一年前 真導写真館 翔夜の部屋

「雄司、お前に夢はあるのか？」

翔夜は雄司に尋ねる。

「どうしたんだよ翔夜？」

「いや、最近ちょっと夢を考えるようになつたんだ。」

雄司は翔夜を見ると、翔夜は少し寂しそうな顔をしていた。

「そりなんだ、俺は夢は無いけどやりたい事はあるよ。」「やりたい事、それって何だよ？」

雄司は納得し翔夜にやりたい事を話す。

「世界中の人々を笑顔にしたい、それが俺のやりたい事かな。」

雄司は部屋の外を見る。

「そ、そりなんだ。」

「オイ、俺は何時もコレを言つと笑われるんだけど。」

ちょっと驚いていた翔夜と雄司は少し呆れた顔になつていた。

「別に、流石に俺でも人のやりたい事をバカにするつもりはないよ。」

「

翔夜は苦笑いしながら雄司を見る。

「だが、お前ならそれが出来るだろ?」

翔夜はそう言うと外を見る。

「回想終了」

「それが真導の事を友達と言つ理由か。」

アリサは雄司の話を聞いて納得していた。

「笑顔か」

いつの間にかユウスケも目を覚まし雄司の話を聞いていた。

「ユウスケさん?」

雄司はユウスケが目を覚ました事に気づく。

「雄司君、君はどうして世界中の人々を笑顔にしたいんだ?」

ユウスケは雄司に質問する。

「それは、…………誰かが悲しむのは誰だつて嫌じゃですか。」

「えつ?」「

雄司の言葉に驚くユウスケとアリサ。

「俺、もしかして何か変な事を言つたんですか？」

雄司は一人の反応を見て若干引いていた。

「はあー、やつぱりアンタってバカだね。」

アリサはため息を吐きながら雄司を見る。

「雄司君、アークルを出して。」

「は、ハイ！！」

雄司はユウスケの指示に従いアークルを出現する。するとユウスケもアークルを出現させ、金色の光を雄司のアークルに向けて放つ。

「ユウスケさん、一体何を？」

「君がクウガの継承者で良かつたよ。」

さつきの現象に疑問に感じていた雄司に対してユウスケはサムズアップする。

「何だか良く解らないですが、俺はそろそろ翔夜の所に行きます！」

雄司はそう言つと病室から出て行き翔夜の居る市街地に向かった。

「あと俺の役割も終えたし、行こうかな？」

ユウスケはそつまつとベットから起き上がる。

「ちょっと、アナタは何が目的だったの？」

アリサはユウスケに尋ねる。

「ああ、俺の目的はクガの継承者である彼を見極めるつもりだったんだ。」

ユウスケはそつまつと病室から出て行った。

「どういう事なの？」

アリサはユウスケの言葉の意味が解らなかつた。

To be continued.

第23話 決意（後書き）

次回、仮面ライダーamp;リリカルなのは

雄司

「翔夜！！」

ガミオ

「貴様等、リントに何が出来るんだ！！」

翔夜

「だが少なくとも、コイツは誰かを笑顔にするために戦っているんだ。」

〔FINAL・FORM・RIDE・KU、KU、KUUGA〕

ディケイド

「ちょっと、痛いぞ！」

次回『超絶』

感想と質問を待っています。

第24話 超絶（前書き）

クウガ編のラストです。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第24話 超絶

海鳴市 市街地

「おらつ！！」

「ぐつ！！」

ガミオの猛攻撃を食らい続けボロボロになる翔夜。

「トドメだ！！」

ガミオは翔夜にトドメをささげるが。

「翔夜！！」

「がつ！！」

駆けつけた雄司がガミオに向かってドロップキックを放ち、ガミオは吹っ飛ばされる。

「雄司！！」

「翔夜、後は俺に任せろ！！」

雄司はそつとアーフルを出現させる。

「食らえ！！」

ガミオは雄司と翔夜に雷撃を放つ。

「「ぐあ！！」」

ガミオを攻撃を食らい、地面に倒れる翔夜と雄司。

「見たか、コレがグロンギの力だ。」

ガミオはそう言つと、空に浮かび上がり倒れた翔夜達を見下す。

「貴様等リントも我らグロンギのゾ「ふざけるなよー」、何！？」

ガミオが喋つていると倒れた翔夜がガミオに向かつて言い放つ。

「お前の力は誰かを傷つける為の力に過ぎないんだよー！」

翔夜はフツつきながらも立ち上がる。

「黙れ、貴様等リントに何が出来るんだー！」

ガミオは翔夜に向かつて雷撃を放つ。

「くつ、だが少なくともコイツは誰かを笑顔にするために戦つているんだ。」

翔夜はガミオの攻撃を紙一重で避け、雄司に指を指す。

「せうだらう、雄司ーー！」

「ああーー！」

翔夜の言葉に雄司は立ち上がりアーフルを出現させる。

「おのれ、貴様は一体何者なんだー!?」

ガニオは翔夜に尋ねる。

「通りすがりの仮面ライダーだ!」

翔夜は『ディケイドライバー』を腰に装着する。

「その心に刻んでおけ!—」

翔夜は『ディケイド・ストライク』のカードをガニオに見せつけた。

「「変身!—」」

〔KAMEN-RHDE-DECade STRIKE〕

翔夜は『ディケイド』、雄司はクウガに変身する。

「コレはー?」

変身した直後、ライドブッカーから一枚のカードが飛び出ると、それを『ディケイド』はキャッチする。

「行くわよ、なのは!」
「解ったわ、フェイトちゃん!」

フェイトとなのはは5体のグロングギと対峙していた。

「シードーバスター！」

「プラズマランサー！」

なのはとフロイトは砲撃魔法をグロンギ達に放つ。

「「ぐえつーー..」

グロンギ達はなのは達の攻撃を食らひつけ。

「ハーケンセイバー！」

フロイトはグロンギ達の間合いで一瞬で入り、バルディッシュでグロンギ達を切りつけていき、グロンギ達は一力所に集まる。

「今よ、なのはー..」

フロイトはグロンギ達から離れる。

「全力全開、スターライトブレイカーーー！」

なのははグロンギ達に砲撃魔法“スターライトブレイカー”をグロンギ達に放ちグロンギ達は爆死する。

「さてと、俺達も決めますか隊長。」「当然だ」

「ENGNZE」

「ＪＥＴ」

バースはバースバスターでアクセルはエンジンブレードから放たれるエネルギー弾をグロンギ達に放つ。

「「がつーー！」

バースとアクセルの攻撃を食らい、グロンギ達はフリツく。

「ブレストキヤノン」

「セルバースト」

「セルバースト」

「セルバースト」

「ブレストキヤノン、チャージ完了」！――

バースはブレストキヤノンを召喚し、更に数枚のセルメダルを投入しエネルギーをチャージする。

「ＥＮＧＩＮＥ」

「ＭＡＸＭＡＭ・ＤＲＩＶＥ」

アクセルはエンジンメモリをエンジンブレードに装填しグロンギ達に向かって走る。

「はああつ！！」

「ブレストキヤノン、ファイヤー！！」

アクセルのダイナミックエースがグロンギ達に決まり、更にバースのブレストキヤノンを食らいグロンギ達は爆死する。

「はああつ！！」

クウガMはガミオに向かつて殴りかかるが。

「ぬおつ！！」

ガミオはクウガMの攻撃を受け止めるが。

「ハツ！！」

「があつ！！」

ガミオの死角からティケイドSがライドブッカー ソードモードで切り裂き、ガミオはダメージを食いつ。

「「はあつ！！」」

「ぐおつ！！」

クウガMとティケイドSは同時に強力なパンチでガミオを吹っ飛ばす。

「おのれええ、リントの戦士とクウガアア！！」

怒りだしたガミオは念力で近くにあった巨大な瓦礫をクウガMとティ

イケイドSに投げ飛ばす。

「ヤバいぞ、翔夜！！」

「コレを使ってみるか。」

クウガMはガミオの攻撃に焦るが、ディケイドSは一枚のカードを取り出しディケイドライバーに装填する。

〔FINAL・FORM・RIDE・KU、KU、KUUGA〕

「ちょっと、痛いぞ！」

「えつ、一体何するんだ！？」

ディケイドSはクウガMの背中を触るとクウガMの姿が変わりクウガゴウラムに変わり、飛んできた瓦礫を体当たりで破壊する。

「どうなっているんだよ、翔夜！？」

クウガゴウラムは自分に起きた現象に驚くが。

「俺が知るか、とにかく行くぞ！！」

ディケイドSはそう言いつとライドブッカーを取り出し、クウガゴウラムの上に乗りガミオに向かつて突進する。

「おのれえええ！！」

ガミオは雷撃を避けてクウガゴウラムに向かつて放つが、クウガゴウラムは雷撃を避けてライドブッカー ソードモードでガミオを切り裂く。

「おのれええ、はつ……」

ガミオは周りの瓦礫をクウガゴウラムに向かって念力で投げ飛ばす。

「つおおお……」

ディケイドはクウガゴウラムから降りると、クウガゴウラムは瓦礫を弾き飛ばしながらガミオを顎で挟み、そのまま空中に飛び上がる。

「FINAL -ATTACK -RIDE.....KU、KU、KU」
GA

ディケイドは一枚のカードをディケイドライバーに装填すると、クウガゴウラムはガミオを顎で挟みながらディケイドに向かって降下し、ディケイドはガミオに向かってキックを放つ。

「はあああつ……」

ディケイドアサルトが決まり、クウガゴウラムはクウガの姿に戻る。

「ワントよ……再び闇が……晴れるぞ……」

ガミオはそう言つと爆死する。

「終わったか。」

「手強い相手だった。」

「ディケイドSとクウガMは変身を解くと、突然一人の周りに銀色のオーロラが現れる。

「此処は？」

「どうなつてているんだ？」

翔夜と雄司の周りの景色は何処かの夜の市街地に変わっていた。

「どうやら、ディケイドの力を知つたみたいだね。」

翔夜達の前に冒険者の格好をしていた男性とコウスケが現れる。

「アンタは！？」

「コウスケさん、どうなつてているんですか？」

コウスケ達に驚く翔夜と雄司。

「雄司君、翔夜君、クウガの力を完全に手に入れたね。」

ユウスケは雄司達に笑顔でサムズアップする。

「えっ？」

「どういう事だ？」

ユウスケの言葉に驚く雄司と翔夜。

「まず雄司君、君はクウガとして戦う意味を知つた事でクウガの本

当の力を手に入れたんだ。」

「クウガの本当の力？」

男性の言葉に驚く雄司。

「そして翔夜君、他のライダーと絆を手に入れる事でティケイドは本当の力を引き出すんだ。」

「大体解った、アンタ達は俺達を試していたんだな。」

男性の言葉に翔夜は納得する。

「まあその通りだね、君達継承者の力が全て揃えばショッカー帝国を倒せる筈。」

男性はそう言つと翔夜達の周りに銀色のオーロラが出現する。

「ちょっと待てよ、アンタは一体？」

翔夜は男性に尋ねる。

「俺か、俺は2000の技を持つ男だよ。」

男性はそう言つとクウガの面影と重なりサムズアップする。

「頑張れよ、継承者……」

ユウスケは翔夜達に笑顔でサムズアップする。

「もしかしてアナタが」

雄司が男性の正体に気づくが銀色のオーロラは一人を包み込み一人は元の場所に戻つていった。

「行きましたね、五代さん。」

「そうだね。」

コウスケと男性（五代）はその場に座り込む。

「コウスケ君、良いのかい金のクウガの力を彼に渡して？」

五代はコウスケに尋ねる。

「今は無理だと思いますけど、彼ならいざれ使いこなしますよ。」

コウスケは五代の質問に答える。

「それにしても、あの二人を見ていて君と十君を思い出すよ。」

五代はやつとコウスケの方を見る。

「十の奴、今頃なにしているだろ？。」

コウスケはやつと夜空を見上げていた。

真導写真館

「翔夜君、その写真は？」

真導写真館では翔夜が写真を見ている所をなのはが尋ねる。

「ああ、ちょっと前に撮った写真を想像したんだいつの間にか写真が変わっていたんだ。」

写真に写っていたのは翔夜と雄司がそれぞれライダーに変身しようとする姿とその後ろに五代とコウスケが笑顔でサムズアップをしていた。

「それより、何でお前達が居るんだ？」

翔夜はなのはと雄司に説教していたアリサに質問する。

「冴島君が一緒に夕飯を食べようつて。」

「私はこのバカ（雄司）の説教となのはに夕飯を誘われたの。」

翔夜の質問に答えるなのはとアリサ。

「駄目かな、翔夜君／＼／＼／＼

上目遣いで翔夜に尋ねるなのは。

「べ、別に良いが（その目は反則だろ？）／＼／＼／＼／＼

翔夜は顔を真っ赤にしながらなのはを見る。

「皆さん、夕飯の準備が出来ました。」

キッチンで夕飯の準備をしていたナツミが大きな鍋に入ったカレーを持つてくる。

「あれ、今夜は天ぷらじゃないの？」

雄司は鍋を見て疑問に感じる。

「ちょっと前に小野寺君つて青年がそのカレーを持って来てね、みんなで食べてだそだよ。」

炊飯器を用意していた栄市郎は全員に説明する。

「ユウスケさんが？」

「とにかく、食べるか。」

栄市郎の説明に驚く雄司、他のメンバーはカレーを食べ始めていた。

To be continued.

第24話 超絶（後書き）

次回は未定です。

感想と質問を待っています。

第25話 現状と出張（前書き）

今回はかなり短いです。（笑）

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第25話 現状と出張

ガミオ達を倒してから一週間後

ライダー隊 とある一室

「ショッカー帝国がアギトの世界を襲つただと？」

「ああ、数日前にショッカー帝国の軍団がアギトの世界を襲つたんだが、風見と筑波がアギトの世界のライダー達と共に撃退は出来た。

」

本郷は一文字の報告を聞いて難しい顔をしていた。

「今は響鬼の世界で調査をしていたアマゾンと合流しだい、ショッカー帝国を追うみたいだ。」

一文字はそう言つと一冊のファイルを取り出す。

「だが、これでは他の世界でのショッカー帝国の搜索が出来ないな。

」

本郷は一文字の取り出したファイルを見始める。

「神や沖達は自分達の世界と他の世界の守る事で動けないし、ブラックの一人もショッcker帝国の調査で無理だしな。」

「他のライダー達も同じ様な理由だし、結城はライダーシステムの開発で居ないからな。」

二人はファイルを見ながら難しい顔をしている。

「あの二人に頼むか。」

「ああ」

二人は何かを閃いた。

ライダー達 隊長室

「と言うわけだ、真田」

「つまり、別の世界に出張つていう訳だな。」

ライダー達の隊長室では五十嵐と真田が話し合っていた。

「それにしても、司令官達も思いきった事をするよ。」

「それだけ現状は厄介だという事だ。」

真田と五十嵐は報告書を見てそれぞれの感想を言つていた。

「それで俺達が居ない間、継承者達はどうするんだ?」

真田は五十嵐に質問する。

「暫くは前園が隊長代理として、継承者達をフォローするつもりだ。」

「

五十嵐は真田の質問に答える。

「それにグロンギ事件の後に真導が言つていた話が本当なら、俺達

はショッカー帝国の搜索と修行をするが。」

五十嵐はそう言ひ机に置いていたコーヒーを飲む。

「修行つて、何で！？」

真田は五十嵐の言葉に驚く。

「お前もこの前の戦いで解つただろう、俺達は今まで色々な場所で戦つてきたが、ライダーとしての戦闘はまだまだだ。」「確かにそうだけど。」

五十嵐の言葉に納得する真田。

「だから修行だ」「解りました、隊長」

真田は五十嵐の言葉に諦め、数日後一人はショッカー帝国の搜索として様々な世界を出張する事になつた。

To be continued .

第25話 現状と出張（後書き）

次回、仮面ライダー & リリカルなのは

紅牙

「すずかちゃんに謝らないといけないな。」

翔夜

「誰なんだ？」

名護

「ディケイドの継承者である君に私の試練を受けて貰おう。」

ポーラベアファンガイア

「見つけたぞ、我等の王子！！」

健太郎／和樹

「えつ！？」

紅牙

「どうして、それを！？」

次回、『レッスン・イクサの試練と紅牙の秘密』

次回からキバ編

感想と質問を待っています。

第26話 レッスン・イクサの試練と紅牙の秘密（前書き）

今回からキバ編です。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第26話 レッスン・イクサの試練と紅牙の秘密

五十嵐と真田が別世界に向かってから3日後

キヤスルドラン 王の間

「はあ～～」

王の間では椅子に座つた紅牙がため息を吐いていた。

『どうしたんだ紅牙、ため息なんかついて?』

紅牙の所に心配していたキバットが飛んできた。

「すずかちゃんの事を思い出していたんだ。」

『あの子の事か、お前はあの時はすぐに逃げたからな。』

それから紅牙とキバットは数分間何かを考えていた。

『紅牙、あの子に謝つたらどうだ?』

『えつ！？』

キバットの提案に驚く紅牙。

その後、紅牙は数分間黙り込んでいると。

「すずかちゃんに謝らないといけないな。』

紅牙はすすかに謝ることを決めた。

「 もう言えばキバット、 キバーラは？」

紅牙はキバットの妹であるキバーラの事を尋ねる。

『 アイツなら、 まだ寝ているぜ。』

キバットはそのまま机の上に座る。

『 それからアイツにも、 変身者を決めてほしいんだけどな。』

キバットはキバーラの事を心配していた。

「 それで翔夜君、 次はどのライダーと仲良くなるの？」「 仲良くなるって、 そりゃ訳じや無いだろ。」

学校を終えたのは翔夜と共に家に帰る途中だった。

「 あの男が言っていた通りなら、 コウスケさんと同じ様に俺達を試しに来るだろ。」

「その通りだ。」「

突然、翔夜達の後ろで声がした。

「誰なんだ？」

翔夜達は後ろを振り向いて見ると、スーツ姿の男性が立っていた。

「君がディケイドの継承者だね。」

男性は翔夜に指をさしながら尋ねる。

「翔夜君の知り合い？」

「アンタは一体？」

なのはは翔夜の知り合いだと思つが、翔夜は男性が誰か解らなかつた。

「私は名護 啓介、今年で23になる男だ。」

男性（名護）は翔夜達に自己紹介する。

「それで、アンタは俺に何の用だ？」

翔夜は名護に質問する。

「ディケイドの継承者である君に私の試練を受けて貰おう。」「

名護は翔夜の質問に答えるとイクサベルトを腰に巻きイクサンックルを構える。

「どういづ事なんだ？」

翔夜も『ディケイドライバー』を腰に巻きカードを構える。

「私の試練をクリアすれば君にキバの本当の力をくれてやるわ。」

「レ・ディ・イー」

「大体解った、要するにお前を倒せば良いくんだりつ。」

〔KAMEN-RIDE〕

「「変身!」」

〔フ・イ・ス・ト・オ・ン〕

〔DECADE STRIKE〕

名護は仮面ライダーイクサ バーストモード、翔夜は『ディケイドS』に変身しそれぞれの武器を構える。

「継承者、その実力、私に見せて貰おう。」

イクサBはイクサカリバーをカリバー・モードにして構え、『ディケイドS』に言い放つ。

「良いぜ、だが、返り討ちにしてやるがな!」

『ディケイドS』はライドブッカーをソードモードにしてイクサBに切

りかかる。

「どうなつてこるの？」

なのはは一人の戦いに驚いていた。

海鳴中学校 音楽室

「どうしだの、突然呼び出して？」

「すずかちゃん、この前はごめんね。」

その頃、海鳴中学校の音楽室ではすずかを呼び出した紅牙がすずかに謝っていた。

「へえ～、黒月君って以外としっかりしているんだね。」

「ほんまやな。」

「それよりもフェイトさんにはやでさん」

「こんな事をして良いんですかね？」

「別に良いでしょ。」

「それより、アイスが食いたい。」

音楽室の扉の隙間からフェイト、はやで、和樹、健太郎、アリサ、アンクが一人の様子を見ていた。

「別に良いよ、それより紅牙君って一体何者なの？」

「それは、その…………」

すずかの質問に紅牙は黙り込んでいる。

「見つけましたよー！」

突然灰色のオーロラが出現すると中からポーラベアファンガイア（ポーラベア）とライノセラスファンガイア（ライノセラス）が現れる。

「あれは！？」

「ファンガイア！？」

ファンガイアを見た和樹と健太郎は扉を開けて紅牙の所に駆け寄る。

「和樹君、健太郎君！？」

二人に驚く紅牙。

「手を貸すよ、紅牙！？」

「ゴメン、盗み聞きするつもりは無かつたんだけど。」

和樹と健太郎はそれぞれの変身アイテムを取り出す。

「邪魔をするな、人間が！？」

「ようやく、我等の王子を見つけたのだからな！？」

ライノセラスとポーラベアは怒りながら和樹達に言つ。

「「えつー?」

ポーラベアの言葉に驚く和樹と健太郎。

「「めん、今は説明出来ないんだ、キバツトー!」

『キバツ ていくぜ!』

「何だか解らないけど、アンク、メダル!」

「ちつ、早く終わらせてアイスを食べに行くからなー!」

「モモタロス、いくよー!」

『久しぶりに、暴れるぜー!』

「「「変身ー!」」

【SWORD FORM】

「タカ、トラ、バッタ、タ・ト・バ、タ・ト・バ、タトバー!」

「俺、参上ー!」

「フュイトさんとはやてさんは、すずかさん達をお願いします。」

電王Sは決まりのポーズをして、オーズはフュイトとはやてにすずかを守るように頼む。

「二人共、いくよー!」

キバツ、電王S、オーズはポーラベアとライノセラスに立ち向かう。

To
be
con-
tinued.
.

第26話 レッスン・イクサの試練と紅牙の秘密（後書き）

次回、『夢想・キバの王子と灼熱コンボ』

感想と質問を待っています。

第27話 夢想・キバの王子と灼熱コンボ（前書き）

雄司「前回までの仮面ライダー&リリカルのはーー！」

・放課後、翔夜となのはは名護という人に会い、いきなり戦い始める。

・その頃、音楽室では紅牙はすずかちゃんに謝つてると、ライノセラスファンガイアとポーラベアーファンガイアに近くで盗み見をしていた和樹や健太郎達と共に戦う事になる。

翔夜「何で、お前があらすじをやつているんだ？」

雄司「今回のキバ編、今の所出番が無いから。」

第27話 夢想・キバの王子と灼熱コンボ

海鳴中学校 グランード

「おらあつー！」

「ぐあつー...」「」

音楽室からグランードに移動したライノセラスはキバK達を殴り飛ばしていった。

「行きますよ！」

「ぐああつー！」

ポーラベアーは高速移動でキバK達の間合いに入り、大剣で切り裂いていく。

ポーラベアーの攻撃に倒れ込むキバK達。

(なのは、翔夜君と一緒にならすぐに来てー！)

フュイトは念話でなのはに向える。

(こっちもすぐに向かいたいんだけど。)

なのははティケイドSとイクサBの戦いを見ていた。

「はあつ！！」

「ディケイドSはライドブッカーソードモードでイクサBに切りかかるが。

「甘いな！！」

イクサBは「ディケイドS」の攻撃を紙一重で避け、イクサカリバークリバー モードで「ディケイドS」を切り裂く。

「筋は良いが、剣の腕は30点だな。」

「何だと！？」

イクサBは「ディケイドS」の評価をすると、イクサカリバーをガンモードにして構える。

「銃の腕はどうかな？」

イクサBはイクサカリバーで「ディケイドS」を狙い撃つ。

「ぐつ、嘗めるなよ！！」

「ディケイドS」はイクサBの攻撃を避け、ライドブッカーをガンモードにして、更に一枚のカードを「ディケイドライバー」に装填する。

「ATTACK-RIDE-BLAST」

「はつ……」

「ディケイドSは『ディケイドブラスト』をイクサに向けて放つが。

「その程度か！？」

イクサはイクサカリバーをガンモードからソードモードに変え、『ディケイドブラスト』を全て切り落とす。

「銃の腕は12点だな。」

イクサBは『ディケイドS』の評価をする。

（すぐに行けないとと思う。）

なのはは『ディケイドS』とイクサBの戦いを見て、念話でフェイトに状況を伝える。

「そうだ、二人はサイのファンガイアを頼む。」

オーズは何かを思いつくと、キバKと電王Sに指示をする。

「別に良いが

「一人で大丈夫ですか？」

オーズの指示に疑問を感じる電王SとキバK。

「大丈夫、秘策があるから。」

オーズはやつまつと一枚のコアメダルを取り出す。

「和樹の奴、まさか！？」

オーズの思いつきに気づいたアンクは慌ててメダルホルダーを開く。
(和樹の奴、いつの間にライオンとチーターのメダルを盗ったんだ
？)

メダルホルダーを見るとライオンとチーターメダルが入っていなか
つた。

「ライオン・トラ・チーター、ラッタ、ラッター、ラトトラーター」

オーズはタトバコンボからラトラーターコンボに変わる。

「はあっ！！」

「ぐつ！！」

「眩しい！！」

オーズはライオディアスでライノセラスとポーラベアーを怯ませる。

「はつ！！」

「ぐおつ！！」

オーズはチーターレッグのスピードで素早くファンガイア達の間合
いに入るとそのままポーラベアーを蹴り飛ばす。

「嘗めないでくださいよーー！」

ボーラベアも高速移動でオーズに襲いかかる。すると

「凄いな」

「僕達も行きましょーー！」

電王Sはオーズの力に驚き、キバKは紫色のフェッスルを取り出し
キバットに吹かせる。

『ドッガハンマーーー!』

キバKはキバフォームからドッガフォーム(キバD)に変わる。

「健太郎達はアイツを引きつけて、僕が決めるーー！」

『ドッガバイトーー!』

「解ったよーー！」

(任せた)

【FUD CHARGE】

「おのれええーー！」

ライノセラスはキバD達に襲いかかる。

「俺の必殺技ーー！」

「ぐつーーー！」

「ぐつーーー！」

電王Sは『エンガシャー』でライノセラスの動きを封じる。

「はああー！」

空高くジャンプしたキバロはライノセラスに向かってドッガハンマーを振り下ろす。

「スペシャルバー・ジョーンー！」

電王Sのエクストリームスラッシュとキバロのドッガ・サンダースラップが決まり、ライノセラスは爆死する。

「ハツー！」

「はあつー！」

高速移動をしながらポーラベアーの大剣とオーズのトラクロードがぶつかり合っていた。

「スキヤニングチャージ」

「せいやーー！」

ラトラーーター・コンボの必殺技”ガッシュクロス”が決まり、ポーラベアーは爆死する。

「和樹ーー！」

「やりましたねーー！」

変身を解いた健太郎と紅牙はオーズの所に駆け寄る。

「ハイ、お二人も……」

オーズは一人を見て変身を解くと、そのまま倒れ込んでしまう。

「和樹！？」

「大丈夫かいな！？」

「全く、無闇にコンボを使うなーー！」

倒れ込んだ和樹を見たフェイト、はやて、アンクはすぐに駆け寄つた。

キヤツスルドラン 王の間

その頃、王の間ではライオンファンガイア（ライオン）やスワロー・テイル（スワローテイル）ファンガイアが王の間を荒らしていた。

「やはり此処にはキバが居ないようだな。」

一人の男性が王の間の椅子に座り周りを見渡す。

「あら、大変な事になつてゐるね。」

そんな彼等に気づかれないように、キバットの妹、キバーラは彼等の様子を見ていた。

To be continued.

第27話 夢想・キバの王手と灼熱コンボ（後書き）

次回、『威風堂々・キングの企みと重量コンボ』

感想や質問を待っています。

第28話 威風堂々・キングと重量コンボ（前書き）

- アンク「これまでの仮面ライダーamp;リリカルなのは、
- ・ディケイドSはイクサBに大苦戦
- ・その頃、健太郎達はライダーに変身するがファンガイア達に苦戦、しかし和樹が俺が持っていたコアメダルを盗つてラトラーターコンボに変身しファンガイア達を倒す。
- ・しかし、キャッスルドランではライオンファンガイアとスワロー・テイルファンガイア、そして謎の男性が占拠していた。」イラつきながらもあらすじの台本を読む。
- 和樹「何でイラついているんだ、アンク？」原因
- アンク「お前のせいだろつ……」アイスを食べていた。

第28話 威風堂々・キングと重量コンボ

キヤツスルドラン 王の間

「遂に我等の城を取り戻したぞ！！！」

王の間で喜びながら叫ぶライオンファンガイア。

「喜ぶなルーク、いずれ俺が戻る城だつたんだ、取り戻して当然だ。」

椅子に座っていた男性はライオンファンガイアに言い放つと、椅子から立ち上がる。

「キング、キバの搜索に向かわせたライノセラス達がやられました。」

突然、王の間にライフエナジーが現れるとスワロー・テイルファンガイアは男性に報告する。

「場所は何処だ、ビショップ」

スワロー・テイルファンガイアの報告にキングは冷静に聞く。

「海鳴中学校です、他の仮面ライダーが居るみたいですが、どういたしましょうか？」

スワロー・テイルファンガイアはキングに尋ねる。

「キングが命ずる、ルークとビショップはショックカー帝国の戦闘員と共にキバを此処に連れてこい、他の仮面ライダー達は始末しろ。」

「「御意！」「

キングがライオンファンガイアとスワロー・テイルファンガイアに命令すると、二人はキャッスルドランを後にする。

「早く我の所に来い、息子よ」

キングは窓を見て嘆いていた。

「もう終わりか、『ディケイドの継承者』

イクサBと戦つていた『ディケイド』は地に伏せていた。

「まだだぜ、今度はこいつがお前を評価してやるよ。」

『ディケイド』は一枚のカードを取り出し、『ディケイドライバー』に装填する。

「KAMEN-RIDE-KUUGA」

『ディケイド』はクウガM（DSクウガM）に変わり、イクサBに殴りかかる。

「私を評価するだと！？」

イクサBはDSクラウガMの攻撃を避けるとイクサカリバーでDSクラウガMに切りかかるが、DSクラウガMはイクサBからイクサカリバーを奪う。

「まず、武器を奪われたからマイナス30点！！」

DSクラウガMはイクサBに言い放つと一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「FORM - RIDE……KUUGA、TITAN」

DSクラウガMはクラウガ タイタンフォーム（DSクラウガT）にフォームライドすると奪ったイクサカリバーはタイタンソードに変わる。

「はあっ！…」

DSクラウガTはタイタンソードでイクサBを切りつけていく。

「まだだぜ行くぜ！…」

DSクラウガTはそう言つと一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「FORM - RIDE - KUUGA、DRAGON」

DSクラウガはタイタンフォームからドラゴンフォーム（DSクラウガD）にフォームライドし、タイタンソードはドラゴンソードに変わ

る。

「ハツ……」

「ぐつ……」

DSクウガDはドリゴンフォームのスピードでイクサBを翻弄しどラゴンロッドで吊りつけてしまふ。

「相手の攻撃を食らうすがだな、マイナス30点だ……」

DSクウガDはそのままマイティフォームに戻り一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「FINAL - ATTACK - RIDE.....KU, KU, KUU
GA】

「はああつ……」

「ぐおおつ……」

DSクウガMの必殺技”マイティキック”がイクサBに決まり、イクサBは吹っ飛ばされ変身が解ける。

「変身が解けたからマイナス40点、これでマイナス100点だな。」

」

DSクウガMは名護に言ひ放つと変身を解く。

「翔夜君、少しありすぎじゃないの?」

「翔夜君、少しありすぎじゃないの?」

なのはが翔夜の所に駆け寄る。

「大丈夫だろ？、キバの本当の力を教えて貰おうか？」

翔夜は名護に尋ねる。

「どうやら君の実力なら、キバの本当の力を手に入れられるだろ？」

名護はそう言つと、突然出現した灰色のオーロラに入つて行く。

「オイ、キバの本当の力は！？」

翔夜は名護を追いかけよつとするが、名護は灰色のオーロラの中に消えて行く。

「さて、どうするか？」

灰色のオーロラが消えると翔夜はその場で考え込む。

「翔夜君、紅牙君達が大変なんだよ！…」

「何だつて！？」

なのはは紅牙達の状況を翔夜に説明する。

海鳴中学校 音楽室

ライノセラス達を倒した、紅牙達は音楽室で休んでいた。

「それで、紅牙君って一体？」

「アイツ等は、お前の事を王子とか言つていたが？」

健太郎とアンクは紅牙に尋ねる。

「僕はファンガイアの王子です。」

『しかも、コイツの親父はそのファンガイアのキングだしな。』

紅牙とキバットは健太郎達に真実を話す。

「「紅牙君が！？」」

「「ファンガイア！？」」

すずか、アリサ、はやて、コンボの影響で倒れた和樹を看病していたフェイトは紅牙とキバットの言葉に驚いていると。

学校のグラウンドで爆発音がする。

『健太郎、ショッカーの奴らだぜ！…』

健太郎の所にモモタロスがショッカーの出現を知らせに現れる。

「フェイト達は和樹を頼む、行くよ紅牙君！…」

「えつ、でも僕は？」

健太郎の言葉に困惑する紅牙。

「今はそんな事を言つていい場合ぢや無いよーー。」

健太郎はそう言つと、紅牙を連れてグランドに向かう。

海鳴中学校 グランド

「キバよ、隠れてないで出て来いーーー。」

ライオンファンガイアとショックカー戦闘員がグランドで暴れていた。

「隠れるつもりは無いよーーー。」

ライオンファンガイア達の前に健太郎と紅牙が現れる。

「見つけたぞキバ、貴様をキングの前に連れて行くーーー。」

ライオンファンガイアはそう言つとショックカー戦闘員は健太郎と紅牙に襲いかかる。

「「変身ーーー。」

健太郎は電王ロッドフォーム（電王R）、紅牙はキバKに変身する。

（何でウラタロスなのーー。）

「先輩には任せないと言つた最近、僕の出番が無いからね。」

メタ発言をする電王Rは「テンガツシャー」をロッドモードにして襲いかかるショックカー戦闘員を薙払う。

「ハツ！！」

キバKはショックカー戦闘員をパンチやキックで倒していくと、ライオンファンガイアに向かつて蹴り飛ばそうとするが。

「効かんな、フン！！」

キバKの攻撃を受け止めたライオンファンガイアはキバKを殴り飛ばす。

（紅牙君！）

「あのファンガイア、かなり強いね。」

電王RはキバKのフォローに向かおうとするが、ショックカー戦闘員が邪魔をする。

「キングの所に行こうか。」

「くつ！！」

ライオンファンガイアはキバに駆け寄ろうとするが、キバKは立ち上がりライオンファンガイアから少し離れる。

「させらるか！！」

ライオンファンガイアとキバKの前に和樹が駆けつける。

(和樹君！？)

「あれ、倒れたいたんじゃ無いの？」

電王Rは和樹に驚いていた。

「話はフェイトさん達から聞きました、ファンガイア、紅牙は俺達の仲間だ！！」

和樹はライオンファンガイアに言い放つと、オーズドライバーを腰に巻き三枚のメダルを取り出す。

「変身！..！」

「サイ・ガリラ・ゾウ、サゴー・ゾウ.....サゴー・ゾオツ」

和樹はオーズ サゴーゾコンボに変身する。

「和樹君、そのコンボは！？」

キバKはサゴーゾコンボの姿になつたオーズに尋ねる。

「またアンクからメダルを拝借。」

オーズは仮面の奥で苦笑いすると、ライオンファンガイアを見る。

「何が来ようと無駄だ！..！」

ライオンファンガイアはサゴーゾコンボに殴りかかる。

「ハツ！！」

オーズは片方の「ゴリバゴーン」でライオンファンガイアの攻撃を防ぐと、もう片方の「ゴリバゴーン」でライオンファンガイアを殴り飛ばす。

「おのれえええ！！」

ライオンファンガイアは指先からロケットクローラーを放つ。

「はあああーー！」

オーズはバゴーンプレッシャーを放ち、ロケットクローラーを撃ち落とすとそのままライオンファンガイアにダメージを与える。

「スキヤニングチャージ」

「せいやーー！」

サゴーゾコンボの必殺技”サゴーゾインパクト”が決まり、ライオンファンガイアは爆死する。

「なかなか、凄かつたね。」

電王Rがオーズの所に駆け寄る。

「どうやらルークを倒したようだな。」

突然灰色のオーロラが出現すると中からキングが現れる。

「アレは！？」

オーズはキングに驚く。

「父さん！……！」

キバーはキングを見て叫ぶ。

「今度は私が相手しよう。」

キングはそう言つてビートルファンガイアの姿に変わる。

「大変な事になつたな、？世

『全くだ』

海鳴中学校の屋上では一人のバイオリンケースを持った男性と黒い
キバットが様子を見ていた。

To be continued .

第28話 威風堂々・キングと重量コンボ（後書き）

次回、『アンコール・天才のメロディー』

感想と質問を待っています。

第29話 アンホール・天才のメロディー（前書き）

キバ編もいよいよ後半へ

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第29話 アンホール・天才のメロディー

「はあああーー！」

ビートルファンガイアはオーズと電王Rに雷撃を放つ。

「「ぐあつーー！」」

オーズと電王Rはビートルファンガイアの攻撃を食らい、変身が解けその場に倒れる。

「継承者も大したこと無いな」

ビートルファンガイアは倒れた二人に言い放つとキバKを見る。

「紅牙、久し振りだな。」

「父さん、何故人間を襲うんですか！？」

紅牙はビートルファンガイアに尋ねる。

「人間は我らファンガイアにとつて餌に過ぎない、だから襲うのさ！」

「違うよ、何時か人間とファンガイアは手を取り合つていける僕はそう信じている！？」

ビートルファンガイアの言葉に反論するキバK。

「その通りだぜ、紅牙！！」

キバKの所にクウガMに変身した雄司が駆けつける。

「雄司君！！」

クウガMの登場に驚く紅牙。

「誰だ貴様！？！」

ビートルファンガイアはクウガMに尋ねる。

「紅牙の友達、仮面ライダークウガこと冴島 雄司！？」

クウガMはビートルファンガイアに名乗るとビートルファンガイアに殴りかかる。

「紅牙の友達だと！？」

「ああ、事情はイマイチ解らないが、俺達は紅牙の友達なんだよ、だから友達の為に体を張れるんだ！？」
「何！？」

ビートルファンガイアはクウガMの攻撃を受け止めるが、クウガMはビートルファンガイアを投げ飛ばす。

「おのれええ、人間風情が！？」

クウガMに怒り狂つたビートルファンガイアはクウガMにエネルギー一弾を放つ。

「ぐあああつ！？」

ビートルファンガイアの攻撃を食らつたクウガMは変身が解け地面に倒れ込んでしまう。

「人間風情がファンガイアのキングである俺に逆らつとは、やはり愚かだな。」

ビートルファンガイアは雄司を足で踏みつけながら言い放つ。

「父さん、止めてください！！！」

キバKはビートルファンガイアに叫ぶ。

「なら紅牙、貴様は俺と共に城に来い！！！」

ビートルファンガイアはそう言つと人間の姿に戻る。

「…………解りました、父さん。」

キバKは変身を解きキングの所に歩み寄る。

『オイ、紅牙……』

キバットは紅牙は止めよつとする。

「キバット、雄司に伝えといで、僕も友達の為に体を張るつて。」

紅牙はそう言つと、ビートルファンガイアと共にキャッスルドランに向かつて行つた。

「くつ……紅牙」

「何で行くの、紅牙君」

「紅牙君は、俺達の為に」

田を覚ました雄司、和樹、健太郎はキバットから事情を聞き悔しい表情になっていた。

『みんな……』

キバットは三人を心配して見ていると。

「案ずるな、貴様等は此処で消えて貰おう。」

雄司達の前にスワロー・テイルファンガイアと数体のショッカー戦闘員が現る。

「ファンガイア!!」

「まだ、居たのかよ!!」

「幾ら何でも、しつこじよーーー！」

雄司達はそれぞれの変身アイテムを取り出し変身しようとするが。

「動くな、こっちには人質が居るのだからなーーー！」

スワロー・テイルファンガイアはそう言つと数体のショッカー戦闘員が縄で縛つたフェイド、はやて、アリサ、すずかを連れてくる。

「フェイトさん！！」

「はやてちゃん！！」

「アリサちゃんにすずかちゃん！！」

雄司達はフェイト達を見て驚く。

「私はルークとは違つて、策を考える者でね。」

スワロー・テイルファンガイアはそう言つと剣を取り出し構える。

「卑怯だぞ！！」

「はやてちゃん達を解放しろ！！」

和樹と健太郎はスワロー・テイルファンガイアを睨みつけながら言い放つ。

「卑怯で結構、勝てば良いのだからな。」

スワロー・テイルファンガイアはそう言つとすずか達に剣を向けようとするが。

「――――――！」

「何――？」

突然、黒いキバットが現れるとショックカー戦闘員やスワロー・テイルファンガイアを吹つ飛ばし、その隙にすずか達はスワロー・テイルファンガイア達から離れていく。

「誰だ、一体――？」

スワロー・テイルファンガイアは周囲を見渡すと一人の男性が現れる。

「誰だ貴様！？」

スワロー・テイルファンガイアは男性に尋ねる。

「紅音也、偉い人だ。」

男性（音也）は自らの名を名乗るとすずか達の方を見る。

「全く、さつきから見ていれば、女性を人質にするとは、最低だな。」

「

音也はそのままつと、スワロー・テイルファンガイアを睨みつける。

「！」の俺が判決を下そう。

音也はスワロー・テイルファンガイアに指を指す。

「死だ、行くぞ？」

音也はそう言つと、さっきの黒いキバット（キバットバット？世）が飛んでくる。

『絶滅タイムだ、ガブリ！』

「変身」

音也は仮面ライダーダークキバ（ダークキバ）に変身する。

「アレは！？」

「キバなのか？」

「でも色が違う！！」

ダークキバの登場に驚く雄司達。

「一人で何が出来るんだ！！」

スワロー・テイルファンガイアはダークキバに言い放つとショッカー戦闘員と共にダークキバに襲いかかる。

「誰が一人だけかな。」

「FINAL -ATTACK -RIDE.....DE、DE、DEC
ADE」

「デイベインバスター！
「はあっ！！！」

数十体のショッカー戦闘員にデイベインバスターとデイメンションブلاستが放たれ、数十体のショッcker戦闘員は爆死する。

「無事みたいだな。」

「みんな！！」

翔夜が変身したディケイドSとバリアジャケットを纏つたのはが雄司達の所に駆けつける。

「なのは！」

「翔夜、遅いぜ！！」

フェイントと雄司は『ディケイド』達の登場に喜ぶ。

「どうやら、名護は『ディケイド』の継承者に負けたみたいだな。」

ダークキバは『ディケイド』を見る。

「アンタは？」

『ディケイド』はダークキバに尋ねる。

「紅 音也、今は仮面ライダーダークキバだけだな。」

ダークキバは『ディケイド』に簡単な自己紹介をする。

「おのれええ、戦闘員！！」

「イー！」

スワロー・テイルファンガイアはショッカー戦闘員と共に『ディケイド』達に襲いかかる。

「アクセルシューター！」

なのははショッカー戦闘員達にアクセルシューターを放ち、ショッカー戦闘員達は怯む。

【ATTACK・RIDE・SLASH】

「ハツ……」

ディケイドSが怯んだショッカー戦闘員達にディケイドスラッシュで切り倒す。

「お前の相手は俺だ。」

「讐めるなああ！！！」

スワロー・テイルファンガイアは剣でダークキバに切りかかるが、ダークキバはスワロー・テイルファンガイアの攻撃を避け、そのまま力ウンターでパンチやキックを食らわしていく。

「決めるか。」

『ウエイクアップ・2』

「はあああつ……」

ダークキバの必殺技”キングスバーストエンド”が決まる。

「ファンガイア…………は、最高の…………種族だああ！！！」

スワロー・テイルファンガイアはそう叫ぶと爆死する。

「さて、継承者達よ大変な事になつてゐるみたいだな。」

ダークキバは変身を解き翔夜達に言い放つ。

「…………どういう事だ（なの）？」

変身を解いた翔夜となのは達は音也の言葉に疑問を感じていた。

To be continued.

第29話 アンコール・天才のメロディー（後書き）

次回、『終止符・親と子の想い』

感想と質問を待っています。

第30話 終止符・親と子の想い（前書き）

健太郎「これまでの仮面ライダー & リリカルなのはは

M 健太郎「紅牙はキングと共にキャッスルドランに向かつた、しかも亀公に出番を取られた、〇一二」

U 健太郎「ビショップ事スワロー・テイルファンガイアがショックカー戦闘員と共にやはやてちゃん達を人質にして襲いかかろうとする、本当に酷い奴だね。」

K 健太郎「しかし、紅音也といつ偉そうな奴がはやてちゃん達を助けると、黒いキバに変身したのには、驚いたで。」

R 健太郎「そして、翔夜と言うかディケイドSがなのはちゃん達と一緒にスワロー・テイルファンガイアを倒したんだよね。」

はやて「所で何で此処に居るん？」

イマジンズ「出番が無いから。」

シグナム「主、はやて」

シャマル「私達も出番が

ヴィータ「欲しい！？」

ザフイーラ「うむ

リイン？「リインは今回は出番があるよ。」

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第30話 終止符・親と子の想い

「とりあえず、改めて紹介しよう俺は紅 音也、将来は歴史の本に載るほどの人間だ、覚えといて損は無いぞ。」

音也は翔夜達に自己紹介するが。

（何か翔夜以上の俺様キャラみたいだけど）

（でも、あの人気が変身したライダーは強かつたですよ）

（それに、あのライダーはキバに似てたし）

雄司、健太郎、和樹の三人は小声で音也に聞こえないように喋っていた。

『音也、紅 音也じゃないのか！？』

キバットは音也を見て驚いていた。

「キバット君、音也さんを知っているの？」

すずかはキバットに尋ねる。

『この人は紅 音也、紅牙のバイオリンの先生なんだ。』

キバットは音也の事を翔夜達に話す。

「それでバイオリンの先生が、紅牙の事を話に来たのか？」

翔夜は音也に尋ねる。

「一応な、紅牙と紅牙の父親であるキングの話だ。」

音也はいつも紅牙とキングの話を始める。

「紅牙の父親はファンガイアのキングだが、母親は人間で、紅牙が生まれた頃の二人はファンガイアと人間の共存を夢に努力をしていた、だが紅牙が5歳の頃だ、キングは突然母親のライフエナジーを吸収し、母親は死んでしまった、それから5年後、それを知った紅牙はキヤツスルドランと共にキングの前から姿を消したんだ。」

音也はそう言つと、持つていたバイオリンケースからバイオリンを取り出す。

「そうだつたんだ。」

「紅牙にそんな過去が会つたんだ。」

フェイントと和樹は音也の話を聞いて少し悲しくなつていた。

「何で、紅牙君のお父さんは愛していた人を殺したの？」

「なのはちゃん」

なのははいつの間にか目に涙を見せていて、はやてはなのはの心配をしていた。

「俺は解らないな、紅牙の思いとキングの思いが。」

「オイ翔夜、何言つているんだ！？」

翔夜の言葉に雄司は翔夜を睨む。

「俺は父親が死んでいるからな。」

翔夜は少し悲しそうな顔で全員に言い放つ。

「それより、継承者諸君に俺の一千万円の価値がある演奏をしよう。」

音也は翔夜達にバイオリンの演奏をする。翔夜達の周りに美しいバイオリンの音色が響く。

数分後

「何だらつ、今の曲を聞いて。」

「悲しい気持ちも」

「辛い気持ちが晴れていいく。」

音也の演奏が終わると翔夜達の気持ちが晴れる。

「音也さん、今の演奏は？」

すずかは音也に尋ねる。

「人の心は音楽を奏でている、その心が悲しいなら悲しい音楽になり、辛い心なら辛い音楽になるのさ。」

音也はそつと持っていたバイオリンをバイオリンケースにしまう。

「俺は息子にそれを伝えられたからな。」

音やは翔夜にそう言い放つ。

「大体、解った。」

翔夜はそう言いつとたの場から離れようとする。

「翔夜君！？」

「何処に行くんだよ！？」

翔夜を呼び止めるなのはと雄司。

「決まっているだろ？、紅牙を取り戻しに行くんだよ。」

翔夜はそう言いつとキャッスルドランに向かっていく。

「私達も！」

「そうやな！」

「和樹君、健太郎君、行こ！」

「ハイ！！」

「アリサちゃんとすずかちゃんは写真館で待つてて。」

「解ったよ、雄司！」

「紅牙君を助けて！」

すずかとアリサ以外は翔夜同様にキャッスルドランに向かった。

「私達も行こうか？」

「そうだね、アリサちゃん。」

すずかとアリサも『真館に向かった。

グランドには音也が一人残っていた。

「行つたぞ、渡」

音也はそう言つと銀色のオーロラが出現し中から音也の息子、紅渡が現れる。

「気づいていたのですね、父さん。」

「これでも、お前の父親だからな。」

音也は苦笑いしながら渡を見る。

「ありがとうござります、僕の代わりに継承者達にキバの力を教えてくれて。」

渡は音也にお礼を言ひ。

「戦えない息子の為だ、気にするな渡。」

音也はそう言つと出現した銀色のオーロラに入つていく。

「それから、紅牙君の事もありがとうござります。」

「アーツは鍛えがいがあったよ。」

音也はそう言つと笑つ。

「そうですか。」

渡も笑つているとキバの面影と重なる。

キャッスルドラン 王の間

「紅牙」

「父さん、やはり人間を全て殺すつもりですね？」

その頃、キャッスルドランの王の間ではキングと紅牙は睨み合っていた。

「当然だ、それでもお前は人間とファンガイアが手を取り合つていけると言つのか！？」

キングは紅牙に尋ねる。

「ハイ、僕はこの半年間で色々な人間に会いました、その人達は半分ファンガイアである僕に優しく、時には厳しく接してくれました。

」

紅牙は色々な人達を思い出しながらキングに話す。

「だから僕は人間とファンガイアはいつか手を取り合つていけると信じています。」

紅牙は決意の目でキングを見る。

「そ、うか、なら私はキングとしてお前を殺す。」

キングはそう言つてビートルファンガイアの姿に変わり大剣を構える。

「父さん、僕は負けません！！」

紅牙はザンバットソードを取り出しその刃をキングに向ける。

「これで、親子の戦いも決着が着くね。」

二人に気づかないようにキバーラは戦いを見ていた。

その頃、翔夜達は

「まさか此処に来て、まだファンガイアやショッカーが居るのかよ！！」

キャッスルドランを前に翔夜達の前には数体のファンガイアとショッカー戦闘員が立ちはだかる。

「真導君達はキャッスルドランの中に行つて下さい、アンク！！」

「『ンボは絶対に』するなよーー。」

和樹はそつ言いつとアンクから投げられたメダルを受け取る。

「此処は任せときのまちやん、リイン行くでー。」

『はいはい、はやてちやん。』

はやてはやうひひリイン？が飛んでくる。

『健太郎、僕が行くけど良いよね？』
「ちよ、ちよっと、リュウタロス！？」

リュウタロスは健太郎に憑依する。

「答えは聞いてない。」

R 健太郎は『ンオウベルトとライダーパスを取り出す。

「雄司君、紅牙君を助けてあげて！」

フェイトは待機中のバルティツシユを取り出す。

「「変身！」「
「セットアップ！」

〔 GUN FORM 〕

「タカ・トラ・バッタ、タ・ト・バ、タ・ト・バ、タトバーー！」

「〔 set up〕」

健太郎は電王 ガンフォーム（電王G）に、和樹はオーズ タトバ コンボに変身し、はやてとフェイトはバリアジャケットを纏い、それぞれのデバイスを構える。

「解った、此処は頼んだぞ！」

「みんなも無理をしないで！」

「紅牙は任せとけ！！」

翔夜、なのは、雄司はキャッスルドランの内部に入っていく。

「イー！！」

一体のショックカー戦闘員が翔夜達の邪魔をしようとするが数発の銃弾がショックカー戦闘員に命中する。

「お前達の相手は僕達だけ良いよね？」

電王Gは怪人達に言い放つ。

「答えは聞いてない！！」

電王Gの台詞と同時にオーズ達は怪人達とぶつかり合つ。

第30話 終止符・親と子の想い（後書き）

次回、仮面ライダー & リリカルなのは

雄司

「迷つてしまつた！！」

キバーラ

「アナタに力を貸すわ。」

なのは

「変身！」

キング

「トドメだ、紅牙！！」

翔夜

「それでも、紅牙はどんな事があつても信じている筈だ人間とファンガイアが手を取り合つていける事を。」

〔FINAL・FORM・RIDE……KI、KI、KIVIA〕

次回、『フィナーレ・王子の友情とキングの眞実』

？？？

「面白い事になつてゐるね、翔夜。」

感想と質問を待つています。

第31話 フィナーレ・HKGの友情とキングの真実（前書き）

キバ編のラストです。

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第31話 フィナーレ・HKGの友情とキングの眞実

「行くよーー！」

電王Gは「デングガツシャーをガンモードにしてステップを踏みながらファンガイアやショックカー戦闘員を撃ち抜いていく。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け。石化の槍、ミストルティーンー！」

はやはでは石化砲撃魔法のミストルティーンをショックカー戦闘員やファンガイアに放ち、ショックカー戦闘員やファンガイアは石になる。

「はやてちゃん、凄いー！」

はやてに驚く電王G。

「トリプルスキャーリングチャージ」

「せこやあああああつーー！」

オーズはオーズバッシュでショックカー戦闘員やファンガイアを切り裂く。

「プラズマスマッシュヤーー！」

フェイトはプラズマスマッシュヤーでショックカー戦闘員やファンガイアを撃ち抜く。

キヤツスルドラン 内部

「翔夜君、雄司君は？」

「えつ！？」

キヤツスルドランの内部に入ったなのはと翔夜、しかし雄司が居ない事に気づく二人。

「アイツ、また迷子かよ！」

『二人共、王の間はこっちだ！』

翔夜は呆れながらもキバットの指示に従いなのはと共に先に進む。

その頃、雄司は

「迷つてしまつた！？」

雄司は翔夜達とは別の場所で迷っていた。

「アレは！？」

雄司は近くで一人の人影を見つける。

「ハツ！？」

「フン……」

紅牙のザンバットソードとビートルファンガイアの大剣がぶつかり合っていた。

「紅牙……」

「雄司君、どうして此処に……？」

紅牙は雄司に気づき驚く。

「隙有利だ……！」

ビートルファンガイアは紅牙に向けて衝撃波を放つ。

「うわあっ……！」

ビートルファンガイアの衝撃波を食らい紅牙は床に叩きつけられる。

「紅牙……」

紅牙の所に駆け寄る雄司。

「人間、私はキングとして息子を殺すんだ……！」

キングは大剣を構えながら雄司に言い放つ。

「そんな事はさせない、……変身……！」

雄司はクウガMに変身しビートルファンガイアを殴りかかる。

キヤツスルドラン 王の間

「此処には居ないみたいだね。」

「ああ」

周りを見渡すなのはと翔夜は机に置いていた写真を見ていた。

『早く紅牙を探そうぜ！』

『紅牙ならキングと戦つていいよ。』

キバットの妹のキバーラが現れる。

『キバーラ、今まで何してたんだ！？』

キバットはキバーラを心配した表情で尋ねる。

『キングの動向を見ていただけよ、それより早く紅牙を助けた方が良いよ。』

『どういう事だ？』

キバーラの言葉に翔夜が尋ねる。

『どうやらキングは本気で紅牙を殺すみたい。』

キバーラはそつそつとなの周囲を飛び回る。

「とにかく行くか、なのは、キバット！」

翔夜はキバーラの話を聞くと王の間から出よつとするが。

「やうはさせないぜー！」

イヤーウイッグファンガイア（イヤーウイッグ）が現れ翔夜達の邪魔をする。

「まだ、居たのかよ！？」

翔夜はディケイドライバーを構えよつとするが。

「翔夜君、此処は私に任せで。」

『面白そつね、アタシもやるわ。』

なのはとキバーラはそつ言つと翔夜の前に立つ。

「「『えつ？』」「

キバーラの言葉に驚く翔夜、なのは、キバット。

「アナタに力を貸すわ。」

「わ、私に！？」

キバーラはそつ言つとなのはの指を噛む。

『か～ふつー』

「変身！」

なのはは仮面ライダー キバーラ（Rキバーラ）に変身する。

「コレは一体？」

Rキバーラは自らの姿に驚く。

『驚いている場合じゃ無いよ。』

キバーラはそつまつと、イヤーウィッグは両腕のシザーアームでRキバーラに襲いかかるとするが。

「ハツ！」

Rキバーラはキバーラサーベルを取り出しイヤーウィッグの攻撃を受け止める。

「翔夜君、早く行つて！！」

「解つた、行くぞキバット！！」

『キバーラ、此処は頼んだぞ…』

イヤーウィッグをRキバーラに任せ、翔夜とキバットは紅牙の所に向かった。

その頃、雄司と紅牙は

「どうしたんだ人間、その程度か？」

ビートルファンガイアの猛攻にクウガMはボロボロになり倒れかけていた。

「こまま、殺したい所だが」

ビートルファンガイアはクウガMの後ろで立ち上がろうとしていた紅牙を見る。

「トドメだ、紅牙！！」

キングは紅牙に向けて雷撃を放つが。

「させるか！！」

クウガMは紅牙の盾になりビートルファンガイアの攻撃を受ける。

「ぐああああっ！！！」

「雄司君！！！」

クウガMは変身が解け、紅牙はすぐに雄司の所に駆け寄る。

「雄司君、どうして君達は僕をそこまでして助けるの！？」

紅牙は涙目になりながら雄司に尋ねる。

「紅牙……友達を助けるのに……理由なんて……無いんだよ、助けたいから……助ける、それで……良いんだよ。」

雄司はそう言いつと紅牙にサムズアップする。

「雄司君…………うん！！」

雄司の言葉に紅牙は納得すると雄司にサムズアップする。

「何故だ、所詮は人間とファンガイアに友情なんて無いはず！！」

キングは雄司と紅牙の友情を見てそれを否定する。

「違うな、お前は人間を餌としてしか見ていないんだ！！」

雄司達の所に翔夜が駆けつける。

「翔夜君！！」

翔夜に驚く紅牙。

「遅いん……だよ、後は……任せた……からな……」

雄司は翔夜に言い放つと意識を失う。

「後は任せろ、雄司」

翔夜は雄司に言い放つと、ビートルファンガイアを見る。

「どんなに人間を信じっていても、ファンガイアは自らの本能で人間

を殺す、何故それが解らないんだ！！」

ビートルファンガイアは少し悲しい声で翔夜達に言い放つ。

「それでも、紅牙はどんな事があつても信じている筈だ人間とファンガイアが手を取り合つていける事を。」

翔夜はそう言つと紅牙を見る。

「僕は絶対やつてみせます、何時か人間とファンガイアが手を取り合つていける世界を！！」

紅牙は決意を新たにビートルファンガイアを見る。

「貴様、一体何者なんだ！？」

ビートルファンガイアは怒りながら翔夜に尋ねる。

「通りすがりの仮面ライダーだ！」

翔夜は『ディケイドライバー』を腰に装着する。

「その心に刻んでおけ！！」

翔夜は『ディケイド・ストライク』のカードをビートルファンガイアに見せつける。

「キバット！！」

『よつしゃ、キバつて派手にいくぜ！ ガブリ！！』

紅牙はキバットを呼ぶ。

「「変身！！」」

〔KAMEN-RHDE……DECade Strike〕

翔夜はディケイドS、紅牙はキバKに変身する。

「おのれえええ、纏めて始末する！！」

ビートルファンガイアは大剣を構えディケイドS達に襲いかかる。

「ハツ！」

「ぐおつ！！」

イヤーウィッグと戦っていたRキバーラはキバーラサーベルでイヤーウィッグを切り裂く。

『決めるよ、なのはちゃん！』

「はい！」

Rキバーラは背中に光の翼を生やし、キバーラサーベルを構える。

『ソニックスタッフ、ハツ！』

『ぎゃあああ！』

Rキバーラの必殺技”ソニックスタッフ”が決まりイヤーウイッギ
は爆死する。

キャットスルドラン 屋上

「ハツ！！」

キバKはザンバットソードでビートルファンガイアに切りかかろう
とするが。

「フン！！」

ビートルファンガイアは大剣でキバKの攻撃を受け止めるとそのま
まキバKを圧していく。

「ATTACK・RIDE.....SLASH」

「はああっ！！」

「ぐおつ！！」

ディケイドUはディケイドスラッシュでビートルファンガイアを切
り裂く。

「はあああっ！！」

「ぐおおつ！！」

キバKはビートルファンガイアがディケイドSの攻撃で怯んだ隙にザンバットソードでビートルファンガイアを縦に切り裂く。

「ぐつ、じうなつたら…！」

ビートルファンガイアは立ち上がると空に向かつて飛び上がる。

「何をするつもりだ！？」

ディケイドSはビートルファンガイアを見て疑問に感じている。

「倒されたファンガイアのライフェナジーよ我に力を…！」

ビートルファンガイアはそう言つと無数のライフェナジーがビートルファンガイアに集まり、ビートルファンガイアはそれを紫色のエネルギー弾に纏める。

「こままじや…！」

「マズいな…！」

キバKとディケイドSはビートルファンガイアのエネルギー弾に焦つていると、ディケイドSのライドブッカーから一枚のカードが飛び出るとそれをディケイドSはキャッチし、一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「ちょっと、痛いぞ！」

「FINAL・FORM・RIDE……KI、KI、KIVA」

「えつ、真導君一体何を！？」

ディケイドSはキバKの背中に触れるとキバKは変形しキバアローに変わる。

「ハツ！…」

ビートルファンガイアは紫色のエネルギー弾をディケイドS達に放つ。

「FINAL -ATTACK -RIDE.....KI、KI、KIV
A」

「はああーー！」

『キバつて、いくぜーー！』

キバアローからディケイドファングが放たれ、紫色のエネルギー弾を弾くとそのままビートルファンガイアに貫く。

「これで……良い」

ビートルファンガイアはそう言つと爆発する。

「終わつたな。」

「はい！」

ディケイドSはビートルファンガイアを見ると変身を解き、キバアローもキバKの姿に戻りそのまま変身を解く。

「翔夜君ー！」

「紅牙……」

なのはと雄司が翔夜達の所に駆けつける。

「どうやら、外の方も終わつたみたいだな。」

翔夜は外を見て安心していると何かを見つける。

「紅牙、写真館に行こうぜ!」

「すずかちゃんやアリサちゃんが待つていてるから。」

「はい！」

雄司、なのは、紅牙は写真館に向かおうとする。

「翔夜、帰らないのか？」

翔夜を見た雄司が尋ねる。

「先に行け、俺はまだやることが有るみたいだ。」

翔夜はそう言つと王の間に置いていた写真を見る。

「解つた、早く来いよ……」

雄司は翔夜にサムズアップするとその場から去つていく。

「面白い事になつてゐるね、翔夜。」

キャッスルドランの近くにあるビルでは翔夜達に気づかれないように一人の少年が翔夜を見ていた。

「今度は僕も参戦するからね。」

少年は翔夜に指鉄砲を向けると、その場から立ち去つていった。

キャッスルドラン 王の間

「…………息子よ、後は頼んだぞ」

王の間ではキングがビートルファンガイアから人間の姿に戻り椅子に座っていた。

「なる程な、アンタは紅牙の意思を知りたかった訳だな。」

翔夜が王の間に現れる。

「君は…………何故解つたんだ?」

キングは翔夜に尋ねる。

翔夜は黙つてキングが持つていた小さい頃の紅牙とキング、そして紅牙の母親が仲良く写つた写真を取り出す。

「こんな写真を持っている親が息子を本気で殺すつもりだとは思わなかつたからな。」

翔夜はそう言いつと『写真をキングに渡す。

「ある時、私はファンガイアの本能を抑えきれなくなり、人間である妻を殺してしまつた。」

キングは翔夜に真実を語り始める。

「その時、私は人間とファンガイアが共存できない事に絶望し、息子である紅牙にそれを話そうとしたが」

「紅牙はそれを拒み、アンタは部下のファンガイアと一緒に出て行つた訳か？」

翔夜はキングに尋ねる。

「そのとおりだよ、私はショックカー帝国と手を結び、紅牙に夢を諦めさせようとした、だがあの子の意思はあの頃の私とは違つみたいだな。」

「ああ、アイツには俺達、仲間が居るからな。」

翔夜はそう言いつとキングを見る。

「もし紅牙のファンガイアとしての本能が抑えきれなくなつたら伝えてくれ、お前はけして一人じゃない、支えてくれる仲間が居ると

.....」

キングはそう言いつと静かに息を引き取る。

「ああ、必ず伝えよ。」

翔夜はいつも机と机の間から出て行った。

真導写真館

真導写真館から美しいバイオリンの音色が聞こえていた。

「凄いですね。」

「まさに、10年に1年の天才だね。」

真導写真館にはバイオリンを弾く紅牙と、それを見るナッシー、栄市郎、翔夜、なのは、雄司、アリサ、すずかが居た。

演奏が終わると紅牙はお辞儀をする。

「皆さん、今日は本当にありがとうございました。」

「良かつたぜ、紅牙！…！」

「良い演奏だったよ。」

紅牙に拍手をする雄司とアリサ。

「…」で、私事ですが一つ宣いでしょうか？

紅牙はやつらにすずかを見る。

「私、何なの紅牙君？」

すずかは紅牙に尋ねる。

「すずかちゃん、僕は初めて君に出逢つてからずっと好きでした……僕と付き合つてください／＼／＼／＼」

紅牙は顔を真つ赤にしながらすずかに告白をする。

「えつ、ど、ど、どうこう事！？」

すずかは紅牙の告白に焦つていた。

「もしかして、コレつて…？」

「両想い！？」

紅牙の告白に驚くアリサと雄司。

「ダ、ダ、ダ、ダメですか？／＼／＼

紅牙は顔を真つ赤にしながら紅牙に告白の返事を聞く。

「ハイ、喜んで／＼／＼／＼／＼

すずかも顔を真つ赤にしながら紅牙に告白の返事をする。

「やつたー！..」

「おめでとう、すずか、紅牙君！..」

「おめでとう！」
『ざ』こます。

「めでたいね。」

一人を祝福する雄司、アリサ、ナツミ、栄市郎。

『良かつたな紅牙、俺は涙でいっぱいだよ！』

『良かつたね、二人共。』

キバットは泣きながらキバーらと共に一人を祝福する。

「これで、めでたしか。」

写真にはバイオリンを弾く紅牙とキバトその後ろにはそれを見守る父親であるキングが写った写真を見ながら翔夜は一人を祝福していた。

「あの二人、嬉しそうね。」

なのはは翔夜の隣に座ると顔を近づける。

「ああ、そうだな／＼／＼／＼（何で俺はなのはにドキドキするんだ
？）」

翔夜はなのはを見て顔を赤くしていた。

第31話 フィナーレ・Hな友情とキングの真実（後書き）

次回は特別編！！

翔夜「一体何をするつもりなんだ、作者？」

お楽しみに

翔夜「オイー！」

感想と質問を待っています。

特別編 繼承者と魔法少女の日常（前書き）

今回はギャグ短編集です。

何時もと書き方が違っています、後キャラ崩壊がかなりあります。

特別編 繼承者と魔法少女の日常

・テスト（雄司の場合）

数学のテストの時間

雄司（テストが解らねー！） 数学の公式を考へ中
アリサ（馬鹿ね、ちゃんと勉強をしないからよー！） 順調に答えを埋めていく

雄司（こうなつたら、変身！） クウガに変身する
アリサ（馬鹿、何やつているのー？）

クウガM（先生も居ないし、他のみんなはテストに集中しているから大丈夫さ。） 拳銃の玩具を取り出す

アリサ（ちょっと、何をやつているのー！） クウガM（超変身！！）
ペガサスフォームにフォームチェンジする
クウガP（ペガサスフォームの研ぎ澄ませれた山勘でテストをやるのさー） 問題を解いていく

テストの結果

雄司「50秒しか持たなかつた、〇ー」 赤点
アリサ「やつぱり馬鹿だ。」 平均点より上

・テスト（健太郎＆イマジンズ）

国語のテストの時間

健太郎「うーん、こうかな？」

問題を解いていく

モモタロス『健太郎、何やつているんだ？』

健太郎の意識に語り

かける

健太郎（モモタロス、国語のテストだよ。）モモタロス『面白そうだな、俺もやるぜ！！』 健太郎に憑依する

健太郎（ちょっと、モモタロス！？） モモタロスに憑依される

M健太郎「いくぜ、いくぜ！」 健太郎のテストをやろうとする

ウラタロス『先輩には無理だね。』 モモタロスを挑発する

M健太郎「何だと、このテストで勝負するぞ亀公！！」

ウラタロス『負けるのは先輩だけだね。』 キンタロス『なんや、面白そうやないか。』 乱入

リュウタロス『僕もやるけど良いよね、答は聞いてない。』 上に

同じく

健太郎（ちょっと、みんな！？）

テストの結果

健太郎「良かつた」 赤点ギリギリ

コハナ「全くアンタ達は」 メリケンサックを装備

イマジンズ「「「スイマセン」」」 コハナに殴られる

・音楽室の怪談

アリサ「すずか、聞いた？」

すずか「何を？」

アリサ「最近、夜の音楽室に変な声が聞こえるのよ。」

すずか（それって）

すずかの回想

紅牙「キバット、お前は！！」 ザンバットソードを装備
キバット「『めんなさい、紅牙！』 鎖で縛られる

回想終了

すずか（言わぬ方が良いね。）

アリサ「ん？」

・図書室の怪談

はやて「健太郎君、聞いた？」

健太郎「何を？」

はやて「最近、図書室の本が次の日に何冊か消えるんやけど。」

健太郎「ああ、実はね。」

健太郎の説明

コハナ「全くアンタ達は！！」 日本刀を装備

イメージinz「スイマセン」「切り傷だらけ

モモタロスがSFをウラタロスが恋愛関係、キンタロスが時代劇
関係、リュウタロスが子供向けの本を健太郎の体を使って盗んでいた。

説明終了

健太郎「と言つ訳なんだ。」

はやて（健太郎君つて、つぐづく不幸やな。）

- ・グリードの食事当番事情

メズールの場合

メズール「みんな、召し上がり。」 美味しそうな料理を出す。
ガメル「メズールの料理、美味しい。」

カザリの場合

カザリ「出来たよ。」 冷たい物ばっかり出す
和樹「猫科のグリードだしね。」

ガメルの場合

ガメル「みんな、出来た。」 餅やチョコレート等のお菓子を出す
フェイト「しようがないよ、コレは。」

ウヴァの場合

ウヴァ「食べる。」 蜂蜜を出す
アンク「お前が一番酷いぞ！…」

- ・恋心（翔夜の場合）

翔夜「何で最近、なのはを見ると胸がドキドキするんだ。」
雄司（翔夜の奴、なのはちゃんの事で悩んでいるのか？）遠くから見ていた

翔夜「どうなつて、いるんだ俺！？」

雄司（鈍感だな、翔夜も。）

翔夜「…………」考へ込む

雄司（見ていて面白いな。）

数十分後

翔夜「医者に相談するか？」病院に行こうとする
雄司「鈍感すぎるだろ！？」

・恋心（和樹の場合）

アンク「オイ、和樹」

和樹「どうしたんだ、アンク？」

アンク「お前、フェイトの事が好きだろ？？」

和樹「な、な、何を、や、や、藪からぼ、棒に！？」

アンク「滅茶苦茶、動搖している時点でバレバレだろ。」実は

和樹の欲望を見ていて気づいた

和樹「そりゃあ、初めて会った時から好きだったけど／＼／＼／＼／＼

顔をかなり真っ赤にする

アンク「なら、告るんだな。」アイスを食べ始める

フェイト「和樹君、アンク、何やつているの？」通りすがり
和樹「フェ、フェイトさん、実はその！？」

アンク（せいぜい、頑張れよ。）アイス2本目を食べていた

和樹「実は前から…………」

フェイド「前からどうしたの？」

和樹「アンクがアイス食べ過ぎだと思つていたんです。」

フェイド「確かにそうだね。」

アンク「オイ、何言つているんだ、和樹！！」 3本目のアイスを
食べていた

フェイド「アンクは暫くの間、アイス禁止！」 アンクのアイスを
取り上げる

アンク「和樹……」

和樹（「メン、アンク！！」） フェイドの後ろで謝つていた

・ライジング会得秘話

雄司「そう言え、ユウスケさんはどうやってライジングフォーム
を会得したんですか？」

ユウスケ「五代さんに教えつて貰つたんだ。」

雄司「俺も会得出来ますか？」

ユウスケ「止めといた方が良いよ。」

ユウスケ回想

ユウスケ「ぎやああああああああ！！！」 発電所でビリビリ状態

五代「小野寺君、頑張つて耐えれば金のクウガになりますよー。」

サムズアップ

ユウスケ「普通に無理でしょーーー！」 それでも耐えていく

回想終了

ユウスケ「ぐらいな事をやるから。」

雄司「ウソダンドコドーン！」

・キャッスルドランの部屋事情

すずか「原作のキバではガルル・バッシャー・ドッカの三人がキャッスルドランに居るけど。」

雄司「こっちのキャッスルドランには居ないみたいが、どうやってフォームチェンジするんだ？」

キバット『俺様が答えよ、専用の部屋に普段ガルル達は彫刻の姿で待機しているのだ。』

すずか「そうなんだ。」

雄司「キャッスルドランって結構広いけど、他にはどんな部屋があるんだ？」 キャッスルドランで迷った人

紅牙「他には僕とキバットが良く居る王の間とか自分の部屋、書斎とかトレーニングルームもあるよ。」

キバット『そして、キャッスルドランを維持するためにライフエナジーの貯蔵庫や愛しの我が妹、キバラの部屋もあるんだぜ。』

すずか「キバット君の部屋は？」

キバット「無いんだ……」 泪ボロボロ

紅牙「あつたんだけど、キバラに盗られたんだよ。」

すずか・雄司「「ドンマイ」」

・笑いのツボ

なのは「ハツ！」 親指を構える

ナツミ「違いますなのはさん、こうです。」 上に向じく

へじ回じく

翔夜「何やつているんだ？」 通りすがり

雄司「なのはちゃん、笑いのツボを会得するみたい。」 上に向じく

翔夜「マジかよ！？」 驚愕の表情

数日後、なのはは笑いのツボをマスターした。

特別編 繼承者と魔法少女の日常（後書き）

次回、仮面ライダーamp;リリカルなのは

恭也

「尋常に勝負……」

士郎

「娘は渡さん……」

なのは

「翔夜君、頑張って。」

翔夜

「何で」「うなるんだー！？」

次回、翔夜の初デード「前編」

次回は前後編です。

感想や質問を待っています。

第32話 翔夜の初デート【前編】（前書き）

今回は前後編の前編

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第32話 翔夜の初アート【前編】

キヤツスルドランでの戦いから一週間後

海鳴市 とある道場

「何で、 いうなるんだ？」

とある道場では胴着に袴姿で竹刀を持った翔夜と
翔夜と同じ格好に竹刀を構えた恭也が居た。

「何処からでも、 来い！！」

「翔夜君、 頑張つて。」「
恭也、 頑張れよ！」「
あなた、 そろそろ諦めたら。」「
良いじやないのお母さん、 面白そうだし。」

なのは、 士郎、 桃子、 美由希のメンバーは翔夜と恭也の試合を見て
いた。

何故こうなったかは昨日の夜にさかのぼる……

「水族館のチケット?」

「商店街の福引きで当てたんだけど、明日は友達と勉強会があるの。

」

ナツミは翔夜に水族館のチケットを渡そうとしていた。

「なのはさんと行つてきてくれ!」

「何で、なのはなんだよ!?」

翔夜は渋々ナツミから水族館のチケットを受け取り、翌日、翔夜はなのはが居る翠屋に向かった。

翠屋

「と言ふ訳なんだ。」

「良いけど（これつてもしかして翔夜君とデート。）—————

なのはは翔夜から水族館のチケットを受け取ろうとするが。

「ちょっと、待つた!..」

「娘は渡さん!..」

突然、翔夜達の前に恭也と士郎が現れる。

「誰だ！？」

「私のお兄ちやんとお父さん。」

驚く翔夜には一人の自己紹介をする。

「俺達は一人の交際を認めん！」

「認めて欲しければ、恭也と剣道の試合で勝つて貰おうか！」

恭也と士郎は翔夜に言い放つ。

「ま、付き合つても無いけど。」

「お兄ちやん、お父さんも／＼／＼／＼／＼

恭也と士郎の言葉に翔夜はシッコリ、なのはは顔を真っ赤にしていた。

「尋常に勝負……」

「何でいつもなるんだー？」

そして、冒頭に至る。

「どうした、何故かかつて来ないんだー？」

（正直言つて、どうしたら良いんだ？）

恭也は竹刀を構えない翔夜にイライラしながら尋ねる。

翔夜はこの状況に解らないでいた。

「そつちが来ないなら、行くぞーー！」

恭也はそつうと素早く翔夜の間合いに入り竹刀で翔夜を叩こうとする。

「おつとーー！」

恭也の攻撃に気づいた翔夜は瞬時に恭也の攻撃を竹刀で受け止めるが。

「はああつーーー！」

「くつーーー！」

恭也の猛攻に翔夜は押されていた。

「ハツーーー！」

「ぐつーーー！」

恭也の竹刀は翔夜の右肩に当たり翔夜は右肩を抑えながら恭也から離れる。

「どうした、そんな腕じゃなのはは渡さんぞーーー！」

恭也は竹刀を構え翔夜に迫る。

「翔夜君ーー！」

なのはは翔夜を見て叫ぶ。

(「Jのまま負けるのも嫌だな。」)

翔夜はなのはを見て竹刀を構える。

「やる気になつたか?」

恭也は翔夜に尋ねる。

「本氣で行くぜ! !

翔夜は素早く恭也の間合いに入り竹刀で叩こうとする。

「くつーーー！」

恭也は翔夜の攻撃を竹刀で受け止める。

「はあああつーーー！」

恭也は再び翔夜に猛攻を食らわせようとするが、翔夜は恭也の攻撃を受け流し。

「はあつーーー！」

「ぐはつーーー！」

翔夜の竹刀から放たれた強烈な一撃が恭也の胸に入り恭也はそのまま倒れ込む。

「恭也が負けた！？」

恭也が倒れたのを見て驚く士郎。

「翔夜君！」

「なのは／＼／＼／＼／＼」

翔夜に抱きつくなのは、翔夜は顔を真っ赤にしていた。

「あらり」

「仲が良いことで。」

桃子と美由希はなのは達を見て微笑んでいた。

「水族館に行くか？」

「うん、ちょっと待ててね。」

なのはは準備をするために自宅に戻った。

「まさか、この俺が負けるなんて。」

「なかなかの強さだつたな。」

胸を抑えていた恭也と士郎は翔夜に言い放つ。

(一応、仮面ライダーだからな。)

翔夜は一人に聞こえないように呟く。

「……、どうして翔夜君はなのはの事が好きなの？」

美由希は翔夜に尋ねる。

「正直言つて、俺はなのはが好きかどうか解らないんだ。」

「何…?」「

翔夜の言葉に土郎と恭也は翔夜を睨む。

「どうこう事なの?」

桃子は翔夜に尋ねる。

「ただ、……なのはと会つて、内に胸がドキドキになることが増えたんだ。」

翔夜は少し照れながら自分の気持ちを桃子達に話す。

（（（それって、好きって事じゃないの／か！？）））

翔夜の言葉に心の中でツッコむ桃子達。

「とりあえず、この後なのはと一緒に水族館に行くなら帰りに気持

ちを伝えたら。」

美由希は翔夜にアドバイスをする。

「解った。」

翔夜はそう言つと美由希達に一礼して道場を後にする。

「どうなるかな、なのほど翔夜君？」

「上手くいくと思つよ。」

「私はあの一人の交際を認めたからな。」

「それでも、あの少年の強さは一体？」

桃子、美由希、士郎、恭也は翔夜となのはの事を話していた。

To be continued.

第32話 翔夜の初アート【前編】（後書き）

次回、『翔夜の初アート（後編）』

感想と質問を待っています。

第33話 翔夜の初デート「後編」（前書き）

今回は前後編の後編

それでは仮面ライダー & リリカルなのは、始まります。

第33話 翔夜の初デート【後編】

海鳴市
翠屋

俺の気持ちが

翔夜は自分の気持ちを考えながらなのは待っていた。

「お待たせ、翔夜君！」

翠屋から白いワンピースを着たなのはが出て来る。

翔夜はなのはを見て顔を赤くしながらなのはと共に水族館に向かつた。

海鳴市 とある廃ビル

翔夜達が水族館に向かっていた頃、とある廃ビルでは少年と鳴滝が接触していた。

「君が暁零か？」

「流石、鳴滝さん僕の事を知っているんだ。」

少年（零）はそう言いつと鳴滝に微笑む。

「我々ショッカー帝国は君の噂は聞いているんでね。」

鳴滝はそう言い放つと零を睨みつける。

「それで僕に何の用かな？」

零は鳴滝に尋ねる。

「君に『ディケイド』の継承者、真導 翔夜を倒して貰いたい。」

鳴滝は翔夜を倒すよう零に頼む。

「ふーん、僕が翔夜を倒すのかな？」

「君の力なら必ず倒せる筈。」

鳴滝の言葉に零は少し考え込む。

「面白そうだけど、ヤダね。」

「何だと！？」

零の答えに驚く鳴滝。

「僕も翔夜達の持つライダーのお宝に興味があるけど、倒すだけじゃつまらないしね。」

零はそつまつと鳴滝の前から立ち去る。』

「やうか、なら次は君も敵として見なすからな暁 零……。」

鳴滝は怒りの形相で零に言い放つ。

「僕を甘く見ないで欲しいね、鳴滝さん。」

零は鳴滝に指鉄砲を向けると鳴滝の前から姿を消した。

「だが、上手くこくと思つなよ暁……！」

鳴滝はそつと灰色のオーロラを出現させ、オーロラの中に消えていく。

水族館

翔夜達は海鳴市の隣町にある水族館に来ていた。

「翔夜君、あそこにペンギンの集団が歩いているよ。」

「ああ（なのは）はって近くで見ると、やっぱり可愛いな（／＼／＼）」

ペンギンの散歩を見ていたのは、翔夜はそんなのは見て照れ顔でいた。

「翔夜君、どうしたの？」

なのはは翔夜を見て尋ねる。

「何でも無い、あつちにイルカの水槽があるから行こうか。」「うん」

翔夜となのははイルカの水槽に向かつた。

「あのイルカ、翔夜君に似てない?」

「そうか、それよりあのイルカ、なのはに似ていなか?」

二人はイルカの水槽を前に自分達に似たイルカを見ていると。

「あつ／＼／＼」
「キスしたね／＼／＼」

二人に似たイルカはキスをすると、それを見た翔夜となのはは顔を赤くしながら他の水槽を見て回った。

「楽しかったね、翔夜君。」

「そうだな、なのは。」

なのはと翔夜は水族館の近くにある海岸で休んでいた。

「夕日が綺麗だね。」

「ああ、そうだな。」

一人は夕日を見ていると翔夜は何かを決意してなのはの手を握る。

「どうしたの翔夜君！？／＼／＼／＼」

なのはは翔夜の行動に顔を真っ赤にして驚いていた。

「なのは、…………俺は君の事が好きなんだー。」

「ふええつー？／＼／＼／＼／＼」

翔夜の告白になのはは更に顔を真っ赤にする。

「翔夜君、一体？／＼／＼／＼／＼」

なのはは翔夜に尋ねる。

「俺はなのはに何度も会っているうちに胸がドキドキする事が何度もあつたんだ、そして今日気づいたんだ、俺はなのはが好きだつて事にー！／＼／＼／＼／＼」

翔夜はなのはに自らの思いを伝える。

「だから、こんな俺だが付き合ってくれないかー！？／＼／＼／＼／＼」

「ふええつー？／＼／＼／＼／＼」

翔夜の告白になのはは顔を真っ赤にしていた。

「…………翔夜君、良いよ。」

なのはは翔夜の告白の返事をする。

「なにがそんなに、ぬるでいい」

何処からかキバーラが現れる。

「さ、キバーラ！？」

「何時から居たんだ？」

キバー ラに驚くなのはと翔夜。

「二人が水族館に向かっている時から付いてきたのよ」と

キバーは翔夜達にそう言うとなのはの肩に止まる。

「は？」

卷之三

翔夜はなのはを振り向かせるとなのはと唇を重ねる。

「あひるー

キバー ラは一人を見て微笑んでいた。

なのはは顔を真っ赤にしながら翔夜に言ひ。

「すまん、なのはが可愛かつたから／＼／＼／＼」

翔夜は顔を真っ赤にしながらなのはに言ひ。

「もう、翔夜君たら／＼／＼／＼」

「後、翔夜で良いよ。」

二人は夕日を背に見つめ合っていた。

To be continued.

第33話 翔夜の初デート【後編】（後書き）

次回、仮面ライダーamp;リリカルなのは

クウガM

「小さい子と戦つても、嬉しく無いんだけど。」

ヴィータ

「誰が小さい子だ！－！」

シグナム

「その程度か、千樹！－！」

オーズ

「アンク、ガメルのコンボだ！－！」

アンク

「コンボするメダルは無いぞ！－！」

次回、『模擬戦』

感想と質問を待っています。

第3・4話 模擬戦（前書き）

これまでの仮面ライダー & リリカルなのは

一つ、雄司と共にガミオを倒した翔夜はクウガの力を持つ小野寺とかつてはクウガだった五代に出会い、一人からデイケイドは本当の力の事を聞く。

二つ、ファンガイアのキング、ビートルファンガイアを倒した翔夜と紅牙、そんな中謎の少年、暁 零は翔夜達の持つライダーのお宝を狙う。

三つ、翔夜はなのはに告白し晴れて付き合う事になった。

それでは始まります。

第34話 模擬戦

翔夜がなのはと『テート』していた頃、

海鳴市 八神家

「始めようか、千樹！」

「汎島、手加減しないからな！！」

八神家の庭では甲冑を纏いそれぞれの『デバイス』を構えたシグナムとヴィータ。

「ハイ、シグナムさん！！」

「小さい子と戦つても、嬉しく無いんだけど。」

オーズとクウガMはシグナムとヴィータを見て言い放っていた。

「誰が小さい子だ！……」

ヴィータはクウガMの言葉に怒る。

「シグナムと和樹君、気合い十分やな。」

「雄司とヴィータちゃんは、大丈夫かな？」

はやてと健太郎はお茶を飲みながら一組の戦い見ていた。

「健太郎君は参加しないの？」

洋菓子を持ってきたシャマルは健太郎に尋ねる。

「僕はモモタロス達が居ないと変身出来ないから、今日は見学です。」

健太郎はそう言つてシャマルが持つてきた洋菓子を食べる。

「わう言えば、モモタロス達はどうしたん?」

はやては健太郎に尋ねる。

「モモタロス達なら、デングライナーの大掃除をしているよ。」

健太郎はそう言つて持つていたお茶飲む。

「オイ、早くアイスを寄越せ!...」

「アンクさん、アイスを食べ過ぎですよ!...」

アイスを食べようとするアンクにリインは注意する。

「行きます!...」

「参る!...」

オーズのメダジャリバーとシグナムのレヴァンティンがぶつかる。

「そろそろ、じつー「食らえ!...」……ぐはつ!...」

クウガMはオーズとシグナムの戦いを見てすぐにヴィータを見ると、

ヴィータはグラーフアイゼンでクウガMの頭を叩く。

「ハンマー・フォルム！」

ヴィータはグラーフアイゼンをハンマー・フォルムにしてクウガMの腹を叩く。

「お前は私の事を小さい子呼ばわりしゃがって……」

ヴィータは何度もクウガMの体をグラーフアイゼンで叩きクウガMを圧していく。

「ギガント・フォルム！」

ヴィータはクウガMから少し離れるとグラーフアイゼンをギガント・フォルムにする。

「許せねんだよ……」

「ぐはあああつ……！」

ヴィータの怒りの一撃がクウガMに決まり、クウガMはそのまま倒れる。

「結界を張つておいて良かつたですね。」

「そうやな、シャマル。」

「大丈夫かな、雄司？」

シャマル、はやて、健太郎はそう言つと、ヴィータとクウガMの戦いからシグナムとオーズの戦いを見る。

「はっ！」

「ぐつ！」

最初は互角に戦っていたシグナムとオーズ、しかし徐々にシグナムが圧していった。

「その程度か、千樹！！」

「流石シグナムさんですね、でも僕は負けません！！」

オーズはそう言いつとメダジャリバーを構えシグナムに突っ込むが。

「甘い！！」

シグナムはレヴァンティンの刃でオーズの攻撃を捌くと。

「シュランゲフォルム！」

シグナムのレヴァンティンはいくつもの節に分かれた蛇腹剣の形態に変わる。

「連結刃、はあっ！！」

「ぐああ！！」

シグナムの攻撃はオーズにかなりのダメージを与える、オーズは膝をつく。

(くつ、じうなつたら)

オーズは何かを決意するとアンクを見る。

「アンク、ガメルのコンボだ！！」

オーズはアンクにメダルを渡すように頼むがアンクは。

「コンボするメダルは無いぞ！！」

アンクはそう言つとメダルホルダーを取り出す。

「何で、メダルが無いんだよ！？」

「お前が勝手にコンボをやるからな、メズール達と相談してメダルを入れ替えたんだ！！」

オーズの質問にアンクは答えるとメダルホルダーから一枚のメダルを取り出す。

「とにかく、今はこれで行け！！」

アンクは一枚のメダルをオーズに投げる。

「ウヴァのメダルとこのメダルは？」

オーズはアンクから受け取ったコアメダルを見ると、コアメダルはカマキリとコンドルのコアメダルだった。

「そのメダルはかなり大事なメダルだから無くすなよ！！」

アンクはそう言つとメダルホルダーをしまい、持っていたアイスを

食べ始める。

「解ったよ、アンク！！」

オーズはそう言つと「アンクから受け取ったコアメダルをオーズドライバーに装丁する。

「タカ・カマキリ・コンドル」

オーズはタトバコンボからタカキリドルコンボに変わる。

「姿が変わったか、だが、同じ事だ！！」

シグナムは連結刃でオーズを狙うが。

「はっ……」

オーズはカマキリソードとコンドルレッグを使いシグナムの攻撃を捌いていく。

「なかなかやるな！」

シグナムはそう言つとレヴァンティンを構える。

「これで決める！」

「スキヤーニングチャージ」

オーズはスキヤーニングチャージをするとカマキリソードとコンドルレッグにエネルギーが溜まっていく。

「紫電一閃！！」

「せいやああ！！！」

シグナムの紫電一閃とオーズのカマキリソードとハンドルレッグから赤と緑で出来たエネルギー刃がぶつかり合いつ。

「くつ！！」

「ぐああつ！！」

二人の必殺技は爆発してしまいシグナムは甲冑姿がオーズは変身が解けてそのまま倒れる。

「シグナム！？」

「和樹君！？」

はやてと健太郎はすぐに二人の所に駆け寄るが。

「大丈夫。」

「心配は要りません、主はやて。」

和樹とシグナムは立ち上がり無事な姿を一人に見せる。

「「良かつた（わ）。」」

健太郎とはやはては一人を見て安心する。

「みんな、お待たせ。」

シグナムとヴィータと和樹と雄司は一休みしていると、庭にフロイトがやって来る。

「フヒイトさんー?」

和樹はフェイトを見て驚く。

一大変なの、なのはと翔夜君が今テートをしているの！！」

フロイドはやで達に翔夜とのはかで、NELLを語ると

みんな二人のテートを見に行くで！！

はやての提案にアンク以外は一人のデートを見に行つた。

「お、アーティストさん」

アンクはそう言いながら本日5本目のアイスを食べていた。

現在、オーズが使えるメダルは
タ力
コンドル
トラ
チーター
カマキリ

バツ
ゴリラ
シャチ
ウナギ

第3・4話 模擬戦（後書き）

感想と質問を待っています。

番外編 クリスマスとパーティーと準備（前書き）

あらすじ

クリスマスを目前に迫った翔夜達、そんな時になのはがやつてきた。

番外編 クリスマスとパーティーと準備

海鳴市 真導写真館

「「孤児院でクリスマスパーティーをやるー?」」

「そりなの

真導写真館ではこたつに入っていた翔夜と雄司がなのはから孤児院でクリスマスパーティーをやる事を聞いていた。

「何で孤児院でクリスマスパーティー何だ?」

翔夜はなのはに尋ねる。

「和樹君が住んでいた孤児院で毎年クリスマスパーティーをやるんだけど、孤児院の先生達だけじゃ大変だから。」

なのはは翔夜と雄司に事情を説明する。

「俺達に手伝つて欲しい訳か?」

「うん、二人共手伝つてくれる?」

なのはの上目遣いしながらの頼みに翔夜は……

「良いぜ／＼／＼／＼ 雄司手伝つよなー?」

速攻で手伝う事を決めた翔夜は雄司に手伝つよつと叫びながら言つが。

「何で、俺が手伝つんだよ…………いいえ、手伝えます、手伝えます

から、ディケイドライバーをしまつてくれよーー！」

雄司は断ろうとするが、怒りのオーラを纏った翔夜がディケイドライバーを腰に着け、カードを装填するのを見た雄司は手伝いをする事を決める。

「ありがとう、翔夜、雄司君！」

なのはは翔夜と雄司にお礼を言つ。

海鳴市 キヤツスルドラン 王の間

その頃、キヤツスルドランでは紅牙がすずかとアリサから翔夜達同様に孤児院でクリスマスパーティーをやる事を聞いていた。

「ところで、クリスマスパーティーで何かやる？」

紅牙はすずかに尋ねる。

「黒月君にバイオリンを弾いて欲しいんだけど？」「駄目かな？」

アリサとすずかは紅牙に頼むと。

「良いよ、僕で良ければ。」

紅牙は一人の頼みを軽く承諾する。

海鳴市 カフュ・ミックスホープ

その頃、健太郎と健太郎の姉（沢田 愛里）と一緒に住んでいるカフュ・ミックスホープでは健太郎とはやてがクリスマスパーティーの話をしていた。

「健太郎、クリスマスパーティーの日にモモタロス達はどうするん？」

はやはては健太郎に尋ねる。

「モモタロス達もグリードと一緒に手伝ってくれるみたい。」

健太郎はモモタロス達がアンク達グリードと一緒にクリスマスパーティーを手伝ってくれるのをはやはてに伝える。

「大丈夫なん、アンク達は人間の姿でやるから良いけど、モモタロス達とかは人間になれないやん。」

はやはては心配をするが。

「大丈夫、モモタロス達は着ぐるみを着て、ハナさんが見張るから。」

「それなら大丈夫やな。」

健太郎の言葉にはやはては安心する。

海鳴市 ライダー隊 作戦司令室

「それで、君達はこの俺の状況を見て、そのクリスマスパーティーの手伝いをしろと言つんだな。」

「前園さん！－！」

「お願いします！－！」

ライダー隊の作戦司令室ではデスクで書類を書いていた前園に和樹とフュイトがクリスマスパーティーの手伝いを頼んでいた。

「！」の状況を見て無理に決まっているだらつ－－－－－－－－！

前園はそう叫ぶと前園のデスクの後ろには大量の書類が溜まっていた。

「前園さん、この書類って？」

翔夜は前園に尋ねる。

「隊長達が出張の間、俺が隊長達の書類をやるんだが、あの人達の書類が多いせいで、いつの間にかこんなに溜まっているんだああああ－－－－－！」

前園の絶叫が作戦司令室に響く。

「やつ言えば、隊長達は今、どの世界に居るんですか？」

フェイトは前園に尋ねる。

「今は龍騎の世界に居るらしい。」

前園はそう答えると書類を書いていると。

「メリークリスマス！－ 繼承者と魔法少女達！－！」

突然、前園のデスクのディスプレイに鴻上が写る。

「鴻上さん！－！」

鴻上に驚く和樹。

「話は聞かせて貰つたよ、前園君、彼等に協力したまえ！」
「しかし会長、自分もライダー隊の職務がありM「 スポンサー命
令だよ、前園君。」…………解りました。」

前園は手伝わないと言つが、鴻上の権限で手伝つ事になった。

(前園さん)

(何か、僕達のせいでゴメンナサイ。)

前園に同情するフェイトと和樹。

「それから、クリスマスパーティーに必要なケーキは私が用意しよ
う！－！」

鴻上はクリスマスケーキを和樹達が居る世界に送ると囁く。

「 鴻上さん、 ありがとうございますー 」

フェйтと和樹は鴻上にお礼を言ひ。

ショッカー帝国 秘密基地

「 ムースファンガイア、 ムースオルフェノク、 クリスマスの日に継承者達を抹殺するんだ。 」

とある世界ではショッカー帝国の秘密基地で鳴滝がムースオルフェノクとムースファンガイアに継承者達の抹殺を命じていた。

「 ついでにコイツ等を連れていけ。 」

鳴滝はそう言つと、 鳴滝の後ろから仮面ライダー1号や2号に似た怪人が三体現れる。

クリスマスパーティーとコスプレと大バトルに続く……

番外編 クリスマスパーティーとコスプレと大バトル

今日は12月24日、クリスマス・イヴ

海鳴市 夢乃孤児院

「「「メリー、クリスマス！」」

「「「メリー、クリスマス！..！」」

海鳴市にある夢乃孤児院ではなのは、はやて、フェイトの三人がサンタのコスプレをして孤児院の子供達と乾杯の挨拶をする。

「メリー、クリスマス！」

「「「メリー、クリスマス！..！」」

「何で俺だけトナカイのコスプレ何だ！？」

なのは達同様にサンタのコスプレをした翔夜とサンタの帽子を被つた和樹、健太郎、紅牙の三人、一人だけトナカイのコスプレをした雄司は叫んでいた。

「アンタはまだ良いでしょう。」

「前園さん何か、クリスマス用のコスプレが無いから、何時ものライダー隊の隊服なんだよ。」

「ハイ」

紅牙達同様にサンタの帽子を被つたアリサとすずかの言葉で雄司は黙つた。

(正直、コスプレの方が辛いと思うが。)

子供達にジュースを渡していた前園はコスプレをしないで良かつた
と思っていた。

「何で着ぐるみ何だよ！！」

「先輩の姿が怖いからね。」

「ほら、チキンやで。」

「食べて、食べて！」

虎の着ぐるみを着たモモタロス、犬の着ぐるみを着たウラタロス、
熊の着ぐるみを着たキンタロス、猫の着ぐるみを着たリュウタロス
はデソライナーのオーナーが用意したローストチキンを子供達に渡
していた。

「あんた達、サボたらお仕置きだからね！！」

サンタの帽子を被ったハナはイマジンズを監視していた。

「どんどん食べてね。」

「ケーキ、あげる。」

(何でこんな事になるんだ？)

(ウヴァ、メズールに聞こえるよ！)

人間態の姿で鴻上が用意したケーキを子供達に配るメズール、ガメル、メズールの命令で手伝っていたウヴァとカザリは子供達に渋々
ケーキを配っていた。

「ぐだらんな。」

アンクはアイスを食べながら子供達を見ている。

「見つけたぞ、継承者達！！」

孤児院のグランドに灰色のオーロラが現れるとムースファンガイアとムースオルフェノク、数十体のショッカー戦闘員に

「あれは？」

「仮面ライダー！？」

仮面ライダー1号に似た怪人、ショッカー戦闘員が三体出現する。

「違う、我々はショッカー戦闘員！」

「1号や2号より強いライダーだ！」

ショッカー戦闘員は翔夜達に名乗る。

「つまり、1号や2号の偽物つて訳か。」

「クリスマスを滅茶苦茶にしやがって！？」

翔夜、雄司、継承者達はグランドに出ようとすると、

「ちょっと翔夜！？」

「子供達が見てるよー。」

なのはとフロイトは継承者達を止めるが。

「大丈夫です、フロイトさん！」

「それより、子供達をお願いします。」

「モモタロス、いくよー。」

和樹、紅牙、健太郎はそう言つとグランドに出る。

「なのは、俺達がグランドに出たひ……」

「解つた、任せて！」

翔夜はなのはにある提案を話す。

「出てこい、継承者……。」

「さもないと、皆殺しだ……。」

ムースオルフェノクとムースファンガイアは叫んでいると。

「逃げるつもりは無いぜ！…！」

「むしろ、相手になつてやる！…！」

ムースファンガイア達の前に左から雄司、紅牙、翔夜、和樹、M健太郎の順番で現れる。

「お兄ちゃん達、大丈夫かな？」

「あの怪人達、怖いし強そうだよー。」

院内に避難した子供達は窓から翔夜達を見ている。

「ちょっと『メンね。』

「すぐに終わるからね。」

突然アリサやすずかが窓のカーテンを閉める。

「みんな、これからお兄さん達が正義の味方を呼ぶよー。」

「みんなも正義の味方の名前を呼ぼうか?」

「みんなで仮面ライダーって叫んでね。」

フロイト、はやて、なのはの順番で喋ると子供達は

「」「仮面ライダー!...」「

子供達が仮面ライダーの名前を叫ぶ。

「みんな、いくぞ!...」

「キバット!...」

『よつしや、やド派手にキバッていぐぜ!...』

翔夜の合図と同時に継承者達はそれぞれの変身アイテムを取り出す。

「」「」「変身!...」「」「

『ガブリ!...』

「タ力・トラ・バッタ、タ・ト・バ、タ・ト・バ、タトバー！」

「KAMEN-RIDE..... DECADE STRIKE」

すずかとアリサが窓を開とグランドには、左からクウガM、キバK、
ディケイドS、オーズ、電王Sが立っていた。

「あの人達って、最近僕達の街を助けているよね？」

「本当に来てくれた！！！」

「頑張れ、仮面ライダー！！！」

仮面ライダーの登場に子供達は喜んでいた。

「仮面ライダー、ディケイド！！」

「仮面ライダー..... クウガ！！！」

「仮面ライダー キバ！」

「仮面ライダー、電王！！！」

「仮面ライダー..... オーズ！！！」

ディケイドS達は名乗りながらそれぞれの武器を構える。

「戦闘員！！」

「ショックカーライダー！！」

「やれ！！」「

ムースファンガイアとムースオルフェノクの合図と共に怪人達はライダー達に襲いかかる。

「いくぜ、いくぜーー！」

電王Sを先頭にライダー達も怪人達に立ち向かう。

「頑張れ、仮面ライダーーー！」

「いけ、仮面ライダーーー！」

「怪人なんかに負けるなーー！」

子供達はライダー達を応援していた。

「はあっーー！」

「ぐつーーー！」

オーズはトライクロードマースオルフェノクを圧していく。

「ハツーーー！」

「ふんーーー！」

ディケイドSのライドブッカー ソードモードとマースファンガイアの剣がぶつかり合つ。

「「喰らえーーー！」」

一体のショックカーライダーは指先から弾丸を電王S、キバKに発射する。

「「くつ！！」

キバKはザンバットソードで電王Sはテンガツシャー ソードモードで弾丸を防ぐ。

「はつ！！」

「がつ！！」

もう一体のショッカー・ライダーは短剣でクウガMを切り裂く。

「今だ！！」

「「「イーーー！」」

ショッカー・ライダーの合図と共にショッカー・戦闘員達は孤児院の中に入ろうとするが。

「イーーー！」

突然、ショッカー・戦闘員達に火炎弾が命中する。

「面白そうだな。」

「僕達も混ぜてくれるかな。」

「行くよ、ガメル！」

「俺、子供達、守る！」

「言つておくが、俺はさつさとアイスを食いたいからな！！」

火炎弾が放たれた方向には怪人の姿になつた、ウヴァ、カザリ、ガメル、メズール、アンクがショッカー・戦闘員に立ち向かう。

「 「 「 おのれええ！！」」

ショッカーライダー達はアンク達に弾丸を放とうとするが。

「えーい！！」

「があつ！！」

数発の弾丸がショッカーライダー達に命中する。

「だいぶ、面白くなつていいね。」

「俺達も行くからな！！」

「答えは聞いてない！」

「俺達もいくぜ！！」

ディケイドSは一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

「FINAL - FORM - RIDE KU、KU、KUUG
A」

「翔夜、そのカード..... やっぱりコレか！！」

クウガMはディケイドSが取り出したカードを見て焦るが、その前にクウガMはクウガゴウラムに変形する。

「文句は無しだからな！！」
「翔夜、後で覚えていろよ！..」

ディケイドSは一枚のカードを取り出し、クウガゴウラムはムースファンガイアに体当たりして、そのまま顎でムースファンガイアを捕らえ空中に昇つっていく。

「どす！」「ーー..」

「ふん！..」

一体目のショッカーライダーに向かつてキンタロスは突っ張り、ガメルはパンチでショッカーライダーを吹つ飛ばすと。

「トドメよ！..」

「があつ！..」

メズールの水流をショッカーライダーを貫き、ショッカーライダーは爆発する。

「いくよ、猫さん！..」

「カザリだよ！」

リュウタロスとカザリは素早い動きで二体目のショッカーライダーを翻弄しリュウタロスはリュウボルバーを取り出しショッカーライダーに向けて弾丸を放つ。

「ぐつ！..」

弾丸を喰らいショッカーライダーは怯む。

「そろそろ、決めようか！」
「ぐあつ！！」

ショッカーライダーが怯んだ隙にカザリは鉤爪でショッカーライダーを切り裂き、ショッカーライダーは爆発する。

「決めるよー！」
「どうでも良いから、早く終わらせるぞーー！」
「お前は相変わらずだな、アンクーー！」

ウラタロス、アンク、ウヴァは三体目のショッカーライダーと対峙していた。

「ハツーー！」
「喰らえーー！」

アンクは火炎弾、ウヴァは雷撃をショッカーライダーに放ち、ショッカーライダーは一人の攻撃で圧されると。

「はああつーー！」
「ショッカーディー、万歳ーー！」

ウラタロスはウラタロッドでショッカーライダーを切り裂き、ショッカーライダーは万歳するとそのまま爆発する。

電王Sは『テンガツシャー』を構え、ライダーパスを『テンオウベルト』にセタッチする。

〔FUEL CHARGE〕

「俺達の必殺技！！」

「はあっ！！」「..」

電王Sの声と共にザンバットソードを持ったキバKとメダジヤリバーを持つたオーズはムースオルフェノクに向かって走り。

「ハツ！！」

「せいや！！」

そのままムースオルフェノクを斬りつけ。

「いくぜ、いくぜ！..！」

「ぐああ！！」

電王Sは『テンガツシャー』でムースオルフェノクを切りまくる。

「クリスマスバージョン！！」

「ぐああっ！！」

電王Sの必殺技、エクストリームスラッシュが決まる、ムースオルフェノクを斬った所がクリスマスツリーの形になると、ムースオルフェノクは爆発する。

「FINAL -ATTACK -RIDE.....KU、KU、KUU
GA」

ディケイドSは一枚のカードをディケイドライバーに装填すると、クウガゴウラムはムースファンガイアを顎で挟みながらもディケイドSに向かって降下し、ディケイドはムースファンガイアに向かってキックを放つ。

「はあああつ！！」

「おのれえええ！！」

ディケイドアサルトが決まり、ムースファンガイアは爆発する。

「やつたー！！」「

「仮面ライダー、凄い！！

「一緒に戦っていた怪人達も格好いい！！」

子供達はライダー達やアンク達の勝利に喜んでいた。

さてと、クリスマスパーティーを再開しようか？

「そうやな。」

「僕、まだクリスマスを楽しみたい。」

ウラタロス、キンタロス、リュウタロスは急いで孤児院に戻る。

「俺達も戻るか？」

「子供達も待つていいし。」

「メズール、行こう。」

「そうだね、ガメル。」

「さて、アイス食べよう。」

ウヴァ、カザリ、ガメル、メズール、アンクは子供達に見られないように人間の姿に戻るとウラタロス達の後を追つ。

(俺達も行こうか、モモタロス?)

「そうだな。」

「クリスマスパーティーはこれからだしね。」

電王とオーズは子供達に見られないように変身を解き孤児院に戻る。

(雄司君と翔夜君、何処まで行つたんだ?)

キバKは周りを見渡しながらディケイドとクウガゴウラムを捜すが、二人は居なかつた。

「では、再びメリークリスマス!!」

「メリークリスマス!!!!」

ショックター帝国の怪人達を倒した和樹達は遅れてきたヴォルケンリツターの面々や孤児院の子供達と共にクリスマスパーティーを再開していた。

ライダー隊 格納庫

「翔夜、本当にやるつもりか？」

「せつかくのクリスマスだ、子供達を喜ばせるぞ。」

ライダー隊の格納庫ではクウガ、コウラムとディケイドが何かの準備をしていた。

夢乃孤児院

その頃、夢乃孤児院ではモモタロスが着ぐるみを着忘れて子供達を泣かせたり、アンクとヴィータがアイスの奪い合いを始めたり、シグナムがウヴァーと真剣勝負を始めたり、カザリとリュウタロスが子供達を巻き込んでダンス勝負を始めたりしたが。

「「アンタ達、いい加減にしなさい！」「

「「「ハイ……オーナー」「」」

メズールとハナの制裁で怪人達は大人しなる。

「シグナムとヴィータもやで。」

「申し訳ない、主はやて。」

「ごめん、はやて。」

はやてもシグナムとヴィータに説教を始めていた。

数分後

紅牙のバイオリンのライブが始まった。

「紅牙君の演奏、癒されるね。」

「そうやな、すずかちゃんが好きになるのも解るわ。」

「はやてちゃん／＼／＼／＼／＼」

フェイト、はやて、すずかは紅牙の演奏を聞きながら話をしていた。

「偶にはこうやって、楽しむのも良いですね。」

「そうだね、子供達を見ていると絶対にショックカー帝国からこの世界を守らないといけないと思うよ。」

健太郎と和樹はジュースを飲みながら子供達の幸せな顔を見て決意を新たにする。

「翔夜に雄司君、遅いね。」

「あの二人、何しているんだろう?」

なのはとアリサは翔夜と雄司の心配をしている。

「外に仮面ライダーときのクワガタが居る……。」

ひとりの男の子が外を見て驚いていた。

「 「 「えつー?」 」 」

((もしかして!?))

男の子の言葉に全員外見ると。

「メリークリスマス!...」

(翔夜、あまり動くとバランスが崩れて落ちる!...)

プレゼント袋を持ったディケイドUがクウガゴウラムが引っ張るソリに乗つて空を飛んでいた。

(((翔夜君に雄司君!?)))

(あの二人、何しているの!?)

(もしかして、サンタクロースのつもり?)

ディケイドU達に驚く面々、アリサは一人にツッコミをいれ、なのはサンタクロースのつもりだと思つていた。

「メリークリスマス!...」

「 「 「メリークリスマス!...」 」 」

ディケイドUはプレゼント袋を持ちながら子供達に挨拶する。

「仮面ライダーサンタからみんなにプレゼントだ！…」

「ディケイドSはそう言つとプレゼント袋からプレゼントを取り出しこそ供達にプレゼントを渡す。

「もしかして、一人が居なかつたのはこの為だつたのかな？」
「そうかも知れないね。」

アリサとすずかは一人が居なくなつた訳に納得していた。

「それより、あのプレゼントटビつしたんだら？？」

紅牙は「ディケイドSが配つていたプレゼントに疑問を感じてゐる」と。

「怪人達を倒した後、前園さんからの連絡で鴻上会長と「テレオーライナー」のオーナーが子供達に渡してくれつてあのプレゼントを用意したんだつて。」

クウガゴウラムからクウガMの姿に戻りそのまま変身を解いた雄司が紅牙達に説明する。

(（鴻上さん、ケーキ以外にも用意していたんだ！…）
（（オーナーも、いつの間に！…）

鴻上とオーナーのサプライズに驚く面々。

彼らの不思議なクリスマス。

色々な事が起こった継承者と魔法少女のクリスマスはこれにて終わり。

Merry Xmas

番外編 クリスマスパーティーとコスプレと大バトル（後書き）

と言つわけで、仮面ライダー & リリカルなのは - - 繙承者と魔法少女 - - のクリスマスストーリーが終わりましたが、いかがでしたでしょうか？

次回もまた番外編をやる予定です。

それでは、メリークリスマス！！

感想と質問を待っています。

番外編 大晦日と継承者と魔法少女（前書き）

「今・年・最・後・の・投・稿」 タ・ト・バ風に

雄司「今のは！？」

翔夜「気にするな。」

和樹「いや、気になるよーー！」

アンク「今の歌は気にするなーーー！」

番外編 大晦日と継承者と魔法少女

今日は12月31日、大晦日

海鳴市 真導写真館

「今年も後ちょっとで終わるのか。」

「あつといつ間だね。」

真導写真館では翔夜となのはが「タツ」に入つて暖まつっていた。

「翔夜、栄市郎さんとナツミちゃんは？」

なのはは翔夜に尋ねる。

「ナツミは友達の家に泊まりに行つて、じいさんならライダー隊の司令官達と温泉に行つているよ、それで俺が留守番している訳。」

翔夜はそつ言いつと/or/カンを食べる。

「そなんだ。」

「それより、何で居るんだ？」

翔夜はなのはに尋ねる。

「居たらダメ？」

上田遣いで翔夜に尋ねるなのは。

「別に良いけど――――――（だから、その時は反対だらう……）」

翔夜はなのはの顔を見て顔を真っ赤にする。

「そう言えば、雄司君は？」

なのはは翔夜に尋ねる。

「雄司なら今頃、アリサの所で執事をやつているだろう。」

翔夜はそう言いつぶす茶を飲む。

海鳴市 市街地

「次はあの店だね。」

「まだ買つのかよ！？」

市街地ではアリサと大量の荷物を持つた執事服を着た雄司が歩いていた。

「」の後、紅牙君の家で忘年会をやるんだから。」

「だけど、コレは買はずだらう……！」

雄司は大量の荷物をアリサに見せながら叫ぶ。

「別に良いでしょ、バカ雄司！！」

「バカは無いだろ、バカは！！」

アリサと雄司は口喧嘩をしている。

「喧嘩している場合じゃないね、早く買い物を済ませましょ。」

アリサはそう言つと近くの店に入つていく。

「オイ、言つ出したのはお前だろ！...」

雄司はアリサの後を追いかける。

海鳴市 キヤツスルドラン

「紅牙君、書斎の掃除終わったよ。」

「二つとも王の間の掃除が終わつたといふだよ。」

「後は雄司君達が買い出しから帰つてくるだけだね。」

「それにしても、二人とも遅いな。」

すずかは雄司とアリサの心配をする。

「とりあえず、他のみんなを呼ぼうか？」

「そうだね。」

紅芽とすずかは他のみんなを呼ぼうとする。

海鳴市 海鳴神社

「うーん、やつぱり人が多いな。」

「そうだね。」

はやてと健太郎は海鳴神社で御参りに来ていた。

「健太郎君は何を願いしたん？」

はやては健太郎に尋ねる。

「この平和な時間が何時までも続いて欲しい、そうお願いしたよ。」

健太郎はやつと空を見る。

「私はみんなと一緒に居る時間が何時までも続いて欲しい、そういう願いしたよ。」

はやははやうと健太郎の顔を見ないようにする。

(ダメや、健太郎と一緒に時間が続いて欲しいなんて言えない／＼／＼＼＼)

はやはは顔を赤くする。

「行こうか、はやてちゃん！」

健太郎はそう言つと神社から出で行く。

「待つてや、健太郎君！」

はやはは健太郎の後を追いかける。

「今年も後ちょっとだね。」

「そうだね、フェイトさん。」

公園ではフェイトがクリスマスに鴻上から貰ったカンドロイドで遊び和樹を見ていた。

「和樹君、アンク達は？」

フェイトは和樹に尋ねる。

「アンク達なら、家の大掃除をしているよ。」

和樹はバッタカンを楽しそうにじりながらフェイトの質問に答える。

「ウゥア達も来月から僕の家に住む準備をしてるから、来年は大変だよ。」

和樹は苦笑いしながらアカカンを手に乗せる。

「そうだね。」

「でも、来年はそれ以上に楽しい一年になると思う。」

苦笑いするフェイトに和樹はタカカンを飛ばしながらフェイトに言い放つ。

「そろそろ紅牙君達の所に行こつか？」

フェイトはそう言つと紅牙達が居るキャッスルランに向かつ。

「ちよっと、待っててくださいここフロイドをさーー。」

和樹は遊んでいたカンドロイドを回収するとフロイドの後を急いで追いかける。

「今年も終わりだね。」

海鳴市のあるビルの屋上では零が夜空を見ながら珈琲を飲んでいた。

「来年は驚くだらうな…………翔夜ー。」

零は指鉄砲を夜空に向ける。

番外編 大晦日と継承者と魔法少女（後書き）

次回、仮面ライダー&リリカルなのは

總刃

「おばあちゃんが言つていた、俺は王の道を往き、
総てを貫く刃、

雄司

(あの転校生、翔夜と同じ匂いがする。)

零

「君、可愛いね。」

なの
は

「ふええつ！？」/ / / / / / / / / /

フェイト

あれって、仮面ライダー

和樹

「カブト！？」

次回、『波乱を呼ぶ者』

感想と質問を待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3402v/>

仮面ライダー&リリカルなのは - - 繙承者と魔法少女 - -

2011年12月31日16時54分発行